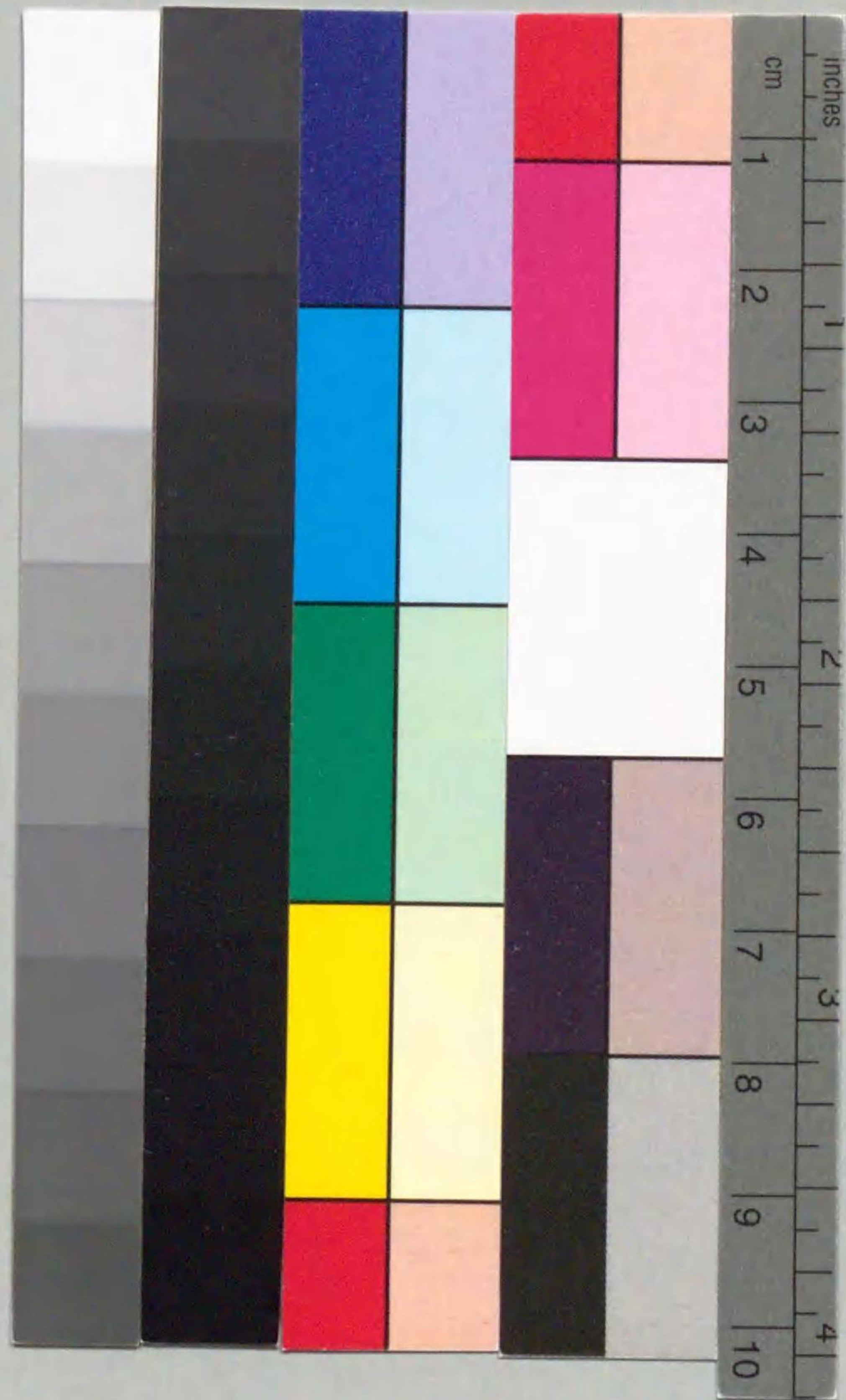


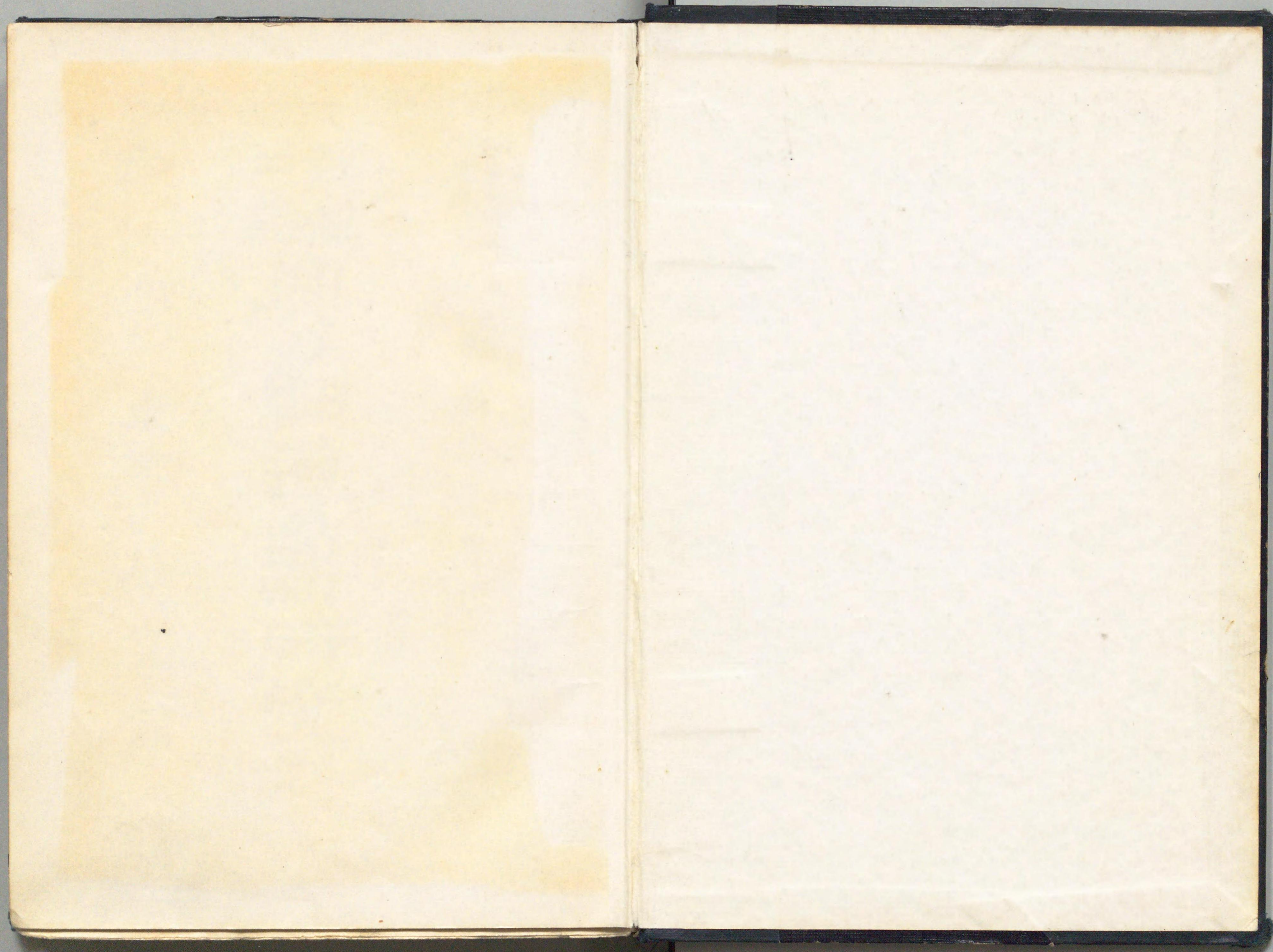
915.5
M3750o
(t21)



00208620



9
M
C



第四高等學校
教授 文學士

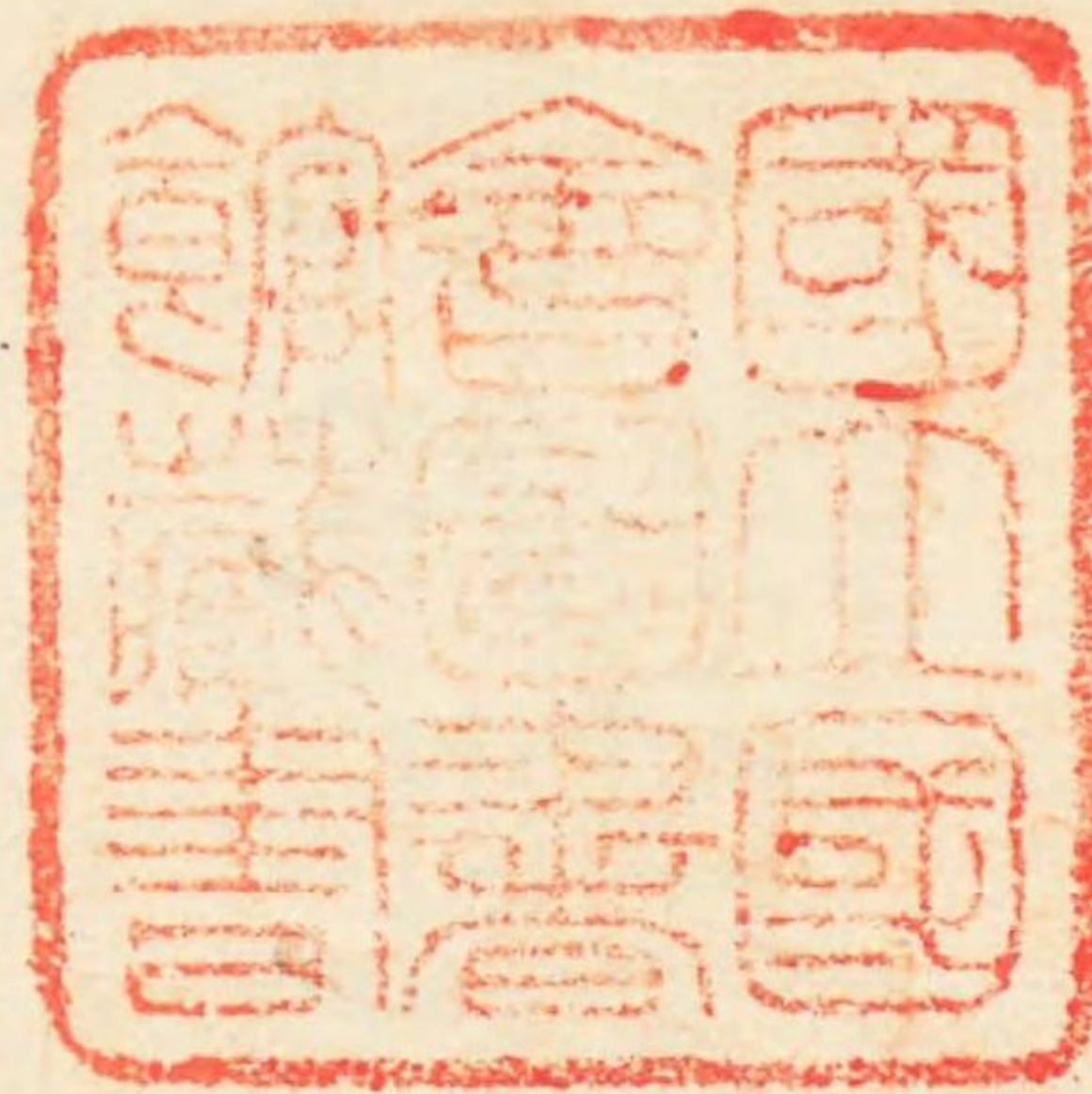
大藪虎亮著

詳解
口譯
奧の細道の新研究

訂
正
版

東京 公文館

915.5
M375 〇 (104)



208620

齋藤實盛兜及全昌寺

實盛の兜は加賀國小松町太田神社所藏である。芭蕉は此處で之を觀、詳細に記してゐる。

無慙やな甲の下のきりくす

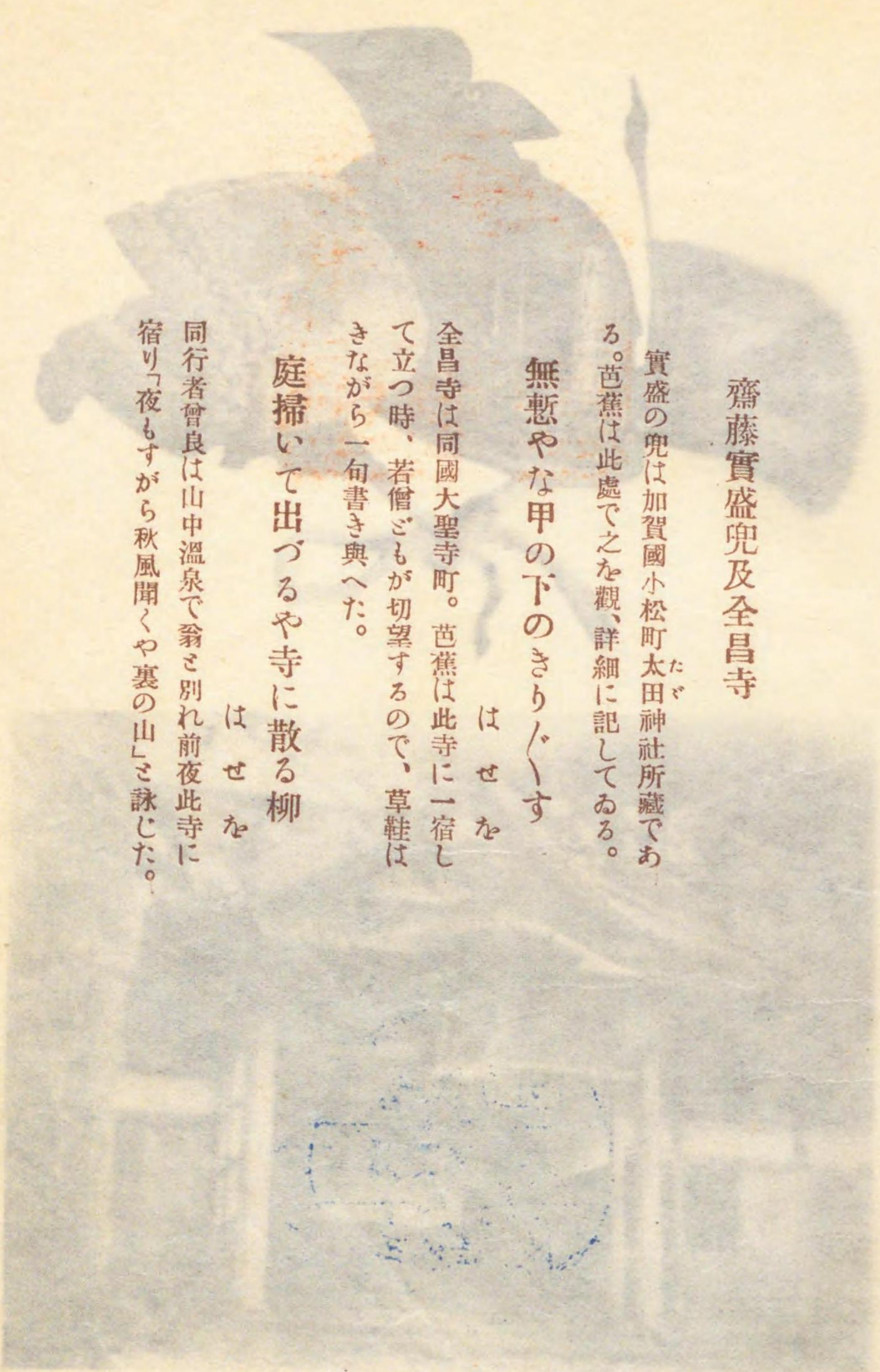
はせを

全昌寺は同國大聖寺町。芭蕉は此寺に一宿して立つ時、若僧どもが切望するので、草鞋はきながら一句書き與へた。

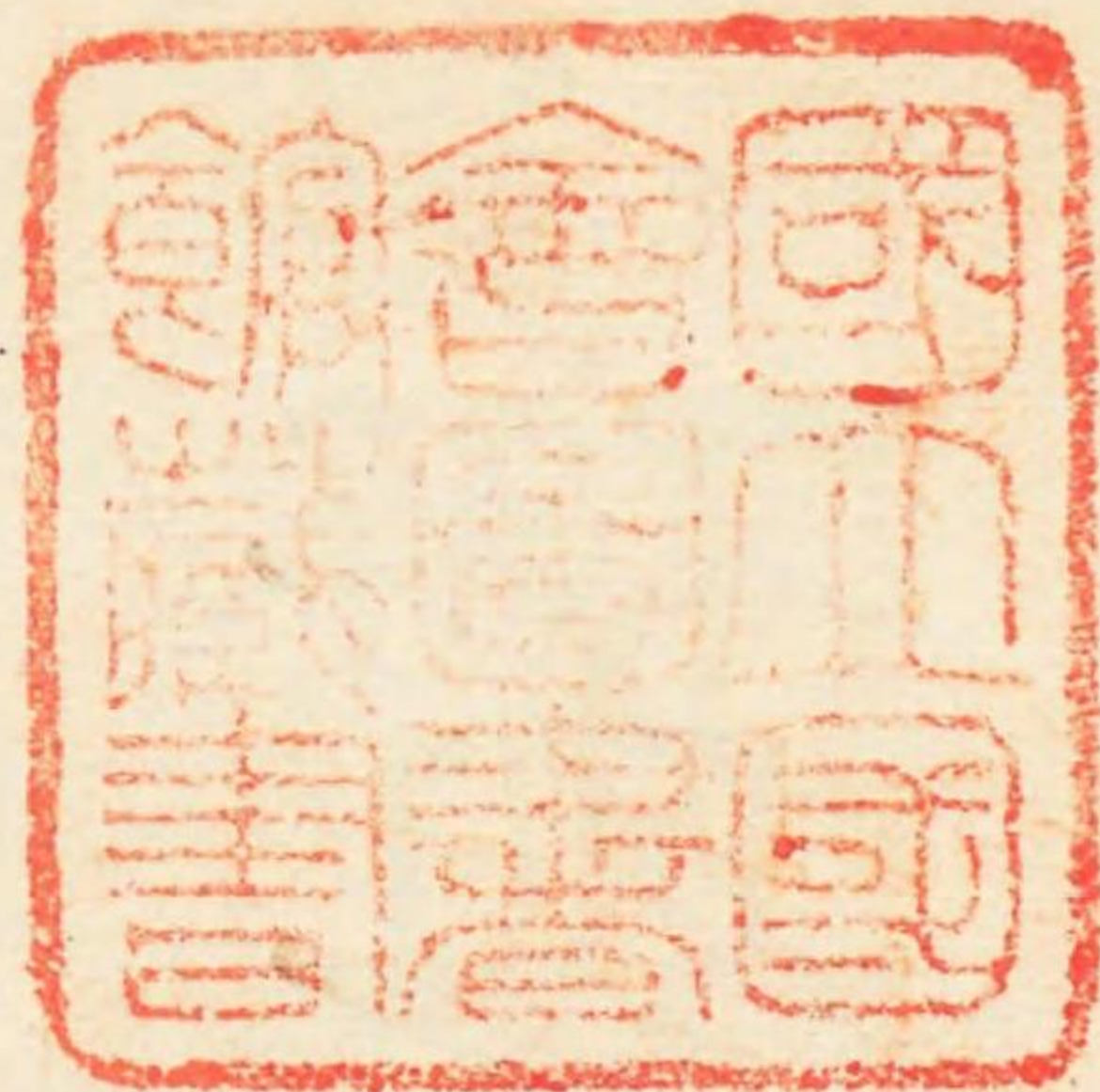
庭掃いて出づるや寺に散る柳

はせを

同行者曾良は山中温泉で翁と別れ前夜此寺に宿り「夜もすがら秋風聞くや裏の山」と詠じた。



915.5
M378 8 (04)



208620

齋藤實盛兜及全昌寺

實盛の兜は加賀國小松町太田神社所藏である。芭蕉は此處で之を觀、詳細に記してゐる。

無慙やな甲の下のきりくす

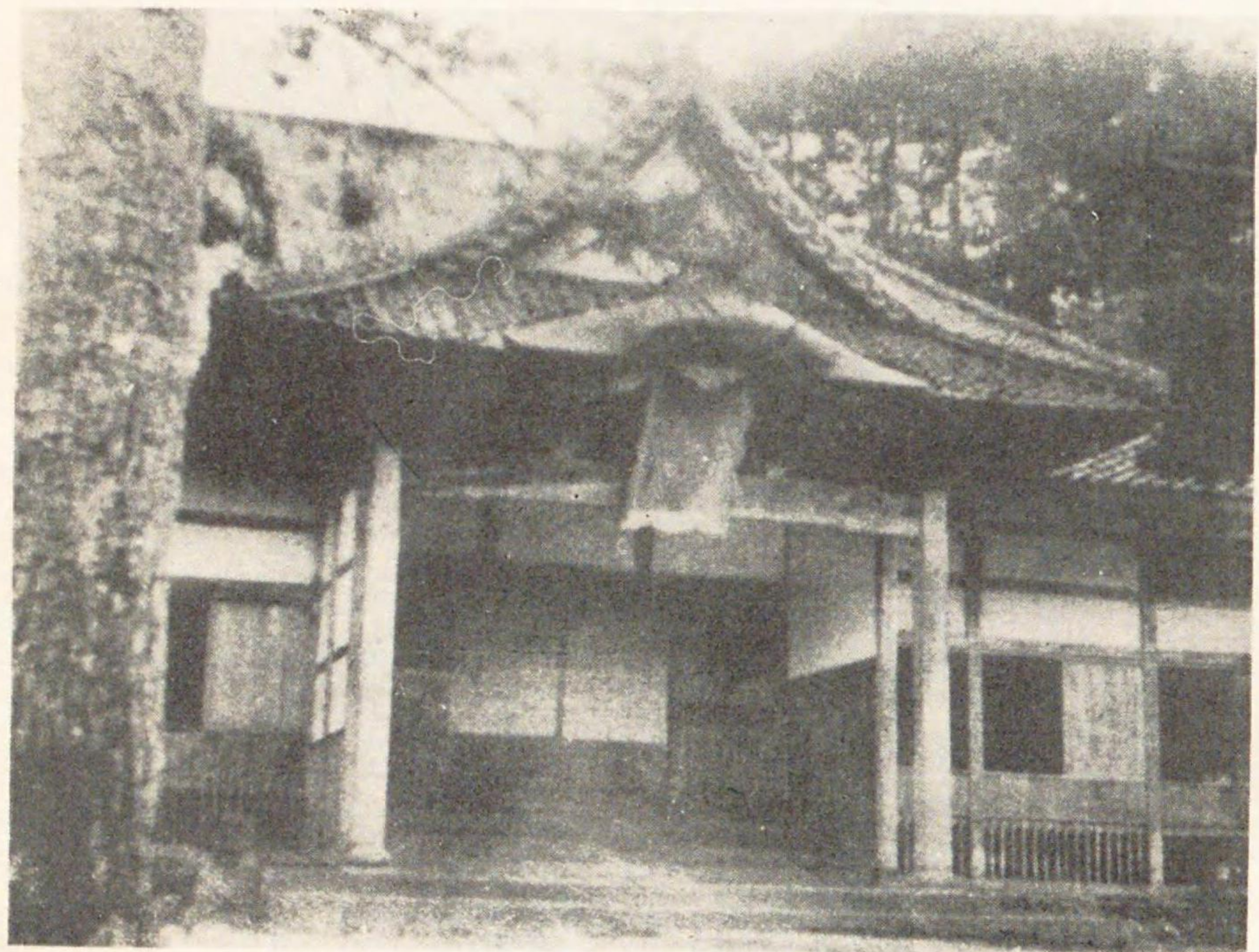
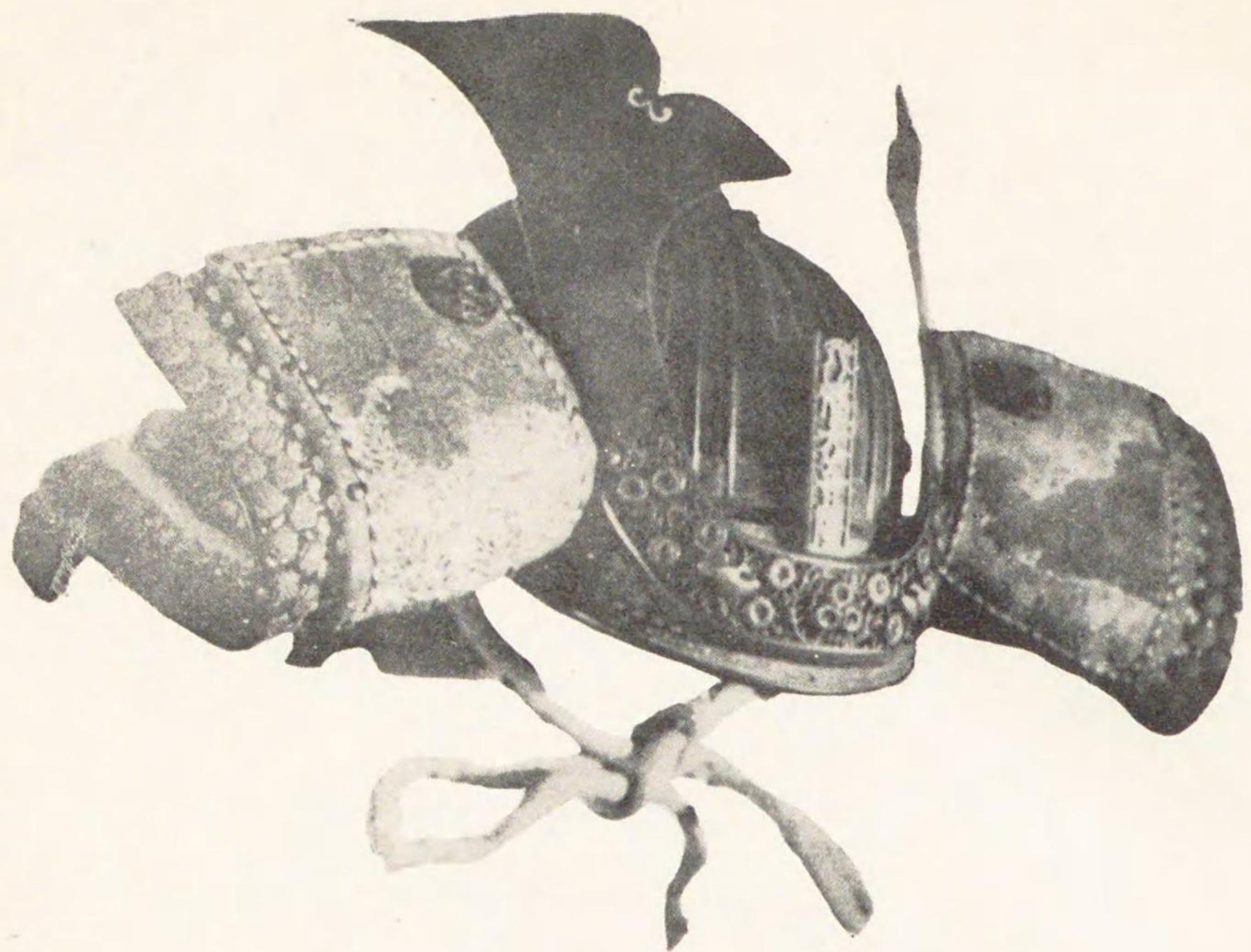
はせを

全昌寺は同國大聖寺町。芭蕉は此寺に一宿して立つ時、若僧どもが切望するので、草鞋はきながら一句書き與へた。

庭掃いて出づるや寺に散る柳

はせを

同行者曾良は山中温泉で翁と別れ前夜此寺に宿り「夜もすがら秋風聞くや裏の山」と詠じた。



當り「齊」すは「野風間」守「真」の山「を」精「り」す。
同「計」齊「會」真「山」中「臨」泉「を」種「を」照「り」備「齊」此「寺」に

同「計」

親「計」り「て」出「へ」る「寺」志「に」精「る」時

を「は」は「る」一「日」昔「を」興「へ」す。

了「立」へ「却」て「昔」曾「ら」し「は」世「界」す「る」の「ア」草「精」り
全「昌」寺「に」同「調」大「聖」寺「同」。芭「蕉」此「寺」に「一」宿「し」

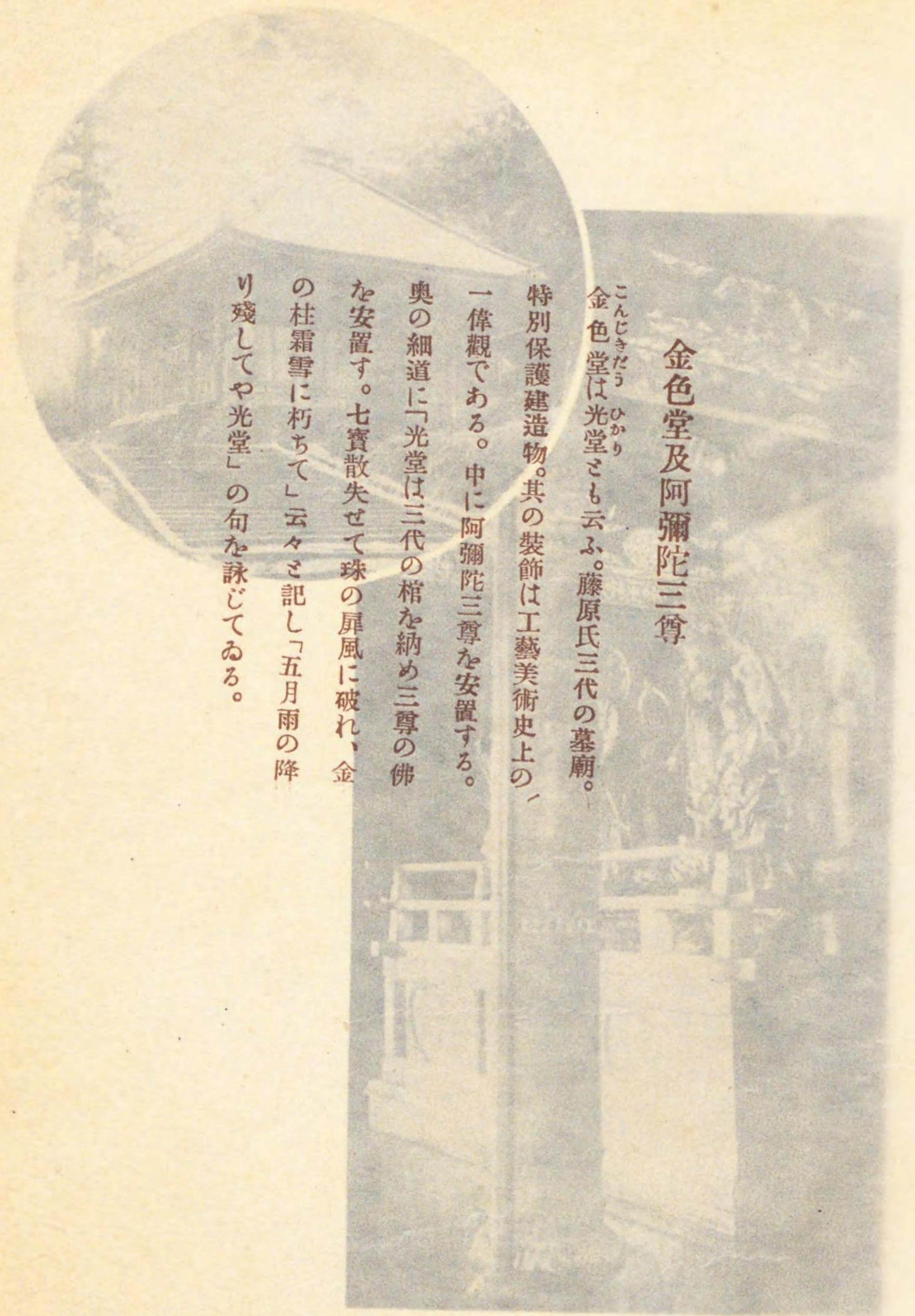
同「計」

無「恙」や「は」甲「の」下「の」ま「り」し「す

る。芭「蕉」此「寺」に「一」宿「し」精「神」に「歸」り「了」る。

實「徳」の「史」に「記」賢「園」心「性」門「太」田「輔」指「引」給「ふ

齋「藤」實「徳」史「及」全「昌」寺



金色堂及阿彌陀三尊

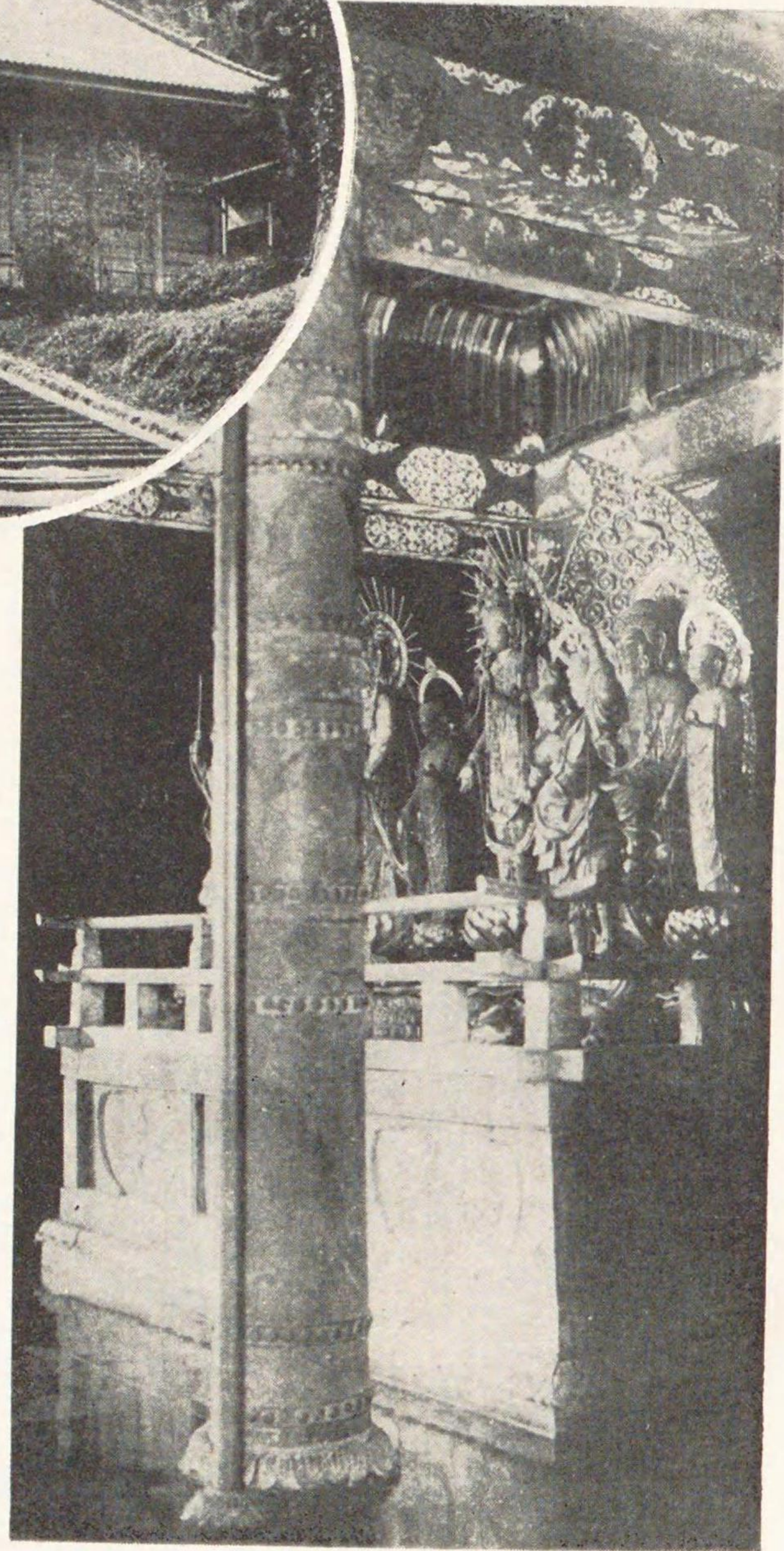
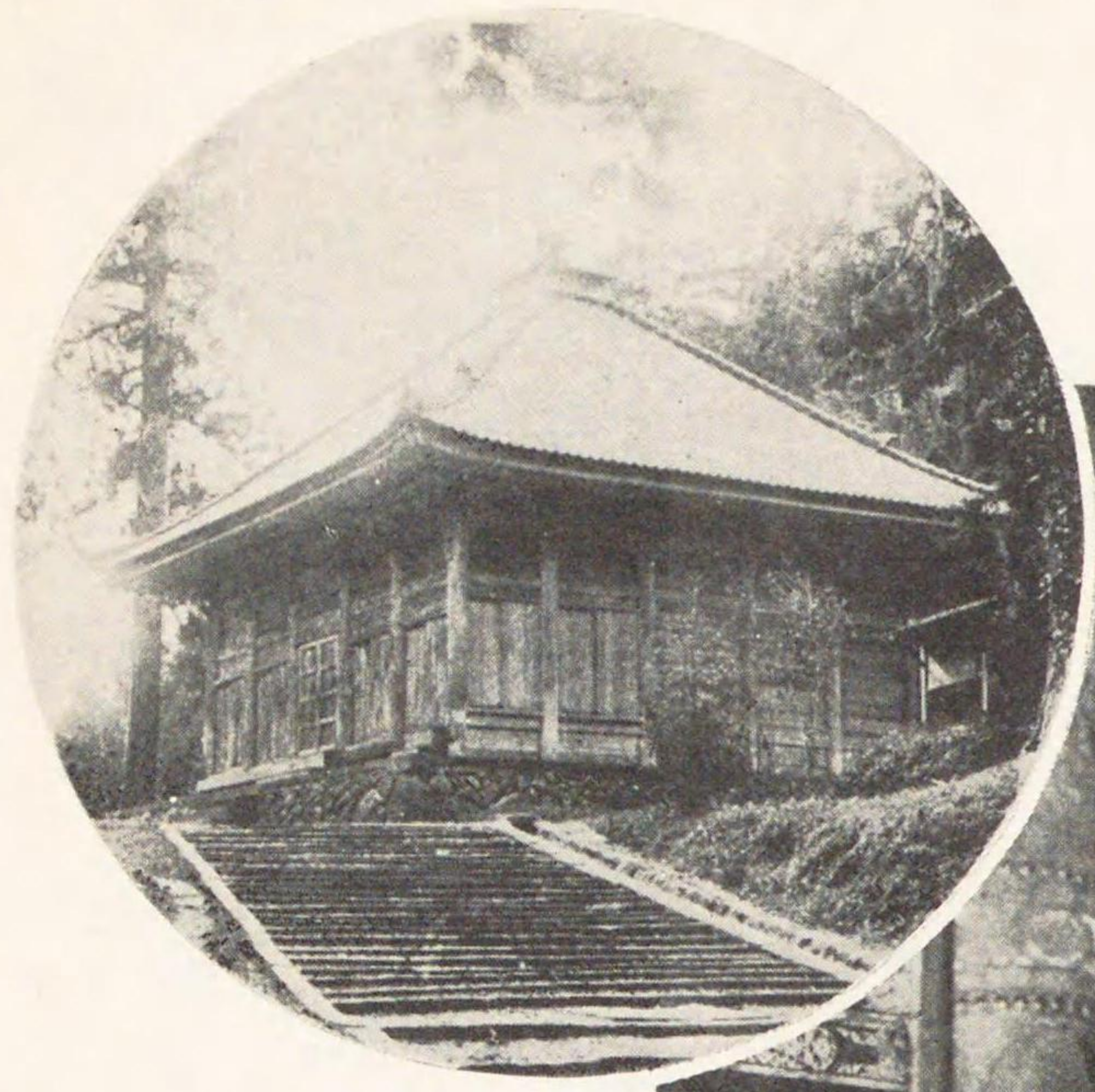
金色堂は光堂ひかりとも云ふ。藤原氏三代の墓廟。

特別保護建造物。其の裝飾は工藝美術史上の
一偉觀である。中に阿彌陀三尊を安置する。

奥の細道に「光堂は三代の棺を納め三尊の佛
を安置す。七寶散失せて珠の扉風に破れ、金
の柱霜雪に朽ちて」云々と記し「五月雨の降
り残してや光堂」の句を詠じてゐる。

金色堂及阿彌陀三尊

金色堂は光堂ひかりとも云ふ。藤原氏三代の墓廟。特別保護建造物。其の裝飾は工藝美術史上の一偉觀である。中に阿彌陀三尊を安置する。奥の細道に「光堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の屏風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて」云々と記し「五月雨の降り残してや光堂」の句を詠じてゐる。



「致」の「光堂」の位を稱する。

の掛霽雲の位を「正日雨の判
式安置す。中實端夫の終の願風」の位を、金

奥の願風「光堂」三升の位を、三尊の位

一尊置する。中「國體」三尊を安置する。

神限附懸懸懸。其の裝飾は工藝美術史上の

金吾堂は光堂とも云ふ。願風三升の基障。
二ノ位を、ひな

金吾堂又國體三尊

911.32(0953a21)
915.5 M 3750
(7217)

凡例

- 一、本書は芭蕉が素龍に清書させた素龍清書本(井筒屋刊行元祿版枳形本)を底本となし、去來書寫本、一葉集本、七書本其の他を以て比較した。解題傳本の條参照。
- 一、本文を六十段に分ち、新たに項目を立てたのは便宜上のため過ぎない。
- 一、初學のため「口譯」を設け、かつ文脈をたどるたよりともなした。この種の文は省筆が多くて疑義を生じ易いからである。
- 一、語釋はなるべく多くの語をえらんで、解釋し、解説の繁雜に亘るものは各章の備考に述べた。
- 一、故事熟語等はなるべく原書についてその出所を明らかにした。
- 一、假名遣は便宜上之を正し、送假名の省いてあるのは補った。
- 一、この旅行中、芭蕉、會良が各地でよんだ、本文以外の俳句を集めて載せた。

一、この旅行中、芭蕉が各地で催した連句も網羅しようとした。連句は本文には省かれてゐる。幽句は本文の参考となるのみならず、當時の地方俳諧の有様を知るに便である。

一、表紙の表の繪は芭蕉と曾良との旅姿で、「鼈頭奥の細道」の挿繪にあるもので、與謝蕪村の筆である。

一、奥の細道の註釋者は維新前のものでは、蓑笠庵梨一著、奥細道菅菰抄、上下二冊、安永七年刊。春星堂鶯宿著、鼈頭奥之細道、上下二冊、安政五年刊。其日庵錦江著、奥細道通解、二冊、安政五年書などがある。菅菰抄は上卷は越中富山の俳士直生が奪つて返さないで、新たに心覺えをたどつて草したものである。俳句の解はしてない。鶯宿のは頭註のみで、あまり参考にならないが、蕪村の畫を摸刻した挿繪に雅致があつておもしろい。通術は本畫脱稿までに見る機を得なかつたが、萩原蘿月氏校訂で出版された。一卷缺けてゐて、太田神社までしかないのは遺憾である。他日發見さ

れたいものである。維新後にも註釋書は數種出てゐる。以て奥の細道がいかに味讀されようとしてゐるかがわかる。

一、卷頭に雞肋として「解題」、卷尾に「奥の細道日程考」「語句索引」「俳句索引」「連句索引」「連句人名索引」「略圖」其他を載せた。

詳解 奥の細道の新研究

目次

奥の細道解題……………一

一 奥の細道の説明……………一

二 奥の細道の味ひ……………七

三 傳 本……………三

本文……………一

一 月日は百代の過客にして……………一

二 海濱にさすらへ……………三

三 彌生も末の七日……………八

四 今年元祿二とせにや……………三

五 室の八島に詣づ……………一五

六 卅日日光山の麓に泊る……………二二

七 卯月朔日御山に詣拜す……………二五

八 黒髪山は霞かゝりて……………二七

九 那須の黒はねといふ所……………三一

一〇 黒羽の館代浄法寺何がし……………三五

一一 修験光明寺と云ふ有り……………四八

一二 是より殺生石に行く……………五五

一三 心許なき日數かさなるまゝに……………六〇

一四 とかくして越え行くまゝに……………六四

一五 此の宿の傍に大きな栗……………七三

一六 等躬が宅を出でて……………七八

一七 二本松より右にきれて……………八二

一八 月の輪のわたしを越えて……………八七

一九 其の夜飯塚に泊る……………九二

二〇 遙かなる行末をかゝへて……………九四

二一 武隈の松にこそ目覺むる心地はすれ……………九九

二二 名取川を渡りて仙臺に入り……………一〇三

二三 かの畫圖にまかせてたどり行けば……………一〇九

二四 それより野田の玉川沖の石を尋ぬ……………一一一

二五 早朝鹽がまの明神に詣づ……………一二六

二六 仰ことふりにたれど松島は扶桑第一の好風にして……………一三〇

二七 雄島が磯は地つゞきて……………一三三

二八 十一日瑞岩寺に詣づ……………一三八

二九 十二日平和泉と心ざし……………一四三

三〇 三代の榮耀一睡の中にして……………一五三

三一 かねて耳驚かしたる二堂開帳す……………一六三

三二 南部道遙に見やりて……………一六七

三三 あるじの云ふ是より出羽の國に大山を隔てて……………一七〇

三四 尾花澤をはなはに清風といふ者を尋ぬ……………一七六

三五 山形領に立石寺と云ふ山寺あり……………一八六

三六 最上川のらんと……………一八九

三七 最上川はみちのくより出でて……………一九四

三八 六月三日羽黒山にのほる……………一九八

三九 五日權現に詣つ……………二〇四

四〇 八日月山ぐわつきんにのほる……………二一〇

四一 岩に腰をかけてしばしやすらふ程……………二一四

四二 坊に歸れば……………二一七

四三 羽黒はくろを立ちて鶴が岡の城下……………二二〇

四四 江山水陸の風光數をつくして……………二二九

四五 其の朝天よく霧れて……………二三四

四六 此の寺の方丈に坐して……………二三六

四七 酒田の名残日を重ねて……………二四一

四八 今日けふは親しらず子しらず犬もどり駒返しなど云ふ北國一の難所を越えて……………二五一

四九 黒部くろべ四十八か瀬とかや……………二五八

五〇 卯の花山うしなくりからが谷を越えて……………二六五

五一 此所たご太田の神社に詣つ……………二八〇

五二 山中やまなかの温泉に行くほど……………二八九

五三 温泉に浴す……………二九一

五四 曾良腹そらを病みて……………三〇一

五五 大聖寺だいしやうじの城外全昌寺といふ寺にとまる……………三〇四

五六 越前の境吉崎の入江を舟に棹さして……………三〇八

五七 五十丁山に入りて永平寺を禮す……………三二二

五八 漸く白根が嶽かくれて……………三二八

五九 十六日空霽れたれば……………三三五

六〇 路通も此のみなとまで出むかひて……………三三九

奥の細道 日程考(巻尾)……………一

俳句索引……………(巻尾)……………一

連句索引……………(巻尾)……………一

連句人名索引……………(巻尾)……………一

語句索引……………(巻尾)……………一

挿圖

芭蕉庵趾……………五

下野國略圖……………三三

磐城岩代略圖……………六一

仙臺市略圖……………一〇九

多賀城碑……………一一〇

陸前國略圖……………一一八

平泉略圖……………一二四

金色堂内陣佛像位置……………一六四

羽前國略圖……………二二九

越中加賀越前略圖……………二五〇

俱利伽羅谷略圖……………二七九

雲板圖……………三〇六

わり(い)のえの圖……………三三六

大垣附近略圖……………三三一

寫真

全昌寺……………卷頭

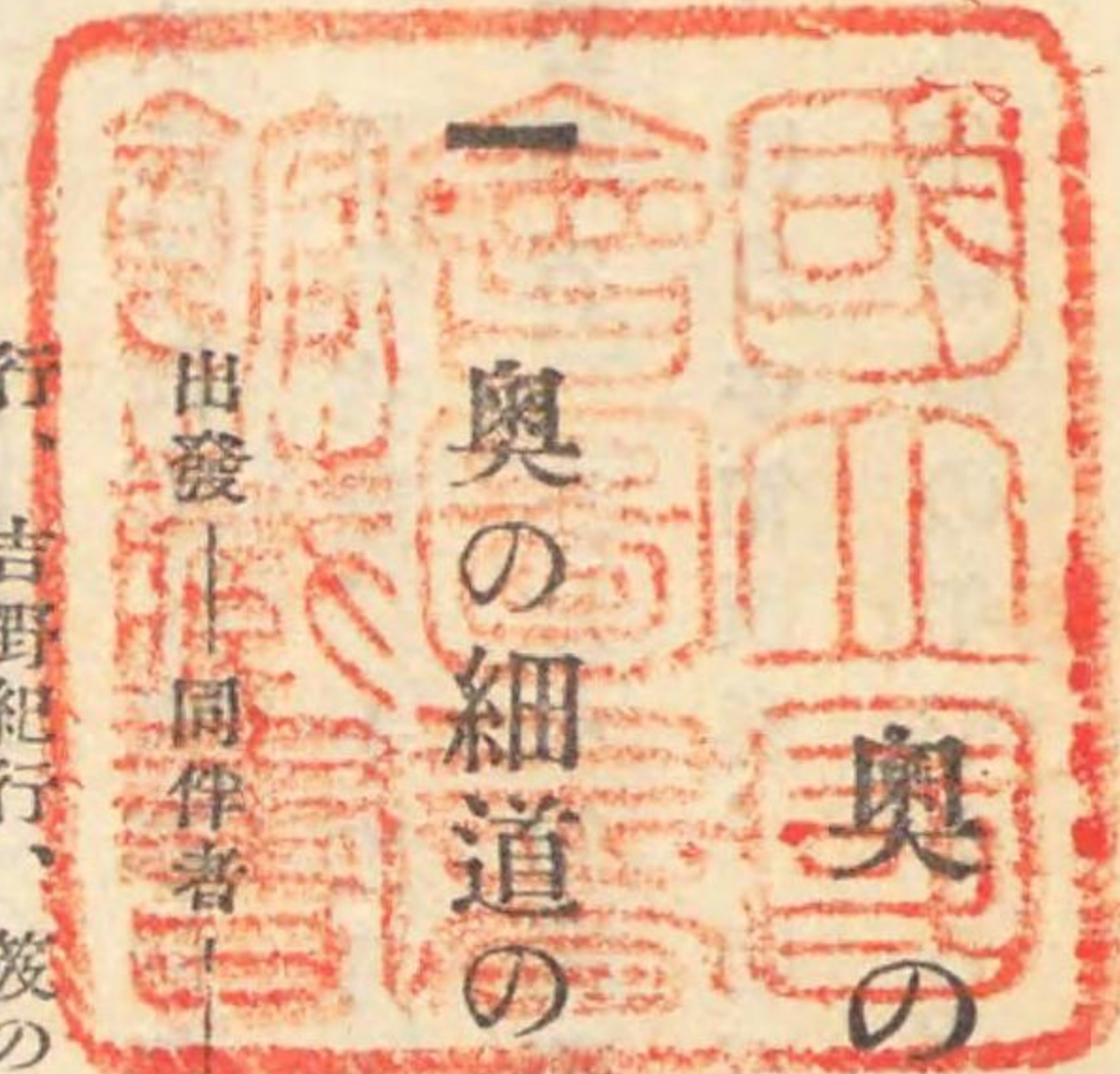
實盛の兜……………卷頭

金色堂……………一三

金色堂阿彌陀三尊……………一六

目次

奥の細道の細道解題



出發——同伴者——歸着——日數——行程——甲子吟行、野ざらし紀行——鹿島紀行——卯辰紀行——吉野紀行、笈の小文——更科紀行——五つの紀行文——奥の細道といふ題名——奥の細道といふ道——經由した主なる名勝——逗留した地——會合した主なる俳人——途中同伴者等の消息——奥羽行脚の熱望。

奥の細道は芭蕉が四十六歳の時、元禄二年三月二十七日、門人河合會良（あきよし）を伴ひ江戸を出發し、奥羽地方を旅行し、北陸道を経由して同年九月三日美濃國大垣に着き、同月六日伊勢に向つて大垣を立つまでの紀行文である。日數約百五十日、行程約六百里である。芭蕉の紀行文の中では文章内容とも最もすぐれたもので、又最後のものである。

是より先、四十一歳の時、貞享元年八月門人千里を伴ひ江戸出發、東海道、伊勢、伊賀上野、大和、山城、近江、美濃大垣、名古屋、十二月上野に歸郷、翌貞享二年二月奈良、京、大津、三月鳴海、名古屋、木曾路、甲斐を経て四月末江戸に歸庵した。此の紀行を甲子吟行と云ふ。貞享元年は甲子にあたる。一名を野ざらし紀行と云ふ。「野ざらしを心に風のしむ身かな」の句による。

次に、四十四歳の時、貞享四年八月、會良、宗波を伴ひ、江戸出發、常陸鹿島の根本寺に遊び、佛頂和尚を訪ね、歸途潮來の本間自準亭に宿つて同月末歸庵した。此の紀行を鹿島紀行と云ふ。これは割合に短いものである。

次に、同じく貞享四年十月初め江戸出發、鳴海に遊び、杜國を伊良古崎に訪ひ、十一月名古屋、十二月上野に歸省、翌貞享五年(九月元祿と改元)二月伊勢參宮、三月上野歸省、三月中旬萬菊丸(杜國)を伴ひ吉野に遊び、高野山、和歌の浦、奈良、大阪、四月中旬須磨、明石に遊んだ。此の紀行を卯辰紀行と云ふ。貞享四年は卯、翌五年は辰の年である。一名、吉野紀行といふ。寶永六年乙州が「笈の小文」と

題して上梓したので、笈の小文とも云ふ。其後、岐阜、鳴海を経て名古屋に滞在。

次に、四十五歳の時、貞享五年(九月元祿と改元)八月中旬、越人を伴ひて名古屋出發、本會路をたどり、姨捨山の月を賞し、善光寺に詣で、九月江戸に歸つた。此の紀行を更科紀行と云ふ。

芭蕉は一生を旅に費した人であるが、紀行文は以上四つに元祿二年の奥の細道を加へて五つである。

奥の細道といふ題名について一言しよう。

元來奥の細道は特定の道を稱するので南北朝頃の「都のつと」には多賀の國府から壇釜へ行く道を稱してゐる。芭蕉が本文に「奥の細道の山際に十符の菅あり」と書いてゐるのも昔の遺稱であり、又戰國時代の廻國雜記には仙臺から松島へ行く道に於て岩切邊を稱してゐる。岩切は多賀の國府が衰へた頃國府の留守所の

在つた所である。又奥羽觀蹟聞老志には笠島邊の道を稱したといふ。笠島は岩沼の西北に當り岩沼は多賀の國府以前の國府であり、岩沼から笠島邊を通り出羽の最上へ出る道があつたのである。是等に依つて見れば、奥の細道と稱した道は奥羽を南北に貫く本街道に對して、國府から脇に折れた道を稱したやうである。本街道を細道とは云はぬ筈である(古昔は實際細かつたにしても)本書の題名は勿論「奥の細道」の山際に云々に依つたのでもあらうが、芭蕉は奥羽街道を或は右に折れ或は左にたどつて名所舊蹟を探つたので、斯かる點からも名づけたものであらう。尙奥の細道の事は語釋の條に詳説する。

訪ねた名勝の重なるものは、日光山、松島、平泉、象瀉等であるが、その他小さい名所舊蹟は出來得るかぎり探つてゐる。

比較的長く滞在した所は下野國黒羽くろはねに約二週間、岩代國須賀川に四五日、羽前國羽黒山に五泊、同國酒田に四五日、酒田から象瀉見物に行き、再び酒田に

歸り約十餘日、加賀國金澤に十二三日、同國山中温泉に約一週間、美濃國大垣に四日逗留してゐる。卷尾に附する奥の細道日程考参照。

此の旅行中芭蕉が會つた各地の主なる俳人は、黒羽の桃雪、桃翠、須賀川の等躬、栗齋、羽前國尾花澤の清風、同國新庄の風流、同國大石田の一榮、同國羽黒山の呂丸、同國鶴岡の重行、同國酒田の不玉、加賀國金澤の北枝、小春、越前國福井の等裁、美濃國大垣の如行、荊口、此筋、木因、其他路通、越人等である。

曾良は身體強健であるので、師芭蕉の身邊を世話するため同行したのであるが、加賀の山中温泉滞在中、腹を痛めたので芭蕉と別れて一足先に出發し、伊勢國長島の縁者をたよつて行つた。芭蕉は一人になつたけれども、金澤からは北枝が山中に案内して來てゐるし、又山中を立つ時も同行して越前の松岡まで見送つてゐる。福井では舊知等裁の家に二泊し敦賀まで等裁が見送つた。敦賀には美濃の路通が出迎に來たので、共に大垣に向つたのである。

芭蕉はかねて奥羽行脚を志してゐたが、前年頃から己に決心してゐた。「治郎兵衛物語」に云ふ「翁も翌年は奥羽のかたに飛杖の志のよし、是は一年はかゝり給ふべきなれば、殿様よりも、兼て病身の事也、殊に奥羽は東北の果なれば、寒氣にならぬ中に歸郷いたすべしなど、半左衛門殿にも仰せ有りけるよし、其趣内々江戸へも申贈られけるとなん」と記してゐる。殿様は藤堂侯、半左衛門は芭蕉の兄である。芭蕉は病身だから人々も奥羽行脚を氣づかつたのであるが「われいつも一處ひとところに居つき候へば積聚ひたひたの事ゆるゑに悩みもあれど、他國行脚の先々にて一度も積氣ひたひたの惱なし、喰物とても快し、思ひ立ちし事なれば、一度は奥羽の名所は見まくほしと思ひ究めし也。藤堂君より御止とどの事は御深切有難けれども、我僧徒の事なれば君命と申すにてなし、肉兄の事は俗縁の人々の報事にもあらず、一分の風流は他のしる事にあらず。年我と共ならず、時失ふべからず、是非に存念をとけん」と言ひ張るのであつた。積聚、積氣共に胃瘞いせきの事である。芭蕉は時々胃瘞いせきを起した。又痔疾もあつた。かゝる病弱の身で奥羽の大旅行

を思ひ立つたのは彼れの烟霞の癖にほかならぬ。

二 奥の細道の味ひ

此紀行を綴る用意——藝術品——陸奥千鳥——奥羽の旅——心細さ——野ざらしの覺悟——此旅の目的——松島象潟——正風宣傳——名勝の鑑賞——寂しい甘い氣分——名勝へのあこがれ
 平泉以北——外の濱——持病——途中の難義——漂泊の思——白髮の憂——時代——思潮——閑寂——濃厚と淡泊——西行——白露のさびしき味——至誠の人——人情——人格と門人——歌枕の趣味——歌枕の淺薄——芭蕉の態度——傳統的臭味——古典的趣味——文と俳句——文の簡潔——文の妙所——松島象潟の文——技巧——松島賦は偽作——象潟は文より句にまさる——部分部分に妙所がある——杜甫の詩集——山家集——語句と出典と——大阪にて客死

芭蕉は此の紀行を綴るに當つて、時日などは思ひ出したやうに所々しるしたのみであるし、各地で催した連句なども一切省いてゐるし、たとひ名のわか

てゐる舊知の人でも、なにがしと書いて殊更ほかした所もまゝあり、又各地で作つた俳句なども載せたのもあり、載せないのもあり、作つても氣に入らないのは省いたやうである。だから後から讀む人にとつては不便な事が随分多いが、芭蕉は旅行を精密にしるすといふ單なる記録に止めようとするのではなくて、全く此の紀行を藝術品として綴る考のあつた事がわかる。元祿九年に芭蕉の足跡を慕うて旅行した蕉門桃隣の書いた旅行記「陸奥千鳥」卷五などに比べて見ると、その用意や文品などに雲泥の差がある。景色を述べるにしても單に平面的叙述をするのでなくて、苦心し推敲した跡が見え、俳句なども、あとから改めたらしいのが少くない事は、各地でやつた俳諧の發句にその初案らしいのが往々見るので知られる。

奥羽といへば當時にあつては交通不便、都に遠い邊土として誰れしも旅する事を恐れたのである。まして持病のある四十六歳の芭蕉が此の旅行を思ひ立つ

には非常に心細かつたのである。「上野谷中の花の梢やなか又いつかはと心細し」と歎じ「若し生きて歸らばと定なきたのみの末をかけたのも無理はない。「古人も旅に死せるあり」と云つて、旅の空で死ぬる事を覺悟しても、なほ一縷歸庵の望を抱く所に芭蕉の偽らぬ心が見える。甲子吟行の時は「死にもせぬ旅ねのはてよ秋のくれ」と吟じて寂しい微笑を洩してゐる。もとより芭蕉は已に前から旅の空で死ぬる事は覺悟してゐた。貞享元年關西方面に旅立つ時「野ざらしを心に風のしむ身かな」(甲子吟行)と吟じて野べの觸體となる事を期してゐた。それにも拘らず風が吹けばやはり身にしみたのである。「捨てはて、身はなきものと思へども、雪のふる日は寒くこそあれ、花のふる日は浮かれこそすれ」こゝに偽らぬ人情がある。こゝになま悟りに陥らぬ詩人としての世界があつた。

そも、此の旅行は奥羽の二大名勝、松島、象瀉ささかたの見物が大きな目的であつた。「三里に灸するより松島の月まづ心にかゝりて」と云ひ、日光の條で「このたび松島、象瀉の眺共にせんことを悦び」と書いてゐるのでもわかるが、芭蕉が松

島に泊つた夜は、松島の好風に接する事を得た悦びのためか、松島の月に感傷したためか「予は口を閉ぢて眠らんとしていねられず」と書いてゐる。感慨無量であつたのであらう。松島では一句も載せてゐない。松島で作つた二三の句が會良の雪まろけに載つてゐるが、いづれも拙い。象潟では生憎雨に逢つたが、ここで一句「象潟や雨に西施が合歡の花」と吟じてゐる。そして此の二名勝には特に筆を費してゐるやうである。

勿論正風を邊陲の地に宣傳する意志はあつたであらうが、強ひて擴張しようとする俗俳宗匠ではなかつた。大石田で日和を待つ時、此處の俳人たちが新舊二つの俳風に迷つてゐるから指導して頂きたいと云はれたので「わりなき一卷を残しぬ」と云つて、仕方なしに残したと書いてゐる。勿論謙遜の心持もあらうが、單にそれだけではないのである。又白河の關を越えて須賀川の等躬を尋ねた時、「白河の關では一句出来ましたか」と問はれ「長途の苦しみ身心のつかれ、かつは風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかばかしうは思ひめぐらさず」と答へ

て、辛うじて「風流の始や奥の田植歌」を示してゐる。名所舊蹟を尋ねて靜かに冥想の甘さに浸るのが芭蕉に取つては大きな慰みであつたのである。平泉の高館で、五月雨に濕つた草の上に笠を敷いて「時のうつるまで涙を落したのもこの心によるのである。

舊蹟をたづねて寂しい而も甘い氣分に浸らうとする心はかなり強いものがあつた。岩沼の邊で、五月雨のぬかるみ道に疲れながらもなほ道から二里も踏み入つて、そんなに大した所でもない笠島を見ようとしたのもこの心であつた。「奥の細道降りつゝきて、泥にとりつく杖を力に、會良は疲れて行くべくもあらず、我は笠島を見んといふ、同行も亦腹あしきことあり」(二葉集)と云つて、會良を恨んだ事もある。芭蕉は平泉から以北は行かないで、こゝから引返し、尿前關を越えて今の羽前の地に入つたのであるが、世に平泉見物後に泊つた岩手の里を平泉の以北に當てようとする説などもあるが、岩手の里は今の岩出山町で平泉から尿前へかゝる順路に當るのである。芭蕉が平泉から北へ行くのを中止

したのには理由がある。それは平泉から引返して羽前に入り酒田から象潟を見、象潟から秋田街道を通つて外の濱まで見極めようとしたのであつた。幻住庵賦に「……湯殿の御山に袂をぬらす。なほ善知鳥啼く外の濱より、えぞが千鳥を見やらんまでと、しきりに思ひ立ち侍るを、同行會良何がしと云ふもの、多病いぶかしなど袖をひかへるに心たわみて、象潟といふ所より越路の方に赴く」(一葉集)と書いてゐるのでわかる。

かの飯阪温泉の貧家に宿つた時、土間に敷いた藁の上に身を横たへ、燈火も無いので圍爐裏の火影に臥し「蚤蚊にせゝられて眠らず、持病さへ起りて消え入るばかり」になつても、なほ烟霞の癖は彼れを驅つて止まなかつた。「遙かなる行末をかゝへて斯かる病おほつかなしといへど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念道路に死なん是れ天命なりと、氣力聊か取り直したのであつた。旅に暮らす孤獨な芭蕉には、一片の風に誘はれて漂泊の思がやまなかつたのである。「たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して」これが生涯の天職となつたのであ

る。

たま／＼舊知の住む土地では款待もされたやうだが、全く知人も無い所では風來の乞食僧と見られたにちがひない。數百の廻船入江につどひ人家地を争ひて竈の烟立ちつゝく石巻では、宿を借らうとしても貸す人がなく、辛うじて貧しい小家に一夜をあかしたのであつた。そんなひどい目にあつても芭蕉は少しも愚痴をこぼすことなく、悠々とさまよひ歩いたのであつた。けれども持病も時々は起つたらうし、それに昔の旅の困難、それも交通不便な奥羽地方では随分難儀にも遭つたにちがひない。僅か百五十日位の間芭蕉の頭は白くなつたのであつた。芭蕉は大垣の如行の家に落着いたのであるが、如行の後旅集に「千百里の嶮難、終に頭を白うして、美濃國我里にうつり給ふ」と云つてゐる。けれども旅の苦勞は畢竟芭蕉の詩囊の豊かさを増すのである。彼れは旅に依つてどの位詩想を高めたか知れない。曾て云ふ「東海道の一すぢも知らぬ人、風雅におほつかなし」(一葉集)と。

元祿二年頃といへば、西鶴漸く老い、巢林子漸く擡頭してくる時代で、人間情緒の熾烈と陶醉との世界が現出し、豪宕華美な元祿世相が醸成される時代であつた。かういふ時代に詩人芭蕉は靜かに自然の閑寂を求め、淡い悲しみの世界に落付いた快さを見出さうとした。これは勿論俳諧の心持からも來てゐるが、一面には彼れの氣質と經歷とによるのである。又一面には貞門、談林の俳風から經驗して得た自覺と反撥とに因るのである。更に又他の一角から觀れば時代思想の基調に對する反動とも云へる。烈日には銀月を想ひ、玉山倒れては番茶を欲する。義理人情の暑苦しい世界に背を向けて、淡い寂しい自然の懷に入らうとするのも、是れ又時代思潮の別流である。金絲銀絲紅碧のはでな模様に飽いた目に寂びた焦茶のひと色にすつきりとした感じと落着きとを見出すのも自然の勢である。「或時は仕官懸命の地を羨」んだ芭蕉が早くも寂びの世界の一角に立つたのは、深く自らを覺つたものと云はなければならぬ。かの情念偏重の貴

族文學爛熟の果てに西行が現れたのとはちがひ、芭蕉は既に速く時流を抜いて別途を見出したのであつた。何事ぞ花見る人の長がたな。金銀、四分一の鏝に誇らずして、柿澁引いた紙衣かみこに安んじ、「身に寸鐵たりとも帶すべからず」と稱し「二枝の枯杖をわが瘦脚と思ひ」南船北馬、「白露のさびしき味を忘る、な」と吟じて漂泊したのであつた。けれども、その寂しさの中には、ほの明るさと、時には感激と、輕妙と洒落とが閃く。彼れは所謂ベシミストでは無かつた。此の紀行にも生活の俳諧化が見える。彼れは又野狐禪でもなく、道學者でもなかつた。寒巖枯木でも無ければ、單に一個の風流人でもなかつた。日光の麓では佛五左衛門の正直を讚美して少なからぬ筆を費し、飯阪では佐藤繼信、忠信二人の嫁の墓石には「袂をぬらし」、鹽釜では義經に味方して殺された和泉三郎忠衡を「勇義忠孝の士なり」と云つて激賞し、高館では「時のうつるまで涙を落し」てをり、市振では二人の遊女の身の上ばなしにいたく同情して、珍しくも長い筆を費してゐる。かういふ點から考へると、彼れは單なる俳人のみではなくて、血もあり涙

もある人間であつた。單に詩人でなくして人としての芭蕉が見える。蕉風の盛んになつたのは勿論芭蕉の俳諧が傑出してゐた爲でもあらうが、蕉門の人々が芭蕉を景仰し心服した點などから見れば、芭蕉の誠實な人格が餘程與つて力があつたやうに思はれる(三千風の芭蕉人物評など参照。)

芭蕉が名所名所、殊に歌枕に興味を有つてゐた事は此の紀行に著しいが、詩歌に詠まれた一木一草にもなつかしきを感じてゐた。武隈の松を見ては「目覺むる心地」がし、かつみの名所を過ぎては「いづれの草を花かつみとは云ふぞと、人に尋ね侍れども更に知る人なし。沼を尋ね人に問ひ、かつみかつみと尋ねあひきて日は山の端にかゝりぬ」と歎じてゐる。彼れはやはり詩人であつた。

此の紀行中、歌枕の名をあけた事は夥しいものである。例へば仙臺地方で云へば、玉田、横野、つゝじが岡、木の下、十符、野田の玉川、沖の石、末の松山など。而も十符の菅などは農家の庭の小池に僅かの菅が生えてゐるのであり、沖の石は「わが袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかはくまもなし」の古歌か

ら附會した怪しい小さな石であるのを見ると、噴飯の至であるが、芭蕉はさういふ事には頓着なく、たゞ名所として鑑賞してゆく態度であつた。彼れは歌枕のみならず、土地の口碑傳説もそのまゝ受け入れて過ぎた。たま／＼考證めいた事を書けば失敗してゐる。越前福井から南下する條では、あさむつの橋、玉江の橋、鶯の關、湯の尾、燈が城、かへる山などを殊更並べ擧げてゐる。思ふに鎌倉以後の紀行文には歌枕に執して、その所の古歌をあけ、自らも詠ずる風が著しいが、奥の細道に歌枕を擧げる事の多いのは此の臭味がなほ遺つてゐることを語るものである。此の紀行を通讀する人は必ず此の舊套の存する事を看取するであらう。これは芭蕉のみではなく、徳川の初期頃までも存した旅行者の風潮であつた。初期でなくても、近世の國學者の擬古的な紀行文には著しい傾向であつた。奥の細道に於ても、歌枕といふ傳統的臭味に捉はれてその地の風光の眞實を掴み得ない處がまゝあるやうに思ふのである。更に進んでいへば、まだ此の時代までは斯かる傳統的臭味から脱して、新たな心、みづからの目を

以て、その土地の風光を鑑賞するといふ態度がわづかしか現れなかつたとも云へる。こゝに古典的趣味が、當時の俳諧のみならず、かゝる紀行の文章にもなほ弱いながらも漂つてゐる事を語るものである。又處々に挿む俳句と文章との關係を見るに、その文章の一節一節は多く俳句の前書たる觀がある。之を從來の歌人の紀行に比ぶれば、即ち和歌の代りに俳句を以てしたとも云へる。但し芭蕉の俳句や文章を從來の歌人のに比ぶれば、その深さに於てその措辭に於て非常な相違のある事は勿論である。

文章の洗煉されてゐる事は云ふまでもないが、普通の人が數言を費す所を一語にして盡し、句格に捉はれずして、簡約を尙ぶため、文が緊張して、内容に深さを増してゐる。かゝる手法は俳文の特色でもあるが、元來俳句のやうな短詩形に思想を盛りうとするには、種々の着想を簡拔し、廣漠たる内容を凝固させる手腕が入る。芭蕉の文章も此の俳句で會得した手腕の發揮に外ならぬ。又

之は紀行であるから、賦とか説とか云ふ所謂俳文ともおのづから異なる。「正秀問ふ、師の書き給へるを俳諧文として學びてんや。翁曰く、我、俳諧文とて書きたることなし、文の體は備へたる處あり、先哲の文を見るべし、今多く狂文を見て俳諧文と思へり、さにあらず、我は源氏、狹衣、土佐日記等俳諧文と思へり」(一葉集)又以て芭蕉の文に對する態度を見るべきである。

此の紀行の妙所は、人皆松島や象潟の風光を描寫した條を第一に取るやうであるが、自分はむしろ此の紀行の部分々に妙所があると思ふ。松島の叙景も巧みな文にはちがひないが、技巧に落ちて松島の魂が擱まれぬ恨がある。かの風俗文選に載する松島賦の如きは、許六の僞作である事は己に隨齋諧話にも看破してゐる如く、細道の文を前後補綴して作つたもので、従つて支離滅裂なものである事は細道と比較すれば直ちにわかる。象潟の叙景も殆ど外面描寫に止まつてをり、「象潟や雨に西施がねぶの花」の一句に却つて象潟といふ美人の心持が映されてゐる。むしろ象潟に行く途中の文に神韻が閃く。「磯を傳ひいさごを

踏んで其の際十里、日影や、傾く頃汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海てうかいの山隠る「線緊張して、はじかば切れん筆致である。或は幻の巷に離別の涙を濺ぎ心はあとに引かれて「行く道なほ進まず」と云ふ所に無量な感慨がこもり、或は飯阪の夜の雷鳴に持病に苦しむあたり、或は「高山森々として一鳥聲聞かぬ」しんまへ尿前の山中、或は「日没ちて月あらはる」ぐわつさん月山山嶺のかりね、或は山中で曾良やまなかに別る、雙堯の悲み、或は夕顔へちまのはひかゝる等裁がわびしい戸ほその描寫などに凡ならぬ文致が見える。

此の紀行には、まゝ、杜甫や禪林句集の句などを踏まへた處がある。芭蕉の死後頭陀袋の中には、書としては杜甫の詩集と西行の山家集とが入つてゐた。杜甫や西行は芭蕉が日頃私淑してゐる詩人であつた。けれども杜甫や西行に捉はれてはゐない。是等の人の句を踏まへるにしても、あつさりとしてわざとらしく用ゐてゐない。又源氏物語の文などを踏まへた處もある。總じてその使つた

語句は、大抵出典がある。「古人も多く旅に死せるあり」と云つて、杜甫や西行が旅で死んだ事を想ひ、みづからも行路の死人となる事を豫期してゐたのだが、はからずも大阪の旅の空で、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の一句を遺して元祿七年十月、漂泊の生涯を終つた事を思ふと、感懐が深い。花屋仁左衛門の裏座敷で十二日午後四時頃永眠したのである。ちやうど五十一歳であつた。

以上は奥の細道についての感想を述べたのであるが、なほ他の甲子、芳野、更科などの紀行との比較研究は繁瑣に亘るを以てこれで筆を擱く。

三傳本

傳本には、眞蹟本、素龍本、去來本、其角本がある。

眞蹟本は素龍本の奥書に「眞蹟の書門人野坡か許に有」とある如く、志田野坡の手許にあつたのであるが、今日傳存するかどうか不明である。

素龍本は芭蕉が素龍（江戸淺草の自性院住職で、能書で、炭俵の序を書いた人）に清書させ、表題は自ら書いて、常に携へてゐたもので、其の後、京の井筒屋から出版したもので、四角の所謂枳形本である。出版年月に就いては、版行の年月を記してゐないから不明であるが、多分元禄十二年の秋であらう。支考の「俳諧古今抄」卷上には芭蕉滅後六年の秋、洛の去來を奉行にして版行したやうに書いてあるし、又素龍は元禄十二年十一月二十二日寂してゐるので、多分素龍の生前に、素龍とも相談の上版行したものであらう。元禄十五年版行の説は疑はしいのである。素龍本の奥書に云ふ。

此一書は芭蕉翁奥羽の紀行にして素龍か筆也書の縦五寸五分横四寸七步紙の重五十三首尾に白紙を加ふ外に素龍か跋有（今略之）行成紙の表紙紫の糸外題は金の眞砂ちらしたる白地におくのほそ道と自筆に書て隨身し給ふ遷化の後門人去來か許に有又眞蹟の書門人野坡か許に有草稿の書故文章所々相違す今去來か本を以て摸寫する者也

右の奥書に「素龍か跋有今略之」とあつて、素龍の跋は、あたらし省いてあるが、これは幸に去來本に載せてあるから、次の去來本の條に載せる。

去來本は右の素龍が清書した本を元禄八年九月、嵯峨の落柿舎に於て蕉門向井去來が書寫したもので、其後明和六年（元禄八年から七十五年目）京都の俳僧蝶夢が伊賀上野で發見したものである。翌明和七年十月粟津の義仲寺の廟前で此書の跋を書いてゐるから、多分此年版行したものであらう。其後寛政元年八月、京の書林井筒屋庄兵衛、橘屋治兵衛、浦井徳右衛門が共同して再版してゐる。之も枳形本で、體裁は素龍本に似てゐる。さて此書の由來を簡單に述べれば、始め元禄七年の夏、芭蕉が去來の處に來て、奥の細道を素龍に清書させて持つてゐる事を話したので、去來は書寫させてほしいと切望した。さて同年十一月芭蕉は大阪で病んだので、去來が見舞ふと

芭蕉は、あの本は今故郷の兄の處にある、寫したら原の本は返してくれと云つた。そのうち芭蕉は遂に客死した。死後、去來は上野にゐる芭蕉の兄に手紙を送つて借覽を請うた。兄は遺言ならばと云ふので、書をよこし、且つ門人の手續も珍しいからと云つてきたので、去來は自分が書寫したのを送つてやつた。この送つてやつたのが去來本である。その後、蝶夢といふ俳僧が明和六年の冬、伊賀の上野に掛錫した時、古い反古の中にこれを發見し、見れば、素龍の跋、去來の跋があるので、あらたに寫して、その發見の由來を記し、そして初版を翌明和七年出したものらしい。さて此の書の奥書に云ふ。

からひたるも艶なるもたくましきもはかなげなるもおくの細道みもて行におほへすたちて手た
たき伏て村肝を刻む一般は簞をきるくかゝる旅せまほしと立一たひは座してまのあたり奇景
をあまんすかくて百般の情に鮫人が玉を翰にしめしたり旅なる哉器なるかな只なけかしきはか
うやうの人のいとかはけにて眉の霜の置そふこそ

元祿七年初夏

素龍書

此卷は古師芭蕉翁の紀行にして素龍清書す書の長五寸五分は、四寸七分紙の重五十三初終に白

紙あり行成の表紙紫の糸を以てとつ外題は金の眞砂ちらしたる白地にみつから奥の細道と書年
月頭陀の内にかくして行先く〜に隨身し給ふ元祿七年水無月予か方に偶居まし〜てかつ〜
ほのめかし給ふを書寫の事深く乞奉りけるに同し年の神無月難波のあしのかりねに心地なやみ
給ひぬと聞えぬれば急きとふらひまかりけるに枕近う呼給ひてけふ我やまひ頻なり汝日ころ此
集の求ふかし今將に足下に譲りなん不思議にもなからふるためしもあらは寫しと、めて本の書
を返すへし書は兄の慰にとて古郷に残し置ぬればつと〜に倡送るなるへしと聞え給ふかたし
けなくも悲しくもかしこまりやかて寫しと、めて度此卷は捧侍りなんと涙を落しぬかくて遷化
の後兄の許へ文して乞奉りけるに今はかうやうのものをこそしはしと、まるへき老のかたみと
もなくさめ侍れはいさゝか手をはなち侍人も淺間しう覺られぬれと遺言なれば送りやりぬ且は
奥羽の旅寢の夢の跡もなつかしく且は門葉の人々の手跡もめつらしと見まほしけは予に書寫し
て送り侍るへしと也然はふたゝひ能書をゑらふによしなくやゝその製をたかへすといへともな
を誤字落字の多からん事を恐れ侍るのみ

濡つ干つ旅やつもりて袖の露

元祿八乙亥年九月十二日
於嵯峨落柿舎書寫焉

門人
去來拜

井筒屋か家に傳りし奥の細道板行のするに素龍か跋あり今略之とありとしころその文章のゆかしかりけるに去年の冬伊賀の上野に掛錫の折ふし古き反古の中に此細道の原本を得たり見るに素龍の跋去來の傳來の因縁を書たるものなり見るにむかし忍しくあらたに寫して此書の奥にくはふ

明和七寅年十月翁忌の日 湖南義仲寺の廟前にて

蝶夢書之

右の奥書は漢字假字假字遣等すへてもとのまゝにしるした。

其角本は明治十八年其角堂藏版で、奥書に元祿十年冬其角寫於大阪旅店灯下校合畢とある。校合畢とあれども、素龍本、去來本に比して語句の拙劣不正な處が少なくないので、到底校合したものとは思はれない。且つ此の書が其角の書寫本でなく疑はしい事は既に定評のある事である。

詳解
口譯
奥の細道の新研究

大藪 虎 亮 著

一 月日は百代の過客にして

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして、旅を栖すまとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず。

【語釋】

○月日は百代の過客にして——月日は永久に過ぎ去る旅人のやうなもので。唐の詩人

【口譯】

月日は永久に過ぎ去る旅客とも云ふべく、去つたり來たりする年も亦旅人に似てゐる。旅人といふ中にも、舟の上で一生を暮す者や、馬の口を取つて生涯を終へる者などは、實際に毎日旅にあつて旅の空を自分の家としてゐる

一 月日は百代の過客にして

一

るのだ。古への詩人たちも旅で死んだものが多い。自分もいつの年からか風にしたよふ雲を見るとおのづから心が引かれて、諸方をさまよひあるきたい氣が始終してならない。

【評】

此の章は此の紀行の序とも見るべきものである。「月日は百代の過客にして行きかふ年も又旅人なり」は芭蕉が旅しながらも常に悠久な世界に立つてゐることを語るものである。「古

李白が春夜宴桃李園序「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢、爲歡幾何、古人秉燭夜遊、良有以也」逆旅は宿屋。莊子、山木「宿於逆旅」旅客を逆へる意。

○行きかふ——去つたり來たりする。月日といふも年といふも同じ意。又、過客といふも旅人といふも同じ意。「過客の如く」と云はずに「過客にして」と云ひ、「旅人の如し」と云はずに「旅人なり」と云ふのは隱喩（暗喩）で「如し」「似たり」などを用ゐる直喩よりも一層力ある譬喩である。

○舟の上に生涯を浮べ——舟人などの生涯を云ふ。「生涯を過し」と云はずに「浮べ」と云つたのは面白く、舟の縁語である。

○馬の口とらへて老をむかふる者——馬方などして一生を終へる者。馬の口は轡のこと。牛馬などの轡を取つて牽く者を口取とも云ふ。老をむかふるは年を取ることに。古人も多く旅に死せるあり——杜甫、李白、西行、宗祇などを指す。古人は爰は旅を好んだ詩人たちを云ふ。西行は鎌倉初期の歌僧で、諸國を行脚し河内の弘川寺に滞在して死んだ。一説には京都東山の雙林寺で往生したと云はれる。宗祇は足利季世の連歌の大家で、諸國を周遊し、文龜二年箱根湯本の旅舎で死んだ。年八十二。前年の「吉野紀行」に「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫通するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。」など書いてある。杜甫は芭蕉が最も私淑し、其の詩集を常に旅に携へてゐたし、此の紀行にも杜甫の句を踏まへた語句が往々ある。杜甫は唐

人も多く旅に死せるあり」は芭蕉の脳裡に昔の自然詩人の客死が往來してゐることを示すもので、彼れも亦死を覺悟して自然の懷に抱かれようとする心持が察せられる。齡已に知命に近く、而も宿痾のある身で、當時交通不便な奥羽北越の長途を企てることは容易ならぬ事で、旅の空で死ぬる事を恐れてゐては出來ないことである。芭蕉は此の旅のみでなく已にはやく羈縻を心に期してゐたのであつた。

代の大詩人で諸所に轉じ、洞庭湖のほとりで大曆五年五十九歳で客死した。李白もやはり杜甫と並べられる唐の大詩人で、諸州を周遊し、尋陽で寶應元年六十二歳で死んだ。桃青といふ號も李白に對する名だと思はれる。さてかく云ふ芭蕉も大阪で客死したことを思ふと、感慨が深い。勿論芭蕉は旅に死することを覺悟してゐた。それは此の紀行にも、野ざらし紀行にも明らかにあらはれてゐる。

○片雲の風にさそはれて——片雲は一片の雲。一片の雲が風に漂ふのを見れば、おのづから遠く旅したい氣が起ること。杜甫の「江漢」と題する詩に「江漢思歸客、乾坤一腐儒、片雲天共遠、永夜月同孤、」下略 同じく杜甫の「野老」と題する詩に「長路關心悲劔閣、片雲何意傍琴臺、」禪林句集に云ふ「一片白雲橫三谷口、幾多歸鳥盡迷巢」

○漂泊のおもひ——漂泊は諸方をぶらつくこと。元來、水上を流れたよふ意。杜甫「即今漂泊干戈際」太平記、廿七「萬里漂泊の愁へ、一葉扁舟の浮き思ひ」

二 海濱にさすらへ その一

海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢を
はらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白川の關こ
えんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神

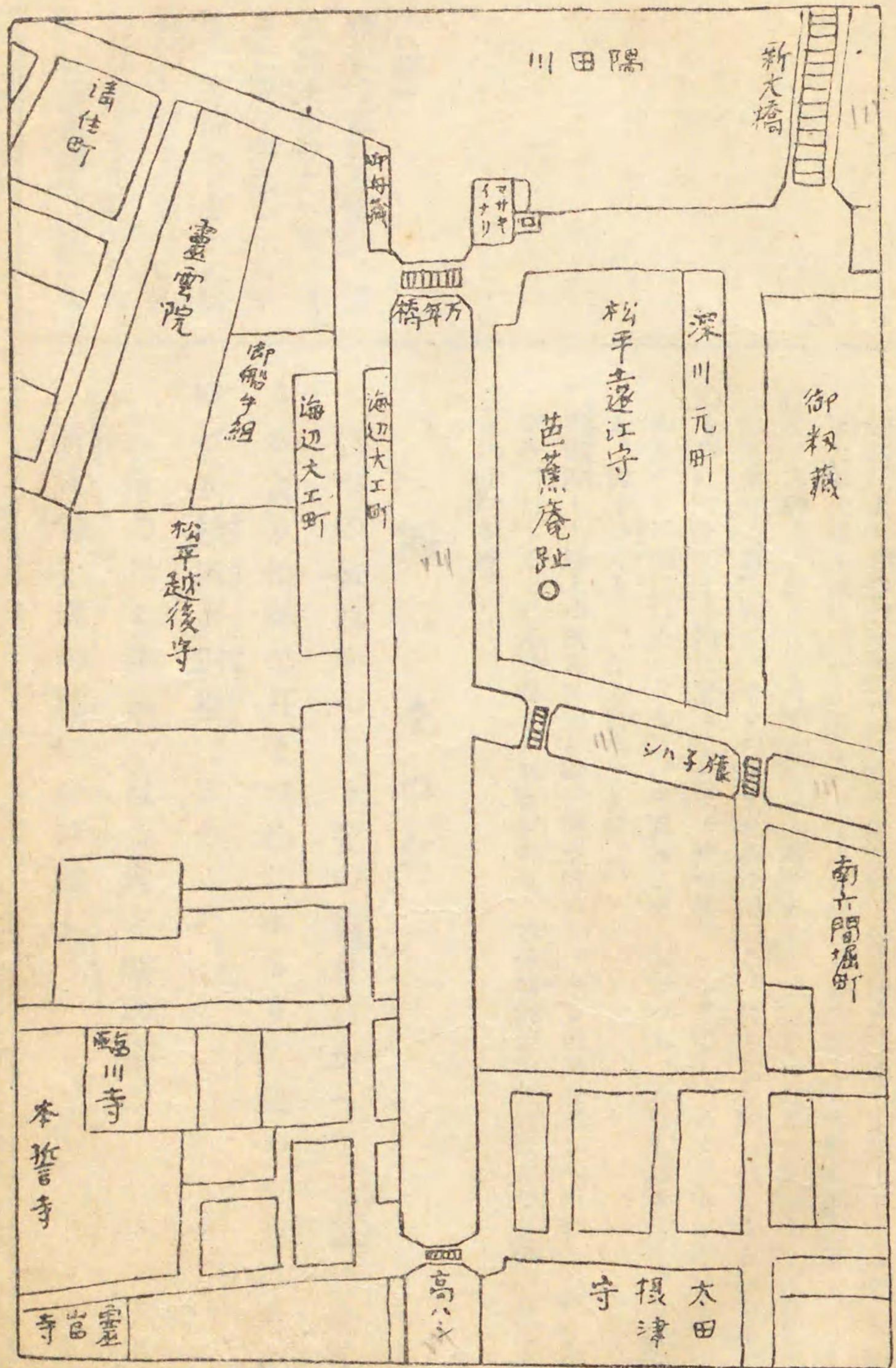
【口譯】

去年は諸方の海岸をぶらつき、秋になつて隅田川のほとりにある庵に歸り、蜘蛛の巣を拂つて久しぶりに落着いたが、その年もやうく暮れ、霞立つ春になると、白川の關を越えて奥州に遊ぼうと思ふものだから、何を見ても何となく誘惑する神が憑いてゐるやうで、自分の心を狂はせ、道案内の神様もしきりに誘ふので、仕事が少しも手につかない。

のまねきにあひて、取るもの手につかず。

【語釋】

- 海濱にさすらへ——海濱をさまよひあるき。前年二月參宮、伊賀上野に歸郷、三月吉野に遊び、高野山、和歌の浦に至り、四月須磨、明石に遊んだ。これまでの紀行を「吉野紀行」といふ。其後、大阪、大津、岐阜に行く。七月鳴海に遊び、名古屋に留る。八月名古屋出發、更科、姨捨山の月を賞し、善光寺に詣で九月江戸に歸つた。此の信州行の紀を「更科紀行」といふ。右の如く七月以前には諸方の海濱に遊んでゐる。
- 去年の秋——前年即ち元祿元年信州の旅から九月歸庵した。
- 江上——水の上。隅田川のほとりをいふ。呂氏春秋「伍員至江上、欲レ涉、芭蕉の甲子吟行「貞享甲子秋八月江上の破屋を立ちいつる程」
- 破屋——粗末な庵の意。芭蕉庵を云ふ。隅田川の岸近くにあつた。今の深川區萬年橋の東南即ち西元町の西部の邊。江戸名所圖繪卷十八に云ふ「同じ橋（萬年橋をいふ）の北詰松平遠州侯の庭中にありて、古池の形今猶存せりといふ、」云々
- 蜘蛛の古巢をばらひて——久しぶりに、もとの家に歸つたこと。巧みな筆である。
- や、——やうやう。
- 春立てる霞の空に——春になつて霞の立つ頃。立てるは春になる意と霞の立つ意とを兼ねる。
- 白川の關——今の磐城國西白河郡古關村大字旗宿の邊にあつた關。白河町の東南約



(圖繪川深年五永嘉據)跡庵蕉芭

【口】
股引の破れを繕ひ、笠の緒を附けかへて、三里に灸を据ゑるうちから、夢寐にも忘れぬ松島の月がまつ第一に心に浮んできて仕方がなく、住家は或人に譲り、

三里。其の創設は允恭天皇の頃であるが、鎌倉時代に至り廢頽したらしい。その廢れた年代は正確にはわからない。江戸時代は勿論荒廢した古關に過ぎない。
○そゞろ神——何となく人の心を誘ふ神。此の語は芭蕉の新造語であらう。絶えて他に見當らぬ語である。そゞろはすゞろに同じく、何となく氣の進むさまをいふ。
○ものにつきて——物に憑きての意。笠や杖などを見ても、そゞろ神がのりうつつてゐるやうに思はれるのである。萬葉集二卷「玉かつら、みならぬ木には、ちはやぶる、神ぞつくとふ、ならぬ木ごとに。」
○道祖神——路上の旅人を守る神。道案内の神。みちのかみ、さへのかみ、たむけのかみ、だうろくじん、なごの異名がある。伊弉諾神がお投げになつた杖から出來たといはれる神。

同 その二

股引の破れをつゞり、笠の緒、付けかへて三里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人にゆづり、杉風が別墅にうつるに、
○草の戸も住みかはる代ぞ雛の家
面八句を庵の柱にかけ置く。

杉山杉風が別荘採茶庵に移つた。

草の戸も住みかはる
代ぞ雛の家

之を發句として連ね、
表八句を書いて庵の柱
に懸けて置く。

【評】

そゞろ神といひ、道祖
神といひ、畢竟同じ意
ながら、烟霞の癖のや
むにやまれぬ心持が見
える。『三里に灸する
より松島の月まづ心
かゝりて』にその憧憬
の熾烈さが思はれる。
松島の月、象潟の雨
を想うては、立つても

【語釋】

○三里——灸穴の名。膝がしらの下の外側のや、凹んだ所。此所に灸をすうれば、脚が輕快になるといふ。冥途の飛脚「おつとまかせと、足軽く、走る三里の灸よりも、小判の利きぞ應へける。」

○灸する——艾を肌に着け、それに火を點じて焼くこと。「すう」はわ行の動詞。「すゆ」は誤。

○松島——宮城縣陸前國宮城郡の東北、松島灣内にある名勝。仙臺灣の一支灣。日本三景の一。

○心にかゝりて——氣になつて。松島の月を早く見たいのである。「かゝる」は「月」の縁語にもなつてゐる。

○住める方——芭蕉庵。

○杉風——芭蕉の門人。姓は杉山。通稱は市兵衛。俳號は杉風。屋號を鯉屋と云つて、江戸小田原町の魚屋で、幕府の御納屋を勤めた。財力、俳道共に、芭蕉の有力な後援者であつた。享保十七年歿。年七十八。

○別墅——杉風の別荘である採茶庵を指す。採茶庵は芭蕉庵の近傍にあつた。別墅は別荘のこと。墅は田園の家といふ意。

○草の戸も——の句——こんな草庵も、住みかはる世のならはしに洩れず、他の人が移り住むこととなつた、恰も雛が古い箱を出て雛壇の家に移りかはるのに似てゐるよの意。草の戸は草庵のこと。戸を以て庵を代表する。此の句は「住みかはる代ぞ」に

居てもをられないので
ある。

中心がある。「雛の家」は菅菰抄に「雛を商ふ者、翁の空き庵を借りて、賣物を入れ置く所となし、によりて此の吟ありといふ」とあるのは「雛の家」といふ語に泥んだ臆説であらう。又、之を雛飾りをする家の意に取る説もあるが、これも無理である。雛の家は雛箱を云ふ。鏡箱を鏡の家と云ふが如し。油地獄「鏡の家の家ならで」云々。芭蕉が採茶庵に移つたのは二月の中頃である。「次郎兵衛物語」に「二月、中頃より芭蕉庵は住すて、杉風が後、廳に移り給ひ、日々錢別の會のみにて、三月廿七日旅立にて、」云々。此句は三月三日前後詠まれたものであらう。

○面八句——俳諧(連句)を書く懷紙の第一面を表(面)と云ひ、此の一頁には五十句(五十韻ともいふ)以上の場合には八句を記すのが例である。こゝは「草の戸も」を發句(第一句)として連句を催したものと思はれるが、此の時の連句は傳はらなない。懷紙は俳諧、和歌などを書く用紙を云ふ。之を折つて、第一面を初表(略して表)第二面を初裏(略して裏)第三面を二の表、第四面を二の裏、最後の面を名残、なほ裏に及ぶ時は名残の裏と云ふ。三十六句(之を歌仙と云ふ)の場合には、表に六句を記すのが例である。本書の備考の所々載せた連句の句の上に「ウ」とあるのは裏の意、「ニッ」とあるのは二の裏の意、「ナ」とあるのは名残の意である。最も多く用ゐられた歌仙の場合でいへば、表六句、裏十二句、名残(二の表とも)十二句、名残の裏(二の裏とも)六句である。五十韻以上の場合には、表八句、次の頁から十四句づゝ記す。又、第一句を發句と云ひ、第二句を脇句(略して脇と云ふ)と云ひ、第三句を第三と云ひ、かくて最後の句を擧句と云ふ。一人で連れたのを獨吟といひ、

三人で連れられたのを三吟と云ふ。

三 彌生も末の七日

【口譯】
 三月二十七日門出するに、夜明けの空はおほろで、有明の月が懸り、光は已に無くなつてゐるが、富士の山はなほかすかに見えて、上野や、谷中の櫻の梢もなつかしく、いつ又歸京して眺められることであらうかと思ふと心細い。親しい人は悉く前晩から草庵に集つて、今朝舟に乗つて一所に見送つてくれる。千住

といふ處で舟からあがると、はるかに旅立つ悲しい思が胸一ぱいになつて、幻の如くはない人の世の別れ路に訣別の涙を流す。

魚の目は涙として歩いたが、心があとに引かれて道が一向はかどらぬ。人々は途中に立ち並んで、私の後姿の見えるまでと思つて、見送つてくれるのであらう。

【評】

彌生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峰かすかに見えて、上野谷中の花の梢、またいつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりには宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ處にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

ゆく春や鳥啼き魚の目は泪
 これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立ちならびて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

【語釋】

- 彌生も末の七日——三月二十七日。やよひは陰曆三月の異名。末は下旬を云ふ。中句を中と云ふ。中の七日といへば十七日のことをいふ。
- 朧々として——ほんのりとして。うすあかるいさま。唐の詩人、吳融の詩「非暗非明」。
- 月は有明にて——月はなほ夜明の空に残つてゐて。有明は月のなほ夜明の空に残れる頃をいふ。陰曆十六夜以後である。
- 光をさまれるものから——月の光は消えてはゐるが。をさまるは消えて無くなること。源氏物語、柏木の巻「月は有明にて光をさまれるものから、かげさやかに見えて云々」ものから「ものながら」の意。
- 不二の峰——富士山。
- 上野——上野は今の東京上野公園の地。寛永寺があつて櫻が多かつた。翁の句に「花の雲 鐘は上野か浅草か」
- 谷中——地名。上野から西北に續いてゐる地をいふ。今も町名に残つてゐる。此處にも感應寺（今日の天王寺）があつて、花木が多かつた。
- 花の梢——櫻の花の梢。單に花と云へば櫻の花を指すのである。
- いつかはと——いつかに同じ。こゝは反語ではない。いつ見ることであらうかと思へばの意。「かは」は普通、反語の助詞として用ゐれど、單に疑問の助詞として使ふ例も屢々ある。例へば、新勅撰集、八「暮ればまた我が宿りかは旅人のかち野の原の

春の夜明のほのほのたる空に月の光淡く、遠く富士のかすんだ景も短い文の中に著しく、「又いつかはと心細し」と云ふ處に、四十六歳の、病弱な芭蕉の、遠くへ旅立つ心持がすなほに出てゐる。杜甫の「此身未_レ知_レ歸_二定處_一、呼_レ兒_一覺_レ紙_一一題詩」の句が想ひ出される。俳道にも悟り、禪をも修めた彼が、枯木寒巖の口吻を洩らさず、なほ人情を偽らぬ所に人間らしさが溢れてゐる。又驪々といひ、光をさ

萩の下露」古今集、三「はちす葉のにこりにしまぬ心もて何かは、露を玉と歎く」など。是等のかははかと同じである。

○むつまじきかぎりは一親しい人は悉く。かぎりばかりの意に使ふ場合とはちがふ、あるかぎり群れ立ちて（枕草子）などの用法に同じ。此時三百人ばかり見送人があつた。「次郎兵衛物語」に「千壽行迄惣連二百餘見送給ふ」

○宵よりつごひて——前夜から後つて。宵は夜。また或場合には夜のあまり更けぬ頃をも云ふ。

○千住——地名。奥州街道最初の宿驛。荒川（隅田川の上流）の岸にあつて、東京市の東北の郊外に當る。今は川を隔て、北千住町、南千住町に分れてゐる。芭蕉の草庵は前に述べた如く隅田川のほとりにあつたから、舟で隅田川を千住まで溯つたのである。草庵から千住まで舟行約二里半。

○前途三千里のおもひ胸にふさがりて——遠く旅立つことを思ふと、悲しきで胸がいばいになつて。前途は行先。三千里は遠いことを誇張していふ。此旅行は凡そ六百里であつた。朗詠集、後江相公「前途程遠、馳_二思_一於雁山之暮雲」貞和集、三「三千里外有_二知己_一」鳴雁帶_レ書招_レ不_レ來

○幻の巷に——幻の如くはかない人世の別れ路に。幻は目の前にあるが如く見えるもので、消え失せ易いので、古よりはかない譬に用ゐる。金剛經「一切有爲法、如_二夢_一幻泡影、如_二露_一如_二電_一、應_レ作_二如_一是觀」巷は道の岐るゝ所。辻。又町なかの通路をも云ふ事がある。

まれるといひ、漫然と使つてゐない所に注意すべきである。

「幻の巷」といふ所に彼が悠久の世界に立つてゐることがあらはれ

「離別の涙をそぐ」といふ所に、同時に彼が人間情緒に愛着し、情念の世界に立つてゐることが示されてゐる。

此の二つの世界に立つ所に芭蕉の人格の尊さとなつたかしさがあつた。そこに自然と人情とに介在した西行と似通つた所がある。「行く道なほ進まず」に、ふ

○ゆく春やの句——離別の涙でくもつてゐる目には、春の行くのを惜しんで、鳥は鳴き魚も目に涙を浮べてゐるやうに見えるの意。暮春人と別る、悲しさを詠じたものである。杜甫の春望と題する詩に「感_レ時_一花_一濺_レ涙、恨_レ別_一鳥_一驚_レ心」といふ句がある。鳥といひ、涙といひ、恨_レ別_一鳥_一驚_レ心といひ、此の詩の詞に似た所がある。芭蕉の頭の底に此の詩が潜んでゐたのであらう。芭蕉の頭陀袋の中には杜甫の詩集、山家集などが入つてゐたのである。右の詩の解は備考参照。

【備考】

右の杜甫の詩は春望と題するもので、全部を擧ぐれば「國破山河在、城春草木深、感_レ時_一花_一濺_レ涙、恨_レ別_一鳥_一驚_レ心、烽火連_二三月_一、家書抵_二萬金_一、白頭搔_レ更短、渾欲_レ不_レ勝_レ簪。」國は賊に破られても山河は依然として存する。城は廢墟となつたから、住む者が無いので、春になつても只草木が徒らに深く茂るのみ。時世の非なるに感じては、平生ならば喜ぶべき花を見ても涙を流し、家人と別れてゐる事を恨んで、平生ならば樂しむべき鳥を聞いても心を驚かす。烽火は三箇月に亘つて戦争は止まない。他郷に居ては、故郷からの音信は萬金にも當る。旅愁のため白髪になつた頭を搔くと、髪は益々短い事が感ぜられ、簪を挿す事も出来ない位だの意。此紀行の平

りかへりく行く芭蕉の後姿が目に見える。

【口説】

今年元祿二年、奥州長途の旅を唯ちよつと思ひ立つたが、旅の苦みに頭髮を白くすることがあつても、耳に聞いて未だ目に見えない名勝の地がゆかしくて行く氣になり、若し萬一途中死なずに歸ることが出来たら幸だと思つて、あまりあてにもならぬ望みを行末にかけながら、其の日漸く草

泉の條にも「國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ」とあつて、此詩を心に浮べて書いてある。

四 今年元祿二とせにや その一

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮のうらみを重ねといへども、耳にふれて未だ目に見ぬさかひ、もし生きて歸らばと、さだめなきたのみの末をかけ、其の日漸く早加といふ宿にたどり着きにけり。

【語釋】

○元祿二とせにや——元祿二年（二三四九年）は芭蕉四十六歳の時。五代徳川綱吉の時代。にやと云つたのは單にぼかして云つたまでである。次にあらんが略されてゐる。
○行脚——徒歩で諸方を旅すること。もと、僧が修行のため旅することである。頭陀とも云ふ。頭陀は梵語で、漢譯して抖擻とも云ふ。おんぎやばは宋音。

加といふ宿驛に行き着いた。

【評】

「未だ目に見ぬさかひ」といひ、「もし生きて歸らば」といひ、その次に語が省かれてゐるため、文が引締つてゐる。此省略法は彼の文の到る處に見出す事ができる。風月の旅の前には行路死人を覺悟してゐるものの、「若し生きて歸らばと、定なきたのみの末をかけ」といふ所に、その心細さと生の愛着とがあらはれて

○吳天に白髮のうらみを重ねといへども——旅の愁がある上に更に髪を白くするやうな苦みに遭つてもよい意。吳天は吳（支那南方の地）の地の意であるが、こゝは單に旅の空、他郷などの意に用ひてゐる。吳天の天は、たとへば旅を旅の空と云ふが如し。「詩人玉屑」に云ふ「閻僧可士有送僧詩云、一鉢即生涯、隨緣度歲華。是山皆有寺、何所不爲家、笠重吳天雪、鞋香楚地花、他年訪禪室、寧憚路岐除。」笠重吳天雪、鞋香楚地花は謠曲「葛城」にも採られ、又、「禪林句集」（此の句集の中の語を芭蕉はまゝ用ゐてゐる。）にも採られてゐる有名である。芭蕉は吳天の語が好きと見えて往々用ひてゐる。例へば天和二年作「笠張説」に「宮城野の露に供連れれば、吳天の雪に杖をや曳かん」天和三年の「虚栗」に「夜着は重し吳天に雪を見るあらん」など。菅菰抄に三體詩の「五天到日頭應白」を引いて、吳天は五天の誤だと云つてゐるのは取らない。前述の如く吳天は芭蕉が使ひふるした語で、誤る筈がない。さて芭蕉は奥羽北陸を旅して秋九月美濃大垣の如行の家に落着いたが、その時頭が白くなつてゐたのは感慨が深い。元祿八年如行撰「後旅集」に云ふ「千百里の險難、終に頭を白うして、美濃の國我が里にうつり給ふ」第六〇章参照。
○さかひ——境即ち場所。次に「したはしく」などの語を補へ。
○もし生きて歸らばと——かれて旅で死ぬることは覺悟はしてゐるものゝ、萬一生きて歸ることが出来たら幸であると思つて。
○さだめなきたのみの末をかけ——あてにならぬ頼みを將來にかけて。「頼みの末をかけ」は、「頼みを末にかけ」といふのと結局は同じ意味になる。

るる。

○早加——地名。今の草加町。千佳から北方約二里八町の所に當る。奥州街道の第二宿驛。起點は千佳。草加町は埼玉縣北足立郡の東南隅にある。
○たごり着きにけり——たごるは道を尋ね求めて行く意なれど、こゝは單に行く意に用ひてゐる。草加へは街道筋の事なれば、迷ふ程の道ではない。

同 その二

瘦骨の肩にかゝれる物まづ苦しむ。たゞ身すがらに
と出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎゆかた雨具墨筆
のたぐひあるはさりがたき錢などしたるはさすがに
打捨てがたくて、路次のわづらひとなれるこそわりな
けれ。

【語釋】

○苦しむ——身を苦しめる。苦しむはこゝは他動詞。○身すがら——唯身一つで何も持たぬこと。或場合には、獨身で係累の無い身をもいふ。
○紙子——紙製の衣服。厚い白紙に柿澁を塗り、何度も日に晒し揉み柔けて製したものの。

【口譯】

瘦骨の肩にかついでる荷物がまづ第一に身を苦しめる。只からだ一つでと思つて出發したのに、紙子一枚は夜の寒さを防ぐために用意し、浴衣、雨具、墨筆の類、或は斷りにくい錢別などは、でも打捨ててゆくわけにも行かず、道中の面倒となつたのは仕方がない。

【評】

此文を見ると、筆墨はとにかくとして、紙子、ゆかたなどを瘦骨の肩にかついだと見える。勿論芭蕉の身のまはり世話する會良も荷をかついでるにはちがひないが、全くの素手でない所に、少しでも苦を分つ芭蕉の暖かい心がほの見える。

【口譯】

室の八島明神に參詣した。同伴の會良が云ふ「此の祭神は木花開耶姫と申して、富士の淺間神社の神と同じです。

- 一衣——一枚。
- ゆかた——湯帷子の略。入浴の時又は浴後に着る單衣。
- 雨具——雨天の時に着用する具。合羽、傘の類。こゝは合羽などであらう。合羽は桐油紙などで製し、衣服の上に覆ひ着るものである。かつげはすべいん語で、もと、すべいん人の外套を眞似て製つたものといふ。
- さりがたき——ことわり難い。辭退し難い。
- 錢——旅立つ人に贈る品物。錢別。はなむけは馬の鼻向けの略。旅立つ人の乗るべき馬を其の行く方へ向けたならばしから起るといふ。土佐日記「舟路なれど馬のはなむけす」
- さすがに——さはさりながら。
- 路次のわづらひ——道中の面倒。
- わりなけれ——仕方がない。是非もない。

五 室の八島に詣づ

室の八島に詣づ。同行會良が曰く、此の神は木の花
さくや姫と申して、富士一體なり。無戸室に入りて焼
けたまふちかひのみなかに、火々出見のみこと生れ給

姫が無戸室に入つてお産をなさる時、生れる子は必ず皇孫の子であると誓つて、室に火を放つて彦火々出見尊をお産みになつてから此地を室の八島と申すのです。又和歌に煙を詠むならひとなつてゐるのもこのわけです。又このしろといふ魚を食べる事を禁じてゐる。こんな縁起の趣が世に傳はつてゐます。」

【評】

奥州街道から左折してわざ／＼室の八島に參

ひじより、室の八島と申す。又煙をよみ習はしはべるもこの謂なり。將このしろといふ魚を禁ず。縁起の旨世に傳ふ事も侍りし。

【語釋】

○室の八島——今の栃木縣下野國下都賀郡國府村大字惣社字室八島にある大神神社。郷社である。室六所神社、六所大明神、室八島神社なども云つた。今の祭神は木花開耶姫ほか七神である。草加から室八島まで約二十一里。芭蕉は多分小山宿から左折して室八島に詣で、それから鹿沼へ出たのであらう。昔、社の附近に池があつて、水氣煙の如く立ちのぼつた故、室の八島(竈の異名)と名づけられたものと思ふ。火々出見尊の故事は此地に附會されたものである。中古以來、「室の八島の煙」とつけ、或は煙の縁語として和歌に詠みこんだのが多く、歌枕の一となつた。備考参照。

○同行——道づれ。同伴者。

○曾良——姓は河合。通稱は惣五郎。俳號は曾良。信濃國下諏訪の産。芭蕉も此の紀行に「芭蕉の下葉に軒をならべて予が薪水の勞をたすく」と云つてゐる如く、忠實に師に仕へた人で、先に野晒紀行の時も芭蕉に隨ひ、此度の旅行にも同伴して師の身の上を世話した。寶永七年壹岐國で歿、年六十二。備考参照。曾良は俳諧の書に往々ツラとあるから、人々は斯く呼んでゐたらしいが、句選季考頭書に「曾良とは

詣したのは、昔から有名な歌枕であるがためのであらう。そして曾良の語る縁起のまゝを記したまでである。その眞偽を詮索するのは彼の旅行の目的ではない。

云はず、ソラウと云、小日向築土下武家に奉公す」とある。按ふに、曾良は惣五郎の音を略したものと思はれるから、正しくはソラウであつたのであらう。

○木の花さくや姫——木花開耶姫。天孫瓊杵尊の后。大山祇神の女。彦火火出見尊ほか數神を生む。

○富士一體なり——富士の淺間神社の祭神と同一であるの意。淺間神社は、せんげん神社ともいふ。駿河國富士郡大宮町にあつて、諸國淺間神社中最も有名で、始め富士山にあつたが、大同年間此地に移した。祭神は木花開耶姫。官幣大社。今、室八島神社の境内にも淺間神社がある。

○無戸室に入りて云々——無戸室は周圍を塗り塞いだ、戸の無い室。芭蕉は無戸室と訓ませたのであらう。古事記傳にはうつむると訓ませてゐる。皇孫瓊々杵尊が木花開耶姫と結婚なさつた所が、一夜で御懷妊になつた。それで皇孫は御疑ひになつた。姫は怒つて無戸室を作つて籠り、誓つて云はれるには「若し皇孫の子でなかつたら焼け失せるであらう。若し皇孫の子であつたら、火と雖も害ふ事は出来まい」と。そこで火を室にお放ちになつた。始めて起る煙の末からお出来になつた子が、火闌降命、火を避けてゐる時お出来になつたのが彦火々出見尊、次にお出来になつたのが火明命である(書紀に據る)なほ備考に原文を載せた。

○煙をよみならはし侍るもこの謂なり——昔から和歌に室の八島の煙と詠む例となつてゐるのも此の故事に因るのである。之は前述の如く、此地にかの神話を附會したもので、芭蕉は只縁起のまゝ記したに過ぎない。今、その例を二三擧ぐれば、千載

集、雑中、藤原顯方、たえず立つむろの八島の煙かないかにつきせぬ思なるらむ。詞花集、戀上、藤原實方朝臣、いかでかは思ありとも知らずべき室の八島の煙ならでは。狭衣物語、卷一、かくばかり思ひこがれて年ふやと室の八島の煙にも問へ。千載集、戀一、いかにせむ室の八島に宿もがな戀の煙を空にまがへむ。室の八島を詠むことは詞花集以前には見えぬから、歌枕となつたのは平安朝末期であらう。

○將——又。

○このしるといふ魚を禁ず——このしろは鱈、鱒、鯰、鰯、鯛などと書く。鰯科に屬する。此魚を禁ずるわけは次の俗傳に基づくと思はれる。慈元抄に云ふ「問曰、歌故に幸に逢ひたる人ありや。答曰、昔有馬の王子零ぶれ給ひて、下野國まで下り給ふ。其國に五萬長者とて富人あり。其に立寄らせ玉ひて、奉公すべき由を宣ふ。中略。其比長者獨の娘を持ちたり。かねては常陸の國司に參すべきよし約束有りければ、彼の王子忍び逢ひ給ひて、程なく懷妊有りければ、國司より催促有りければ、娘は早や死したりして、喪葬の儀式をなして野邊に送る。棺には、つなしと云ふ魚を入れて、焼きて煙を立つ。彼の魚は焼く匂、人を焼くに似たればなり。其心を讀める。東路の室のやしまに立つ煙だが、子のしろにつなし焼くらん。子の代りに焼くとよめり。それよりして、このしろと言ふとなむ。是歌故に王子幸に逢ひ給ふ云々。」このしろは即ち子の代しろの義だといふのである。つなしはこのしろの一名。此の慈元抄は永正七年（足利末期）に書かれたものであるが、右の話は信じ難いものなれど、縁起にも傳はつたと見え、下野國志に「祭禮は毎歳八月朔日、中略、さて翌九日廣前

にて制魚このしろを焼きてささぐ」とある。なほ備考を見よ。

○縁起——こゝは、神社佛寺の草創、沿革又は其の靈驗などの言ひ傳へ。又その文書。○傳ふ——つたはる（自動詞）

【備考】

室の八島——下野國志に云ふ「室八島は惣社村にあり。其隣に國府村ありて、古へは惣社村も國府の分郷たり。其近所に清水といふ地、また煙村と云ふも並びありて、もと煙の立ちし所なりと傳へたり、下略。さて袖中抄に『下野國の野中に島あり。俗に室のやしまとぞ云ふ。室は所の名か。其野中に清水の出る氣の立つが煙に似たるなり。是は能因が坤元儀に見えたるなり云々』守弘按に、袖中抄に記したる如く、室は地の名にて、やしまとは煙の立ちしに依りて唱へしなるべし、其ゆゑは、やしまとは元來竈の事なり。文徳實錄に『齊衡二年十二月、大炊寮、大八島竈神』云々。又竹取物語にも『石の上の中納言、燕の子安貝といふものを取り得んとして、やしまのかなへのうへに、のけさまに落ち給へり』とあるを思へ。又色葉和雜に『釜をばやしまと云ふなり。大嘗會行幸にも、釜のわたるを、やしまのわたると云ふ』と記したり云々。右の如く室の八島は竈の古名でもあつて、古昔除夜に竈をさらへて翌年の吉凶を卜した。即ち雜占の一で、散木集、冬、さらひする室の八島のことこひに身のなりはてむ程を知るかな。袖中抄、一八「むろの八島云々、師走の晦日の夜、田舎のげすの、かまごの灰をさらへて、おき取り置きて、それが消えきらぬさまにて、次の年あらんする事を見る事の侍るにや」など見える。

又吉田博士の大日本地名辭書に云ふ「國邑志稿、小川氏云、俗説辨に、室の八島を、上古、木花開耶姫の、無戸室を作りたまへる舊跡なりといふは誤れり。是も羅山文集に「室八島、池中有三八島、祭三八神」などいひて、無戸室の事をも援きたるに誤られしならん」

貝原益軒の扶桑記勝卷五に云ふ「下野國室の八島、壬生みぶの邊にちかき惣社村と云ふ所
にあり。村中に惣社大明神の社あり、下野の惣社也。其社前に室の八島あり。八島の廻りはひきくして池の如し。其の内に方二間程なる小島八あり。今は水なし。昔池に水ありし時、水氣烟の如く立ちしと云ふ。今は水なき故けふりは不立。里人あまたに問ひしに、其の答皆如此。名所也。古歌多し。池の形ある内は、方二十間もあるべし。少ばかりなる所なり。」(益軒全集卷七)

神社誌料上卷に云ふ「寛永十三年徳川家光社参あり。社頭の廢頽を慨かせられ、老中酒井雅樂頭へ下命あり、若干の金を寄附あり。天和二年本社改造せらる、今の社殿是なり。勝地室の八島は本社の坤方五丁程の處に在り、下略」天和二年は此の旅行の七年前である。

曾良——「雪まろげ」(曾良の遺稿を甥の周徳が元文二年に上梓したもの。元文二年は曾良没後二十八年目に當る。此の書は芭蕉に同伴して奥州旅行をした時の連句を多く載せてある。)の巻頭に云ふ、

「曾良何某此のあたり近く假に居を占めて、朝な夕なに訪ひつ訪はる。わが食ひ物いとむ時は、柴を折りくぶる助けとなり、茶を煮る夜は來りて軒を叩く。情隠

閑を好む人にて、交り金を斷つ。或夜雪にとはれて、

君火を焚けよきもの見せん雪まろげ はせを」

此のあたりは

芭蕉庵を指す。雪まろげは雪をまるばし丸めて塊となすこと。雪遊びの一である。このしる云々——前に引いた慈元抄は孝道を説いた本で、上下二卷あり、奥書に、時に永正七季上章鶉火黃鐘下句誌之畢とあるから、足利末期に書かれたものである。

此の書にかの有馬皇子(孝徳天皇の皇子)が五萬長者の家で舞をまひ、「いなむしろ川そひ柳、水ゆけば、なびきおきたち、その根ばうせす」とお歌ひになると、長者はたゞびとでない事を悟つたといふ事も記してあるが、之は弘計王(後の顯宗天皇)が播磨國明石郡縮見屯倉首の許に、兄の億計王と共に隠れて居られた時の舞の歌で(日本書紀顯宗天皇の條に見える)之を有馬皇子に結びつけたもので、信じ難い話である。之は孝徳紀に鱒魚 此云舉能之虛とあつて、古くからの語で、有馬

皇子は紀伊牟婁郡で薨じてられるし又孝徳(有馬皇子の父)紀にこのしるの語が見える所から、室八島と有馬皇子とこのしるを結びつけたものと思はれる。とにかく、かのこのしるの傳説は、このしるといふ意味から作られた説明傳説の一種と思はれる。なほ慈元抄の此の話は萬葉集古義にも似た話が載せてあるから、つなしの説明と共に次條に述べる。

萬葉集品物解四に云ふ「卷十七に大王乃云々都奈之等流比美乃江過底、このしるなり。略解に、遠江人は鱒をつなしと云ふと云へり。谷川士清、鱒今小者謂都奈之と云へり。中略。貝原篤信、本草綱目に、海上鱒魚、其臭如レ戸、海人食之と云へり。

今按ふに、其臭如レ戸なるもの別になし、鱸はこのしるなるべし。中略。昔或人の子繼母の讒にあへり。其父讒を信じて、家僕に命じて其子を殺さしむ。家僕其罪なきをあはれみて、都奈之をやきて、其子を殺して焼きたりと父につけて、其子をたすけて他所へ去らしむ。それよりして此魚の名をこのしると云ふ。子の代に焼けるゆゑなり。その小なるを、こはだと云ふといへり。小野博は、このしるは鱸魚なり。鱸魚はこのしるに非すと云へり。古歌に、東路の室の八島にたつ煙たが子の代につなし焼くらむ。本朝食鑑卷八云、昔野州室八島市中有富商、生三美娘子云々、于時州之刺史、聞其娘子甚姝而覓之、不昇、於是刺史大慍、心常矯罪云々、父母表言曰、娘子遭疾俄歿矣、新造棺槨、其中盛鬪魚數百尾、僞如死者、父母親臨喪服引柩俱出子野、於壙中茶毗之、刺史聞而哀歎不レ少、經日父母携娘潛出之他邦、自茲呼津那志號子代云々。この昔物語ありしによりて、室の八島の歌はありしなるべし。いかさまその物語は、はかなだちたる事にはあれど、さる物語によりて、子代の名は負せしにこそあらめ。都奈之と云ふ名の義、未だ詳ならず。〔萬葉集古義〕以上の三つの説話は多少ちがふ所はあるが、つなしを子の代りに焼く點は同じである。

無戸室に入りて——無戸室は和名抄一〇「日本紀私記云、無戸室字部」書紀には無戸室とあるが、古事記には「作無戸八尋殿、入其殿内、以土塗塞」とある。今書紀の原文をあぐれば、古事記も話の筋は大凡そ似てゐる。時彼國有美人、名曰鹿葦津姬、亦名神吾田津姬、亦名木花開耶姬、皇孫問此美人曰、汝誰之女子耶、對

曰、妾是大山祇神所生兒也、皇孫而因幸之、即一夜而有娠、皇孫未之信曰、雖復天神何能一夜之間、令人有娠乎、汝所娠者必非我子歟、故鹿葦津姬忿恨、乃作無戸室入居其内、而誓之曰、妾所娠、若非天孫之胤、必當焦滅、如實天孫之胤、火不能害、即放火燒室、始起煙未生田之兒號火闌降命、是隼人等始祖也、火闌降、此云褒能須素里、次避熱而居生田之兒號火々出見尊、次生出之兒號火明命、是尾張連等始祖也、凡三子矣。彼國とは記に笠狭御前とある。室の八島に於ける芭蕉の句——「雪まろげ」に云ふ、

室の八島

絲遊に結びつきたる烟かな はせを
入りかゝる日も絲遊の名残かな 同
鐘撞かぬ里は何をか春の暮 同
人相の鐘も聞えず春の暮 同

六 卅日、日光山の麓に泊る

卅日、日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう、我が名を佛五左衛門と云ふ。萬正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、一夜の草の枕も打解けて休み給

【口説】

三月卅日、日光山の麓に宿つた。宿の主人が云ふ「私の名を佛五左衛門と云ひます。萬事

正直を第一としてゐますから、人々が斯く申しますにつけて、一夜の旅寝もくつろいでお休みなさい」と。どんな佛様が此の娑婆に靈驗を現はして、自分のやうな乞食巡禮の如き旅僧を助け給ふのであらうかと疑つて、主人の舉動を注意して見るに、只無智無學で、まるで樸直な者である。剛毅木訥は仁に近いと孔子が云はれたが、そんなたぐひで、其性質の清真素朴であるのは最も尊敬するに足る。

へと云ふ。いかなる佛の濁世塵土ちよくせちんどに示現じげんして、かゝる桑門の乞食順禮の如きの人をたすけ給ふにやとあるじのなす事に心をとどめて見るに、只無智無分別にして、正直偏固のものなり。剛毅木訥の仁にちかきたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。

【語釋】

- 卅日——三月卅日。出發は三月廿七日朝で、其日は草加の宿驛に宿つたとして、草加から此日光山の麓まで三日か、つたわけである。二十九日は室の八島に宿つた事は此の地でよんだ俳句（前章、備考参照）で知られるが、二十八日は多分古河で宿つたであらう。草加から古河まで約十二里、古河から室の八島まで約九里ある。八島に着いては、見物の餘裕があつたやうである。（日程考参照）
- 日光山の麓——「續芭蕉俳句研究」には今市であらうと云ふ。又鉢石の説もある。多分今市であらう。今市は日光町の手前二里の所である。
- あるじ——宿屋の主人。
- 草の枕——旅れ。元來草を束れて枕とし又は草の上に寝ることである。
- 打解けて——心安らかに。うちくつろいで。
- 濁世塵土——此世。娑婆。濁世は佛語で、人心の墮落した世の義。源平盛衰記、廿

【評】

無學文盲で、なまじつかの學問に害はれぬ正直無垢な性情を羨む芭蕉の心も亦純潔で尊むべきだ。

【口譯】

四月一日、御山ミヤマに參詣した。昔此の御山を二荒山と書いたのを、弘法大師が此の山に佛寺創建の時、日光と改め

七「まことに濁世亂慢の折と云ひながら」塵土は元來、塵と土といふ義で、つまり物の意にも用ひれど、（詩經、終風揚塵土）爰は塵土の如くけがれた世の意に使つてゐる。濁世はだくせとも讀む。

- 示現——神佛の靈驗を示し現はすこと。
- 桑門——僧侶。沙門と同じ。桑門も梵語で、文字は當字である。
- 乞食——人から食物をもらひ歩く者。古昔は僧尼の修行者であつた。
- 巡禮——諸國の社寺を巡つて禮拜し歩く者。
- 無分別——思慮の無い意であるが、こゝは悪い意では無くて、無學などの意に使つてゐる。
- 偏固——心が一方に片寄つて、かたくななこと。
- 剛毅木訥——剛毅は意志が強く物事に屈せぬこと。木訥は質樸で無口なこと。木は樸に同じ。論語、子路「子曰剛毅木訥近仁。」
- 氣稟——氣質。性質。稟は音ひん。
- 清質——純潔なこと。謝莊の月賦「升清質之悠悠、降澄輝之藹藹。」

七 卯月朔日御山に詣拜す

卯月朔日御山に詣拜す。往昔此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光とあらため給ふ。千

られた。大師が日光と改められた事は、大師が千歳の後の世を洞見し給うたのであらう。

何となれば、今や東照大権現の御威光は日の光の如く天下に輝いて溢れ、四民も安心して家業に就いてゐるからである。將軍様の事はやはり畏れ多いから、之れで筆を擱く。

あらたふと青葉若葉の日の光

【評】
縁起などの考證は彼れ

歳未來をさとり給ふにや。今此の御光一天にかがやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖おだやかなり。猶はばかり多くて筆をさしおきぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

【語釋】

○卯月——陰曆四月の異名。

○御山——日光山。俗にはおやまなれど、文の上ではみやまとなしと讀むべきであらう。主なものには東照宮、大猷院、二荒山神社である。東照宮は家康を祀り、寛永十三年三代家光の時改築完成したもの、大猷院は家光の廟で、承應二年四代家綱が建てたもの、二荒山神社は今本社は東照宮の西方に在つて、僧勝道の創建にかゝり一千餘年前の古祠である。是等は元祿以前の建物であるから芭蕉は巡拜したであらう。

○往昔——他の處にそのかみと振假名がついてゐる。こゝも斯く讀んでよからう。

○二荒山——日光山の古名。二荒山を字音で讀めば二荒山となる故、佛教の日光佛を聯想して日光山の文字に改めたと云ひ、之を空海の所爲となすのである。又二荒は其の音が佛教の補陀落山（印度南方の山名で、觀音菩薩の本居となし、華嚴には光明と義譯す）に似てゐるから種々佛説に結びつけた説が多い。

の旅の目的でも無く、

又趣味でもない。室の八島などもさうである。只口碑舊説のまゝ、を心にとむるのみである。彼れの目的は名所の風月に勝を洗つて、詩囊を豊かにする所に在る。されば土地の傳説などを、眞偽を確かめずにそのまゝ筆にしたからとて、咎めるのは酷である。

【口譯】
黒髪山は霞が懸かつて

○空海大師——平安初期の高僧。眞言宗の祖。承和元年寂、年六十二。

○開基——佛寺を創建すること。もとゝを開く意。空海は弘仁十一年此の山に登山して、瀧尾権現、寂光及清滝権現を創めたと云はれるが、是より先、天平神護二年僧勝道が始めて此の山に來り四本龍寺を創建し、更に延暦元年二荒山を踏破して中禪寺を建てたといはれるから、開基は勝道である。

○今此の御光——東照權現家康の威光を暗に指す。

○八荒——八方。八極。天下。史記、始皇本紀「并吞八荒之心」

○四民——士農工商。

○安堵——安心。堵の内に安んずること。史記、高祖紀「吏民皆安堵如故」

○あらたふとの句——青葉若葉に輝く日の光はあ尊い意。日の光は日光といふ地名をも含ませたのである。又此の新緑の日光に來て見れば、さすがに東照權現の威光が現はれてゐて尊く感ぜられる意をも含ませてゐる。今日から此句を見れば、東照權現の威光を含めたのは、あきたらぬけれど、徳川時代に於て其地に臨んでよんだものであつてみれば、無理ならぬことである。積翠園の「芭蕉句選季考」に云ふ「下野高久といふ所、何某が家に芭蕉の眞蹟あり『あなたうと木の下闇も日の光』と書けり、青葉若葉は再案にや、可感なり」高久は翁が泊つた處である。第十二章備考参照。

八 黒髪山は霞が、りて その一

残雪がまだ白い。

剃捨てて黒髪山

に更衣 曾良

曾良は河合氏で惣五郎と云ふ。芭蕉庵の近くに住んで、予が家事向きの世話をしてくれり。此度、松島、象潟の見物について悦んで同行し、又予が旅の難儀をも世話しようと云ふので、出發の曉、剃髪して墨染の衣に着かへ、惣五を改めて、宗悟と號する。かゝる次第で黒髪山の句を作つた。更衣の二字が此句を重からしめてゐるや

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃捨て、黒髪山にころもがへ 曾良

曾良は河合氏にして惣五郎といへり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松島象潟のながめ共にせんことを悦び、かつは羈旅の難をいたはらんと、旅立つ曉、髪を剃りて黒染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍つて黒髪山の句あり。更衣の二字力ありて聞ゆ。

【語釋】

- 黒髪山——男體山のこと。二荒山とも云ふ。日光山彙中の主峯で、完全な圓錐形をなせる燧火山。海拔八一九七尺、中禪寺湖面を抜く三六七三尺。
- 霞かゝりて雪いまだ白し——簡単な語句の中に晩春初夏の高山の趣が出てゐる。黒髪山の黒に對して雪の語も感覺的效果がある。
- 剃捨てての句——更衣は季節に應じて衣を着かへる事で、昔は陰曆四月朔日と十月朔日に行ふを例とした。こゝは前に卯月朔日とある如く、夏の衣に着かへるのであ

うに思はれる。

【評】

室の八島の條に「同行曾良」と云つて、曾良の事を何も書かないで茲に至つて説明してゐるのは、全く黒髪山の句を批評する必要からである。曾良の略傳を述べるのが目的では無い。さて此の章によつても此の旅の目的が松島、象潟にあつたことが知られる。

る。出發の時黒髪を剃捨てて墨染の衣を纏うたが、その黒髪と名のついてゐる山の麓で、更衣をすることよの意。黒髪山を見て剃髪の事が身にしみるのに、衣を着更へるので更に感慨が深いのである。芭蕉が「更衣の二字力ありて聞ゆ」と云つたのはこゝである。

- 曾良——一六、二〇頁参照。
- 芭蕉の下葉に軒を並べて——深川の芭蕉庵の近くに住んで。「芭蕉の下葉に」の語、弟子たる意も含まれて面白い。
- 薪水の勞——薪を取り水を汲む仕事、即ち飯を炊き水を汲む仕事。しもべのわざ。梁昭明太子文、陶靖節傳「助汝薪水之勞」
- 松島——六頁参照。
- 象潟——地名。秋田縣羽後國由利郡にあつて日本海に臨む。なほ象潟の條に詳説する。昔は松島と並んで奥羽の二大勝地であつた。今、象潟町がある。
- かつは——一方には。
- 羈旅——旅行。羈も旅の意。羈はたづな、きづなの義で、羈絆の熟語を作る。又羈は羈に同じく、羈は羈に同じ。
- 難——困難。雜儀。
- いたはる——深切に世話する。
- 墨染——墨染衣の略。黒く染めた僧衣。

その二

【口譯】

道から右折して二十餘丁山を登れば瀧がある。岩の洞の頂から飛流すること百尺で、千岩の亂立する青い深淵に落ちてゐる。人は岩窟に這入り込んで瀧の背後から見るので、昔から裏見の瀧と云ひ傳へてゐるのである。

しばらくは瀧に

こもるや夏の始め

【評】

簡約な文章の中によく裏見の瀧の偉觀を捉へてゐる。

二十餘丁山をのぼりて瀧あり。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入つて、瀧の裏より見れば、うらみの瀧と申し傳へ侍るなり。しばらくは瀧にこもるや夏のはじめ

【語釋】

○千岩の碧潭——多くの岩で取りまかれた青い深淵。

○しばらくはの句——夏とは、佛語で、陰曆四月十六日から七月十六日までをいふ。此間外出しないで修業するのである。之を夏籠、夏行、夏安居と云ふ。此期間の始を結夏といひ、その終を夏解といふ。さて此句は、季節も、はや夏に近い事であるから、しばらく此の瀧に籠つて心を澄ましてみると、夏の始の感じがするよ、の意。軽い心持である。

○うらみの瀧——裏見瀧。日光山中、荒澤に在る瀑布。瀧の背後に通ずる一徑があつて、背面からも見られるから此の名がある。阿含瀧、荒澤瀧とも云ふ。日光神橋を去る西南一里十五町の所で、大谷川の支流荒澤川に在る。明治廿五年九月洪水で崩壊したため昔とは大分違つてゐる。本文に「二十餘丁山をのぼりて瀧あり」とあるから、今の大日堂の邊からの里程であらう。大日堂は神橋から約三十丁の所で、此の大日堂の少し先から右折して登ること二十丁餘で裏見の瀧に達するのである。

【備考】

○裏見の瀧——日光山志に云ふ「久次良の大日堂より少しく行きて右の方に榜示あり。此所より山路の險を凌ぎて西北へ廿町許ゆきて荒澤の山上に至る。夫より路を左に取りて尖岩を陟り右の方なる山峯を見れば、危石忽に落つるが如き岩下を越えて瀧の傍に至る、中略、此所は瀧の横手ゆる正面を望むには瀧の裏を潜りゆきて向ふの方へ廻り見る事なり。さて其瀧には磐石凡一間餘差出でたる上より瀑水激流して水幅六七尺、其岩石の差出でたる下は道幅四五尺許、高さ六七尺あれば、瀧の裏を潜り透るに患なし。誠に希代の飛瀑なり云々。」

○裏見の瀧に於ける芭蕉の句——「雪まろげ」に云ふ

ほととぎす裏見の瀧の裏表

翁

詞書は本文と同じ。

九 那須の黒はねと云ふ所

那須の黒はねと云ふ所に知る人あれば、是より野越にかゝりて直道を行かんとす。はるかに一村を見かけてゆくに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中をゆく。そこに野飼の馬あり。草刈

【口譯】

那須の黒羽といふ處に知人があるので、こゝから野越にとりかゝつて、寄り道しないで行かうと思ふ。遙かに一

村を認めながら行くに、雨は降るし日は暮れる。農夫の家を借りて一宿し、明くれば又野原を通る。そこに放し飼いの馬がゐる。草刈る男に近寄つて難儀を懇へた所が、土くさい男だけれど、でも人情が無いでもない。その男「どうしたらよいでせう。此の野は路が方々に岐れてゐて、始めての旅人では、道に迷ふかも知れないから、此の馬のとどまる處で馬を返してください。」と云つて、馬を貸してくれた。

るをのこに嘆きよれば、野夫といへども、さすがに情し
らぬにはあらず。いかかすべきや。されども此野は
縦横にわかれて、うひくしき旅人の道ふみたがへん、
あやしう侍れば、此馬のとどまる處にて馬を返し給へ
と、貸し侍りぬ。ちひさきものふたり、馬のあとしたひ
て走る。ひとりには小姫にて、名をかさねと云ふ。聞き
なれぬ名のやさしかりければ、
かさねとは八重なでしこの名なるべし 會良
やがて人里に至れば、あたひを鞍壺に結付けて馬を返
しぬ。

【語釋】

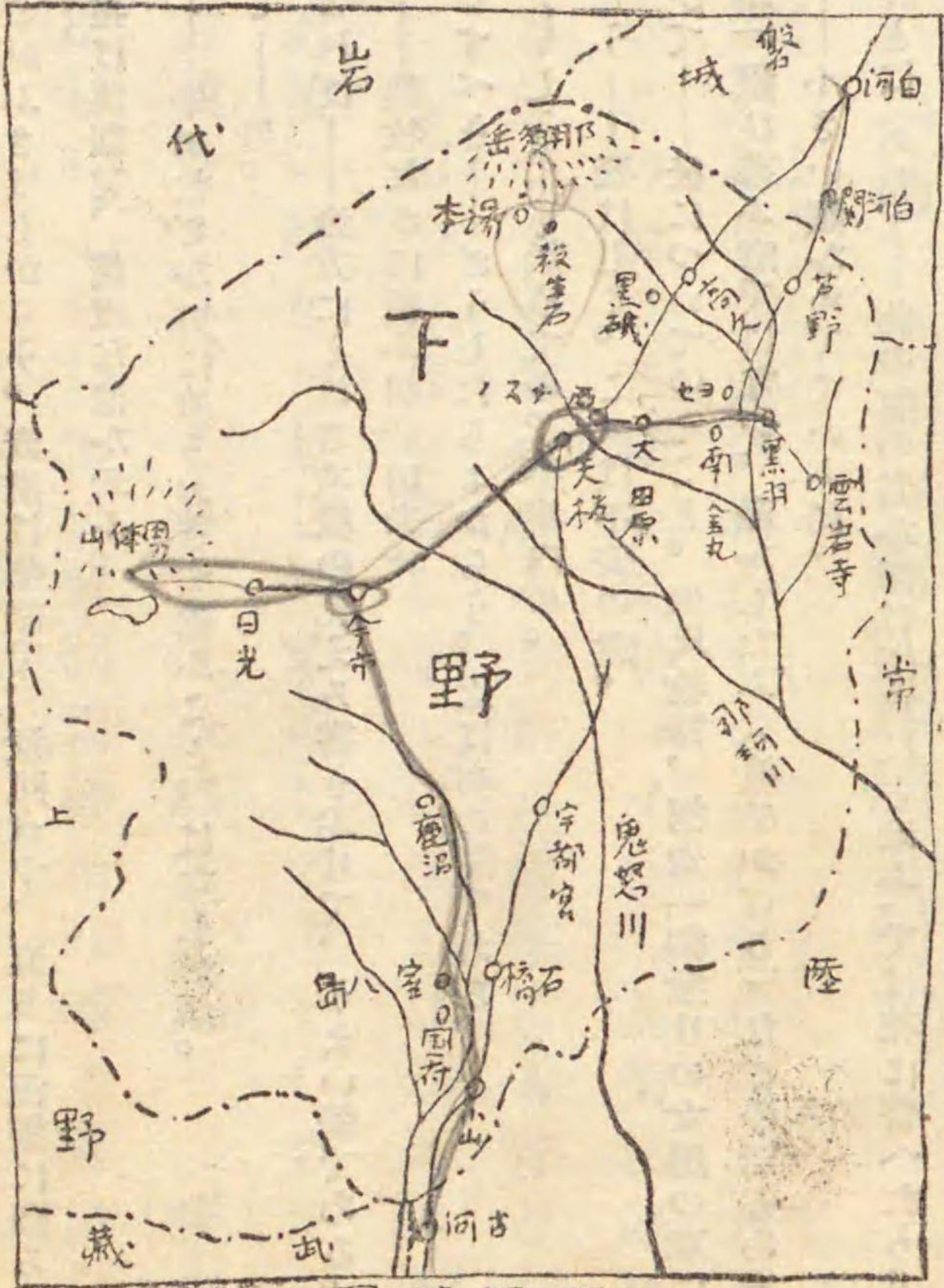
○那須——下野國那須郡にある廣大な平野。東西六、七里、南北十里餘。全部那珂川の流域に屬する。
○黒はれ——今の那須郡黒羽田町。大田原から約三里ある。今は西那須野驛から大

子供が二人馬のあとについて走る。一人は少女で、名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名の優美に感ぜられたので、會良が一句よんだ。
かさねとは八重撫子の名なるべし
まもなく人家のある處に着いたので、乗り賃を鞍壺に結びつけて馬を返した。

【評】

「雨降り日暮る」の語、簡で而も野の旅のわびしさが出てをり、「嘆きよれば」にやるせない足の疲勞が思ひやられ

田原を経て黒羽まで鐵道が延びてゐる。日光から東東北に當り、約十六里。芭蕉は今市から矢板（下野國鹽谷郡。鐵道東北線の一驛）に出で（日光から約十里）矢板から大田原（那須郡。奥州街道の一驛）を過ぎ黒羽に出たものであらう。



○知る人——淨法寺圖書。
○野越——野を横切ること。

「此野は縦横にわかれて」に茫漠たる那須野が髣髴される。「此馬のとどまる處にて」に野飼の馬の悠長さが現はれ、あたひを鞍壺に結付けて返す所に、さすがに昔の旅ののんきさがある。小娘といはずに小姫と書いたのも面白く、日光から黒羽まで十六里、何等特筆する事もしないのに、はかないかさねの名にめでて筆を費す所、芭蕉はやはり詩人であつた。

- かゝりて——著手して。
- 直道——迂回しない道。ひたみちともぢきだうともちよくだうとも讀める。ひたみちなごがふさはしからう。直道は佛語で、迂回せず、直ちに涅槃に到る道をいふ。直道は漢語で、眞直な道を云ふ。
- 野飼——牛馬などを野に放ちおきて飼ふこと。はなしがひ。
- のこ——男。
- 嘆きよれば——途方にくれる有様の見える書きぶり、うまい筆である。
- 野夫——農牧などに従ふ男。田夫。
- いかゞすべき——どうしたらよからう。之は男の詞である。
- うひくしき——始めての。不案内の。
- あやしう——疑はしく。こゝは不安の意。
- したひて——後についてゆくこと。源氏物語、桐壺「御送りの女房の車にしたひ乗り給ふ」戀ひ慕ふ意ではない。敵をしたふ（追ひかける）などの語もある。
- 小姫——小さい娘をめていふ語。
- かさねとはの句——此の娘の名を聞けば重ねと云ふ、では花に譬へたら八重撫子であらうの意。輕妙な句である。撫子は草花なれど、愛撫する子の意にも用ゐるので、此句の面白味はこの點からも大分來てゐる。
- 鞍壺——鞍の上の、人の乗る處。前輪と後輪との間。

【備考】

那須野に於ける芭蕉の句——芭蕉翁發句集に云ふ、

馬草負ふ人を枝折の夏野かな

此の句は多分此の時の作であらう。

一〇 黒羽の館代淨法寺何がし

【一〇】
黒羽の御領主大關殿の留守役淨法寺何某の家を訪ねた。思ひがけぬ事として、主人は大いに喜び、晝も夜も話し續けて、其弟桃翠などいふのが朝晩力めて訪ねてくれ、又自分の家にも伴うて、其親族の家にも招待され、日數を経るに随つて、或日郊外に散歩して、昔犬追

黒羽の館代淨法寺何がしの方に音信る。思ひかけぬあるじの悦び、日夜かたりつゞけて、其弟桃翠など云ふが朝夕つとめ訪らひ、みづからの家にも伴ひて、親屬の方にも招かれ、日を経るまゝに、ひと日郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須のしの原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣づ。與市扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡と誓ひしも此神社にて侍ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠宅に歸る。

物の行はれた跡を一見し、有名な那須の篠原を押し分けて玉藻の前の古墳を弔つた。それから八幡宮に参詣した。昔那須與市が屋島の浦で扇の的を射る時、別しては我國氏神正八幡と祈誓したのも、此の神社であると聞いたので、有難い感じが切に身にしみた。日が暮れて桃翠の宅に歸つた。

【評】

館代や弟の桃翠に厚遇され、附近の名所舊跡

【語釋】

○館代——領主の留守役。館代といふ語は物に見當らない語であるが、城の小なるものを館と云ひ、代は代理の義で、當時黒羽藩主大關氏は江戸屋敷に居り、家老浄法寺氏が代理をしてゐたから、館代と書いたと思はれる。「寛政重修諸家譜」を検するに、黒羽藩主大關増榮の嫡子増茂が前年即ち元禄元年十月二十二日父に先立つて死に、次いで父増榮も同年十二月十三日五十五歳で死んだ、そこで嫡孫の増恒が四歳で遺領を嗣いだしたが、なほ江戸に居つて、黒羽の領地に就く事を許されたのはそれから十八年後の寶永二年である。右の次第で、元禄二年頃は黒羽は全く留守であつたので、家老が萬事代理をしてゐたのである。大關氏は武家時代那須七黨の隨一で、一萬八千石を食み、其の子孫は今の大關子爵である。園花萬葉記を見るに、江戸の屋敷は湯島天神下にあつた。

○浄法寺何がし——黒羽藩主大關氏の家老浄法寺圖書。一本浄坊寺とある。俳號は桃雪。何がしは單にぼかして書いたに過ぎない。舊知の間柄である。「思ひかけぬあるじの悦び」とあるのでも知られる。秋里籬島の園花萬葉記(元禄十年)に、黒羽領主大關氏の家老に浄法寺圖書の名を擧げてゐるが、此の人であらう。天野桃隣の陸奥千鳥(元禄九年)に「浄法寺桃雪子に宿す」といふことが見え、黒羽附近の餘瀨で芭蕉が催した俳諧が曾良の遺稿雪まるげに載つてゐるが、その中に桃雪の名が見え尚芭蕉が須賀川滞在中、桃雪から送つた消息に「はせをの翁、みちのくに下らんとして、わが茅屋をおとづれてなほ白川のおなた須賀川といふ所に留まり侍ると聞

を案内される趣がよく窺はれる。「思ひかけぬあるじの悦び、日夜かたりつゝけて」の短い句に、静夜の俳談も想はれ、「朝夕つとめ訪らひ」にその款待の程が知られる。

きて申し遣しける。雨晴れて栗の花咲く跡見かな。桃雪。(雪まるげ)とあつて、之を立句として芭蕉、等躬、曾良で句を連れてゐるのなごも参考になる。

○思ひもかけぬあるじの悦び——「思ひかければ、あるじも悦び」なご云ふべきを簡決に書いたのである。

○桃翠——「其の弟」とある如く、浄法寺圖書の弟である。姓は鹿子畑。名は善大夫。黒羽地方には今、浄法寺といふ村もあり、鹿子畑といふ村もある。是等の村名と關係があるのであらう。桃翠は黒羽の西方餘瀨村(今の川西町大字餘瀨)に住んだ。曾良の遺稿雪まるげに「奈須餘瀨翠桃亭にて」と詞書して俳諧を載せてゐる。(之は備考にしろす)桃隣の陸奥千鳥にも翠桃となつてゐる。按ふに、翠桃は桃翠のことにちがひない。芭蕉は後の條にも「暮るれば桃翠宅に歸る」と書いてゐるから、芭蕉のは誤ではない。陸奥千鳥を點檢するに黒羽の俳人に桃の字の附くのは殆ど皆かしらに附いてゐるのも参考になる。然らば、雪まるげや陸奥千鳥にある翠桃は桃翠の誤かと云ふに必ずしもさうではあるまい。右の著者は二人とも芭蕉の門人であり、桃隣も亦黒羽の浄法寺氏に宿つてゐるから、翠桃も誤とは思はれない。按ふに、始め桃翠と號したのであるが、芭蕉の號桃青とあまり酷似してゐるので、憚つて後に翠桃と改めたのであるまいか。黒羽町の東北の小山に今に城代の館と稱して浄法寺家が残つてをり、翠桃は餘瀨に住んでゐたのであるから、翠桃が圖書の號でない事は明らかである。

○つとめ——努力すること。できるだけ。

○犬追物の跡——犬追物は騎射の一で、犬を追つて射る遊戲。その跡は何處だか不明

である。之は謡曲「殺生石」に石の靈野干（狐）を退治するのに犬を射て練習したのが犬追物の始とあるのに依つて、後世殊更に其跡と稱するの、或は實際に犬追物をなした跡か之れ又不明である。なほ備考参照。

○那須のしの原——篠原は篠の生えてゐる原。篠は篠竹（しのだけ）の略。篠竹は細くて叢り生える竹。篠笹ともいふ。備考参照。

○玉藻の前の古墳——玉藻前は金毛九尾の狐の化身といふ女性。近衛天皇の寵姫で、一夕宮中で月郷雲客が管絃を奏してゐる時、深更に及び御殿が震動し銀燭が消え、玉藻の前から光が發した。それから天子は御病氣におなりになつた。安部易詠が占ふに、玉藻の前の所爲たる事がわかつた。玉藻の前は忽ち狐と化し下野國那須野に逃げた。三浦介義明、千葉介常胤等、救を奉じ那須野に下り之を退治した。其後狐の靈が石となり、鳥獸や人が之に觸るれば皆死ぬので、人々は大に苦しんだ。そこで後深草天皇の御代、源翁（玄翁）といふ僧が詔を奉じて殺生石に至り、破竈墮の機縁を拈して、杖を以て一下すれば石が忽ち破砕した。其夜一女子が現れ、翁の淨戒を得て天に生ると言ひ終つて、烟の如く消えた。是より源翁の名聲都鄙に高く、北條時頼之を聞いて、奥州會津利根川庄を與へた。（鎌倉海藏寺縁起に據る）猶殺生石の條参照。思ふに玉藻の前の古墳とは那須の殺生石の傳説に依つて後世の人が擬するものである事は明らかである。

○八幡宮——今の那須（かねた）金田村大字南金丸（みなみかめまる）にある那須神社。もと那須八幡とも稱した。那須氏の氏神である。餘瀨の東南にある。猶備考参照。

○與市——那須與市宗高。太郎資高の子。屋島の戦に、平家の舟一艘、旭日の扇を竿頭に挿みて軸に立て、源氏の軍を麾く。源義經之を射る者を物色するに、左右の者與市を薦む。與市固辭すれども許されず、遂に意を決して、馬を渚に乗り入れ、眼目し「歸命頂禮八幡大菩薩、日本國中大小神祇、別しては下野國日光、宇都宮、氏御神（おんかみ）、那須大明神、弓矢の冥加有るべくば、扇を座席に定めて給へ云々（源平盛衰記に據る）」と祈念して、首尾よく扇の射落し、源平兩軍の喝采を博した。平家物語には「南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光權現、宇都宮、那須ゆせん大明神、願くはあの扇の眞中射させてたげせ給へ云々」とある。ゆせんは湯泉（ゆせん）で、をんせん（をんせん）の訛。ゆせん大明神は即ち那須村大字湯本にある湯泉神社であるから、細道に云ふのは源平盛衰記に依つた傳へである。

○我國民神正八幡——我國は下野國を指す。氏神は那須家の氏神。氏神は氏の祖先を云へど又其氏に由緒あつて崇敬する神をも云ふ。

○感應——こゝは、心に感じ應（た）ふる意。有りがたく感ずること。謡曲「朝長」に「玉文の瑞諷、感應肝に銘する折から」の感應と同じ用法。他の場合には、信心が神佛に通ずる意に用ゐる。

【備考】

浄法寺何がし——三千里（碧梧桐氏著）に云ふ「けさ大田原から三里の道を東に歩んで、この黒羽に著いた。中略。浄法寺何がしの家は、尙ほ現存して居ると聞いた。處の者は今に城代の館といふ。町の東北に當る小山の上で、小學校のすぐ左側だと

敷へる。黒い荒木の衝門には「士族浄法寺三夫」と丁寧に書いた標札が見える。玄關で一度物申と訪づれても返辭がない。藁砦の音であらう、壁障にドス〜と響く。一度訪づれる。しばらくして、ハイと頓狂な返辭をして玄關の障子を明ける。頭の半のな老女が現はれた。中略。老女との立話は、城代の家は昔からこゝにあつたもので、何年前か家藏残らず焼けてしまつた。自分の男に當る人は俳諧を嗜んで各處を行脚したが、其後この道に志した者はない。芭蕉については何の話も残らず、遺物といふ物も大方は焼けたのであらう。といふに過ぎなかつた。下略

那須のしの原——源實朝の歌に「もののふの矢並つくるふこての上に霞たばしる那須の篠原」(金槐集、冬)宗祇の白河紀行(應仁二年の旅だから此元祿二年を去る二百二十年の昔になる)に「那須野の原といふにか、りては、高萱道をせきて、弓のはずさへ見え侍らぬに、中略、枯れたる中より篠の葉のうちなびきて露しげきなどぞ、右府の詠歌思ひ出でられて、少しあはれなる心地し侍る云々」右府は右大臣實朝、詠歌はかの「もののふの」歌を指す。ついでに云ふ、矢並は箆にさした矢の列。こては籠手とも小手とも書き、甲冑に具して上肢を蔽ふもので、前九年役頃から足利中世まで、射戦には多く左手にのみ着け、右手は略して用ゐなかつた。

犬追物——犬を一定の場所に放ち、射手は馬上にて三所藤の弓に藁目の矢を射けて射る。射手は多きは三十六騎に及び、之を三手に分づ。犬は多きは百五十疋に及ぶ。三所藤は弓を三箇所、藤を以て巻いたもの。藁目は鏃の一種で、朴又は桐の木で作り、中を空にして、數箇の孔を穿つたもの。長きは普通四五寸である。矢が飛

ぶ時、空氣が孔に入つて鳴り響くので、ひきめとは響き目の義だとも云はれる。さて犬追物は鎌倉時代から行はれたもので、東鑑、貞應元年二月六日の條に、幕府の南庭で射手四騎、犬二十疋で行はれた事が見える。曰く「六日、乙酉、於南庭有犬追物、若君御入興、此事又讚岐羽林殊庶幾被申行、奥州、足利前武州以下群參見物、犬二十疋、射手四騎也、相構可決三勝負之由、別被仰出之間、各爭三箭員之處、面々五疋射之云々」さて謡曲「殺生石」に「三浦の介、上總の介、兩人に論言をなされつ、那須野の化生の者を退治せよとの勅を受けて、野干は犬に似たれば、犬にて稽固あるべしとて、百日犬をぞ射たりける。是れ犬追物の始めとかや。」とあれど、元より信すべき説ではない。

○玉藻の前——日尾瑜の燕居雜話卷一、妖狐說淵源に云ふ「玉藻の前の事は俗說稗史のよしなしごとと云ふれど、猶近世に起りしことならぬは、謡曲を見ても知らる。請ふ其淵源を問はむ。曰く、西土の書未だ其出據を見ず。下學集、犬追物の條下に云ふ、昔西域有班足王某夫人、惡虐過人、勸王取三千人之首、其後出生支那國、爲周幽王后、其曰褒似、滅國惑人、死後出三千日本、近衛院御宇號玉藻前、傷人無極、後化成白狐、害人惟多、時俗欲驅之、先追走犬、以試射騎、白狐知レ之化而成石、飛禽走獸當其殺氣者、莫不立斃、故謂之殺生石、于今在下野那須野原也、犬追者始子姦矣、但聽之古老之口號、雖不知本說、且載之而已とあるぞ物に見えたるはじめなるべき。又此石を玄翁といへる禪僧の打碎きければ、白狐の靈成佛することを得たりと云ふこと、河井恒久が新編鎌倉志海藏寺の

所に載せたる開山源翁禪師傳に見ゆ。其文に云ふ、師諱心昭、號三空外、源翁其論號也、世姓源、越之前州荻村人也、初生日空中有聲、曰、此兒爲最尊、幼投三陸上寺爲沙彌、翁性敏秀、七歲誦三具舍論十有六、雜染受具、此時涉三獵釋墳略一千卷、十有八謁三峩山(道元弟子)於諸嶽、參禪門宗究三洞上旨、會中推而爲傑也、初康治帝在位日、宮妖頻發、久壽間一夕宮中之宴、月卿雲客皆列侍、管絃數奏時、及三更深、殿閣大震銀燭遽滅、帝座下有寵姬玉藻前、放光於身、照三殿階、帝於是不能、安部易詵卜之曰、是玉藻所爲也、忽化三狐逃三東國、帝詔三三浦介義明、千葉介常胤、上總權介廣常、毆三其狐於下野州那須野、義明射而殺之、爾後百年餘、狐靈爲石、世俗曰殺生石、觸三其石則鳥獸人民皆死、民之苦甚、時有僧大徹者、欲止三其石怪、而不三能焉、寶治帝(後深草)詔三翁曰、師往三野州三熄三此怪、翁到石左右白骨髑髏山積、翁拈三破竈墮機緣曰、汝既是石靈何處來性向何收、題三偈曰、法々塵々端的底、本來面目未三曾藏、現成公案大難事、異類中行任三度量、舉三柱杖一下石忽破碎、其夜一女子現、雜麗甚嚴、謝禮曰、願得三淨戒三生天、言訖烟沒、自三此翁聲名藉三甚於洛鄙、鎌倉副帥平時頼開三翁之道驗(本傳曰鎌倉殿蓋其時頼也非將軍宗尊)以三奥州會津利根川庄、爲三翁靈鷲之資(本傳有施百貫文也)時建長年間也と見えたり。此傳何れの頃何人の作たる事を詳にせざれど、新しき物とも見えず。されど猶下學集の後にあるべしと思はる。さて其話の因て起る所以を攷ふるに、蓋し五山僧徒の公案に作り設けし者にして、倩女離魂の話の類なること疑なし。玄翁禪師の打破せられしといふ説にても知るべし。況や國史に此説を載せざるをや。下學集は後花園天

皇の文安元年、東麓破納(姓名不詳)の著、新編鎌倉志は貞享元年水戸藩士河井恒久の著である。

なほ玉藻の前は謡曲「殺生石」の如く鳥羽院の姫となつてゐる説もあり、陰陽師は安部泰親となつてゐるものもある。且つ、下學集にも見える如くこの妖狐は三國傳來のもので、始は殷の紂王の妃妲己に化して紂王に淫樂を勧め、周の武王が紂王を亡すに及び妲己も亦殺されたが、其胴骸から妖狐となつて現れ天竺に逃れ去つた。天竺では南天竺耶竭國の王たる班足玉の寵妃華陽夫人と化し、王をして淫樂に耽らしめたが、名醫耆婆のために正體を見あらはされ、再び支那に歸り住む事二百年、今度は周の幽王の妃褒姒と化し、周を亡ぼさんとしたが果さず、日本に渡り玉藻の前に化したのである。即ち仁王經に見える班足太子の話と、國語、史記等に見える褒姒の話と、玉藻の前の話とを結びつけて此傳説の骨子は成つたのである。此の妖狐は、千年の齡を経て、全身に金毛を生じ、尾が九つに裂けてゐるから、金毛九尾の狐と云ふ。

○八幡宮——那須郡には八幡宮は諸處にあるが、那須家の氏神は南金丸にある那須神社で、細道の記事から推しても、浄法寺氏が住んだ黒羽地方である事は疑ない。祭神は應神天皇で、郷社である。明治神社誌料に云ふ「惣社八幡宮金丸村鎮座(下野掌覽)舊稱那須八幡とも、金丸八幡とも稱へられ金丸に在り(地名辭書)中略、後鳥羽天皇文治三年那須宗隆、土佐杉を以て再建し、世々那須家の氏神として社領許多を奉納せり。其後那須家衰へて大關家代るに及び、明正天皇の寛永十七年大關増

洞の地藏に籠る有明
 蔦の葉は猿の涙や染めつらん
 冬を隣りて流人柴刈る
 けふも又朝日を拜む石の上
 殿つけられて唯だ乗する船
 奥筋も時はかはらずほととぎす
 嚙まずに呑めと投る丸薬
 花の宿馳走をせぬが馳走なり
 塞ぐというて炬燵そのまゝ
 桃雪輪良輪蕉里蕉桃
 桃

○黒羽に於ける芭蕉の句——雪まるげに「秋鴉主人の佳景に對す」と詞書して
 山も庭も動き入るゝや夏座敷
 とある。此の秋鴉の家に芭蕉は招かれたと思はれる。秋鴉は如何なる人が不明であるが、多分淨法寺氏の親族であらう。秋鴉は雪まるげに載する翠桃亭俳諧に見える名である。

一一 修驗光明寺と云ふ有り

その一

【口譯】
 修驗光明寺と云ふのがある。その寺に招かれて、役小角の像を安置する行者堂を拜んだ。

夏山に足駄を拜む首途かな
 此の國雲巖寺の奥に佛頂和尚閑居の跡がある。「たてよこの五尺にたらぬ草のいほ、結ぶもくやし雨なかりせば」と松炭で物に書きつけましたと、いつだつたか和尚が申されたことがある。其の草庵の跡を見ようと、雲巖寺に向ふと、人々は

修驗光明寺と云ふ有り。そこにまねかれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途かな

當國雲岸寺のおくに佛頂和尚山居の跡あり。

たてよこの五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と、松の炭して書付け侍ると、いつぞや聞え給ふ。其の跡見んと雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人おほく道のほどうちさわぎて、おぼえず彼の麓にいたる。

【語釋】
 ○修驗光明寺——餘瀨村にある。修驗道の寺。修驗道は佛教の一派で、密教の一部を修行するもの。其の僧を山伏といふ。開祖は役行者。本文に「そこに招かれて」とあるから相當の寺と見える。句選季考頭書に云ふ「光明寺は下野黒羽領主大

喜んで一所に誘ひあひ、若い人が多いので途中賑やかで、知らぬまにかの山寺の麓に着いた。

關伊豫守家臣祿四百石津田光明寺と云ふ武家修驗なり。今の光明寺は津田家より分れて一字となる。本家は祿百五十石にて津田源太左衛門と云ふ。

○行者堂——役行者の像を安置した堂。役行者は修驗道の祖で、本名は役小角といふ。大和國の産。持統文武の御代の人。三十二歳で家を捨て、葛城山にこもり、修行すること三十餘年、よく鬼神を役する術を得たといふ。修驗道は其僧を山伏と稱する如く、山嶽に上つて修行するので、山には役小角の像を安置する行者堂といふものが往々ある。

○夏山の句——夏山は夏の山。足駄を拜むとは、役行者の像がはいてゐる大きな足駄を拜むのである。役行者が足駄をはいてゐる圖は往々見る所である。首途は出發の意。首は、はじめの意。夏、旅立をするに際し、役行者を拜んで、健脚を祈る意である。夏山の語は、近世の語でなく、已に萬葉、古今の歌に見える。

○當國——此の國、即ち下野國。
○雲岸寺——岸は巖の誤。今、俗に岩とも書く。黒羽の東方二里半弱の處に在る。即ち那須郡須賀川村大字雲巖寺に在る。臨濟宗。開基は大治年中（崇徳天皇御代）である。

○佛頂和尚——常陸國鹿島根本寺の僧で、江戸深川大工町に住んだこともあり、芭蕉は此僧に就いて參禪したといはれる。句選季考頭書に云ふ「佛頂和尚二度此處に歸りて正徳五年十二月十八日に寂す、八十七歳」此處とは雲巖寺の處である。根本寺は江戸時代は臨濟宗妙心寺の末寺で、朱印地百石を領してゐた。佛頂和尚は天和頃

は江戸に居たやうだから、雲巖寺に居たのはその以前であらう。芭蕉の鹿島紀行を見るに、貞享四年（元祿元年の前年）八月、曾良、僧宗波を伴つて鹿島根本寺に遊び、已に門弟に跡を譲つて隠居してゐた佛頂和尚と、雨の時間に折々見える月を賞してゐるから、此の頃は鹿島に歸つてゐたのである。

○たてよこの歌——若し雨の降る事がないとすれば、かく狭い草庵をつくるのも遺憾である。本來我れに家なし。行雲流水、山野に旅寝する身であるから、雨さへ降らなければ草庵を結ぶ要はないのである。桑門は一所不住、山野が宿なれば、庵を結ぶのも單に雨のための假の宿に過ぎないといふ意。

○松の炭——松炭。松の木を焼いて作つた質の柔かな炭。

○聞え——云ふの敬語。

○すゝんで——喜び勇む有様。

○道のほご——途中。道すがら。

【備考】

○曾良が光明寺でよんだ句——雪まろげに云ふ

光明寺行者堂

汗の香に衣ふるはん行者堂

曾良

同 其二

山は奥あるけしきにて、谷道はるかに、松杉黒く、苔し

【口譯】
山は奥深いやうすで、

谷の細道が遙かに續き、松や杉が青黒く茂り、幹の苔は雫が滴つて、四月の空もなほ寒い程である。左右の十景が盡きると、橋がある、それを渡つて山門に入つた。さてかの佛頂和尚山居の跡はどの邊であらうかと思つて、後ろの山に攀ぢ登れば、岩の上に小さい庵があつて、岩窟に寄せて立つてゐる。

木啄も庵は破らず
夏木立
と、即興の一句を物に書いて庵の柱に残した。

たゞりて卯月の天今なほ寒し。十景盡くる所、橋を渡つて山門に入る。さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟に結びかけた。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るが如し。
木啄も庵は破らず夏木立
と、とりあへぬ一句を柱に残し侍りし。

【語釋】

○奥あるけしき——奥深いやうす。けしきは、こゝは風景の意でない。
○卯月——陰曆四月。
○十景——靈石之竹林。海岸閣。十梅林。龍雲洞。玉几峰。鉢盂峰。玲瓏岩。千丈岩。飛雪亭。水分石。〔那須雲巖寺舊記〕〔史籠集覽別記第十二冊〕に據る。一景毎に細注あれど今省く。〔菅菰抄〕に記すのとは多少の異同がある。抄に曰く「玉机峰、玲瓏岩、水分石、龍雲洞、十梅林、千丈岩、竹林塔、海岸閣、飛雪亭、鐵蓋峰」ついでに五橋を記せば、無量橋、獨木橋、瓜麩橋、涅槃橋、梅船橋の五つである。十景は己にはやく廣濟國師が附けたものである。右の舊記に云ふ「廣濟國師大和尚以

十境被レ銘レ之云々」

○山門——寺の樓門。

○かの跡——佛頂和尚山居の跡。

○妙禪師の死關——妙禪師は原妙禪師の略。死關は原妙禪師坐禪の洞窟の名。原妙は支那南宋時代の高僧。字は高峯。姓は徐氏。蘇州吳江の人。始め斷橋妙倫に請益し、次に雪巖祖欽に參叩し、印記を受く。國元六年、杭州天目西峰に登り、張公洞に入り、死關と扁して、出でざること十五年に及ぶ。學徒雲集し、參請絶えず、貞元元年死關中に寂、年五十七。法臘四十三。偈に曰く「來不レ入ニ死關、去不レ出ニ死關、鐵蛇鑽入レ眼、撞ニ倒須彌山。」詳しくは、「五燈會元續略」卷三「五燈殿統」卷廿一參照。妙禪師が原妙禪師の略なる事は、「禪關策進」卷二に「天目高峯妙禪師示衆」と見え、同書卷三に「中峰本禪師（原妙の弟子）侍ニ高峯ノ死關、晝夜精勤、下略」など見えるのでも知られる。死關の意は、死は心頭を滅却するの義なるべく、關は禪の義である。中峰廣錄、十二「禪名レ關、教名レ網」

○法雲法師の石室——法雲は支那梁時代の高僧。僧旻、智藏と共に梁の三大法師と稱せられる。俗姓は周氏。義興陽羨の人。七歳出家して名を法雲と改む。建武四年、年三十歳、始めて妙音寺に開講し四衆堂に滿つ。梁帝の信任厚く、上下の歸仰深く、聲譽益揚る。天監末年秣陵縣に一寺を建て法雲寺と名づけ、庵を孤巖に結び、終日論談して倦む事がなかつた。大通三年示寂、壽六十三。曾て光宅寺の主となつたので、世に此の法師を光宅とも云ふ。委しくは續高僧傳卷五參照。續高僧傳は大藏經

に收む。石室は岩窟の義。孤巖に結んだ法雲の庵が「石上の小庵岩窟に結びかけた
リ」に似てゐるので、法雲法師の石室と云つたのである。「禪林句集」に云ふ「喪^シ妙
用^ヲ於^テ刹^ニ那^ニ超^ス情^ヲ塵^ヲ於^テ石^ニ室^ニ」

○木啄もの句——木啄は啄木鳥とも書く。攀禽類の一種。嘴で樹皮を叩き舌の先に逆
鉤を有し、樹皮下の木食虫を引き出す。夏木立は夏の木立。木の葉の青々と繁つて
ゐる事を想はせる。木立は生え立つてゐる木。たち木。森々と茂る夏木立の中の草
庵を見てゐると、啄木鳥が木を啄く音が聞えるが、此の草庵は、こんな古びても
さすがに啄き破らずにあるよの意。夏木立の茂みの静けさの中に、ひからびた凄み
が漂つてゐる。

○とりあへぬ——早速のこゝは即興の、即時のなごの意。

○侍りし——侍るは對話上の敬語なれど、古文にはさなくても用ゐる例であつた。さ
れば現代文に口譯するには省いても殆ど差支ない。しは中古の文法に従へばきとあ
るべき所。

【備考】

雲巖寺——「三千里」に云ふ「黒羽より東南又三里」の雲巖寺（巖の字相違す）に尋
ね入つた。山は奥あるけしきにて松杉黒くといふ様、一字一畫を曲げ難い。十景又
は五景の中には白絲の瀧もほそくと縷の如く落ちてゐる。橋は擬賣珠のついた太
鼓橋めいてゐるのは後人の案か。山門を甘露門といふ。佛頂禪師の跡は小庵も岩窟
もない。かたばかりの立石が草に埋れてゐつて、二抱もある丈高い橙の大樹が上茂

りに四邊を覆うてゐる。本堂庫裡鐘樓いづれも年古りて居る。二本の櫻の老木も枯
れ／＼に見える。」

雲岩寺に於ける其他の芭蕉の句——芭蕉翁句鑑に「那須雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋
ね」と詞書して、

留守に來て棚さがしする藤の花

とある。雲岸寺は雲巖寺の誤である事は明らかである。

一一一 是より殺生石に行く

その一

是より殺生石^{せつしやうせき}にゆく。館代より馬にて送らる。此
の口付のぞのこ短冊得させよと乞ふ。やさしきこと
を望み侍るものかなと、

野を横に馬ひきむけよほととぎす

殺生石は温泉^{いづゆ}の出づる山かげにあり。石の毒氣いま
だほろびず。蜂蝶^{はちてふ}のたぐひ真砂^{まさご}の色の見えぬほどか

【口譯】

これから殺生石に行く。
館代浄法寺氏から馬を
以て送られた。この馬
を牽く男、短冊をくだ
さいと乞ふ。しをらし
い事を望むものだと思
つて、一句書いてやつ
た。

野を横に馬ひきむけ

よ時鳥

殺生石は温泉の出る山陰にある。石の毒氣はまだ盡きないと見えて、蜂や蝶のたくひが、砂の色も見えぬ程重なつて死んでゐる。

【評】

殺生石の傳説などを書かぬのが却てよい。そして「野を横に」の一句に依つて此章が力づけられてゐる。

さなり死す。

【語釋】

○是——雲巖寺をいふ。雲巖寺から蘆野へ出たのである。

○殺生石——那須温泉(今、八湯)中の湯本の附近にある石。那須温泉は那須郡の極北にある。黒羽から約十里弱。鐵道東北線黒磯驛から約四里強。殺生石の名は生物是に觸るれば死ぬるより起つたもので、其傳説は玉藻の前の條に述べた。益軒の扶桑記勝、卷五に云ふ「殺生石、方七尺、高四尺餘、色黒赤し。方十間にかこみありて人を入れず。其邊に草木なし。」元來此石は那須火山から噴出した熔岩なる輝石安山石で、其周圍は硫氣洞で、水蒸氣と共に硫黃質其他の瓦斯を噴出するので、昆虫等之に觸れて死ぬるのである。之に因つて古傳説は附會されたのである。謡曲「殺生石」は此石の傳説を基としたのである。なほ備考参照。

○口付のなのこ——馬の口に附いて牽いてゆく男。くちとり。

○やさしきこと——殊勝な事。しならしい事。

○野を横にの句——今杜鵑の聲が横手に當つて聞えた、おい馬子よ、その方へ馬首を向けよといふ意。「野を横に」は野に對して横にの意で、即ち進み行く野の方向を縦と見たのである。廣漠たる野をたざる馬上の詩人の情緒が出てゐるのみならず、「ほととぎす」に依つて、初夏の曠野の氣分が出てゐる。「猿蓑さがし」に「是は頼政が、思ふべき雲井ならればほととぎす駒引きむけてしたふ聲かな」とよまれたるに思ひよせての即興也」と云つてゐるが、頼政集(群書類従本)を檢するにかゝる歌は無

い。

○温泉の出づる山かけ——温泉は那須温泉で、前述の如く湯本の附近にある。

○眞砂——細かい砂。

【備考】

これより殺生石に行く——會長が「雪まろげ」に「高久角左衛門に宿り、みちのく一見の桑門同行二人、那須の篠原を尋ねて、猶殺生石見んとこえける程に、雨降りければ先づ此所に宿りて」と詞書して、

落來るや高久の宿のほととぎす

木の間のぞく短夜の雨

芭蕉

會良

とあるから、高久に宿つたと見える。高久村は今那須村の大字で那須村の附近にある。鐵道東北線黒磯驛の北方に在つて、板室川を隔て、相對してゐる。角左衛門は俳號青楓。

殺生石——謡曲「殺生石」は後世小説戯曲の上に頗る影響を與へてゐるから、其梗概を述べよう。「僧玄翁奥州から上京の途、殺生石を過ぐるに、一人の女性現れ、昔玉藻の前といふ美人、鳥羽院に寵幸されたが、安部泰成に調伏され、逃れて遂に此野の石と化したと物語り、やがて石の中に消えた。玄翁、石に向つて祈れば、石二つに割れて野干(狐)の姿を現はし、我は天竺では班足太子の塚の神、大唐では幽王の後、褒似、我朝では鳥羽院の姫玉藻の前となつたが、安部泰成に調伏され、此野に來つて隠れたが、救に依つて三浦之介、上總之介に退治されて、惡念凝つて此石

となり、人を惱ましてゐたけれど、今や御僧の御法を受けて今後惡事を斷念したと語つて、消え失せた。前シテは里の女、後シテは野干。ソキは玄翁、所は下野、季は秋。

讀本に殺生石後日怪談(十册、曲亭馬琴著、文政七年)草雙紙に、玉藻前三國傳記(三册、式亭三馬著、文化五年)淨瑠璃に、玉藻前戀杖(淺田一鳥等作、寶曆元年、豊竹座)等がある。此の戀杖の三の切、道春館の段は今でも語られてゐる。

温泉大明神で詠んだ芭蕉の句——雪まろげに云ふ、

温泉大明神の拜殿には八幡宮を移し奉りて兩神一方に拜まれ給ふ

湯を結ぶ誓ひも同じ石清水

芭蕉

又、一葉集に云ふ、

むすぶよりはや齒にひやく清水かな

殺生石に於ける芭蕉の句——芭蕉翁句鑑に「殺生石はその石の毒氣いまだほるびず、蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬ程かさなり死す」と詞書して、

石の香や夏草赤く露暑しとある。

その二

【口釋】

又「清水流るゝ」と西行のよんだ柳は蘆野の里にあつて、今、田の畦に残つてゐる。此處の郡守戸部某が、此の柳を見せようなどと、時々申されたことがあるが、どの邊にあるのであらうと思つてゐたのに、今日此の柳の蔭に立ちよることができた。

田一枚植ゑて立ちさる柳かな

【評】

由緒の疑はしい名所で

又清水流るゝの柳は蘆野の里にありて、田の畔に残る。此處の郡守戸部某の、此の柳見せばやなどをりりのにたまひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此の柳のかげにこそ立ちより侍りつれ。

田一枚植ゑて立ちさる柳かな

【語釋】

○清水流るゝ、柳——僧西行が「道のべに清水流るゝ、柳かげ、しばしとてこそ立ちとまりつれ」とよんだ柳。歌の意は、道のとりに清水が流れて其處に柳がある。その柳の蔭に暫しの間休まうと思つて立ちとまつたのに、あまり涼しさについ／＼長くなつてしまつたよの意。此柳を遊行柳とも云ふ。之は西行の歌や謡曲「遊行柳」などに依つて此地に附會された説である。陸奥千鳥(元祿九年)に云ふ「遊行柳、蘆野入口一丁右へゆく田の畔にあり、たえず清水も流るる」

○蘆野の里——今の那須郡蘆野町。奥州街道の一驛。郡の東北部にある。雲巖寺から約五里。

○郡守——那須の郡守であらう。

○戸部某——名は不明であるが、「此の柳見せばやなど、をり／＼にのたまひ聞え給

も、それを名所として
楽しんで観て行くとい
ふのが此の紀行の一特
徴である。

【口譯】

心もとない日数が重なりながら、白河の關に通りがつて、やつと旅の氣持が落ちついた。どうか都へ知らせたいと思つて、ついでを求めたのも尤もである。數多い關の中でも、此の關は三關の一で、詩人達は感興を引くの

ふ」とあるから、前からの知人である。淨法寺も知人なれど某と云つてゐる。
○聞え——聞ゆは、いふの敬語。「聞え給ひしを」と云ふべき所。
○田一枚の句——この柳のなつかしい由緒を思ひながら、此の蔭に休んで見てゐると農夫たちは知らぬまにはや田一枚植ゑてしまつたので、ふと我れに歸つて自分は柳の下を立ち去つたといふ意。植ゑての主語は農夫、立ち去るの主語は作者である。此句は、由緒の無い柳としても、相當に面白い。

一三 心許なき日數かさなるまゝに

心許なき日數かさなるまゝに、白川の關にかゝりて旅心さだまりぬ。いかで都へとたよりもとめしもことわりなり。中にも此の關は三關の一にして、風騒の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を俛にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝を改めしことなど、清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ。

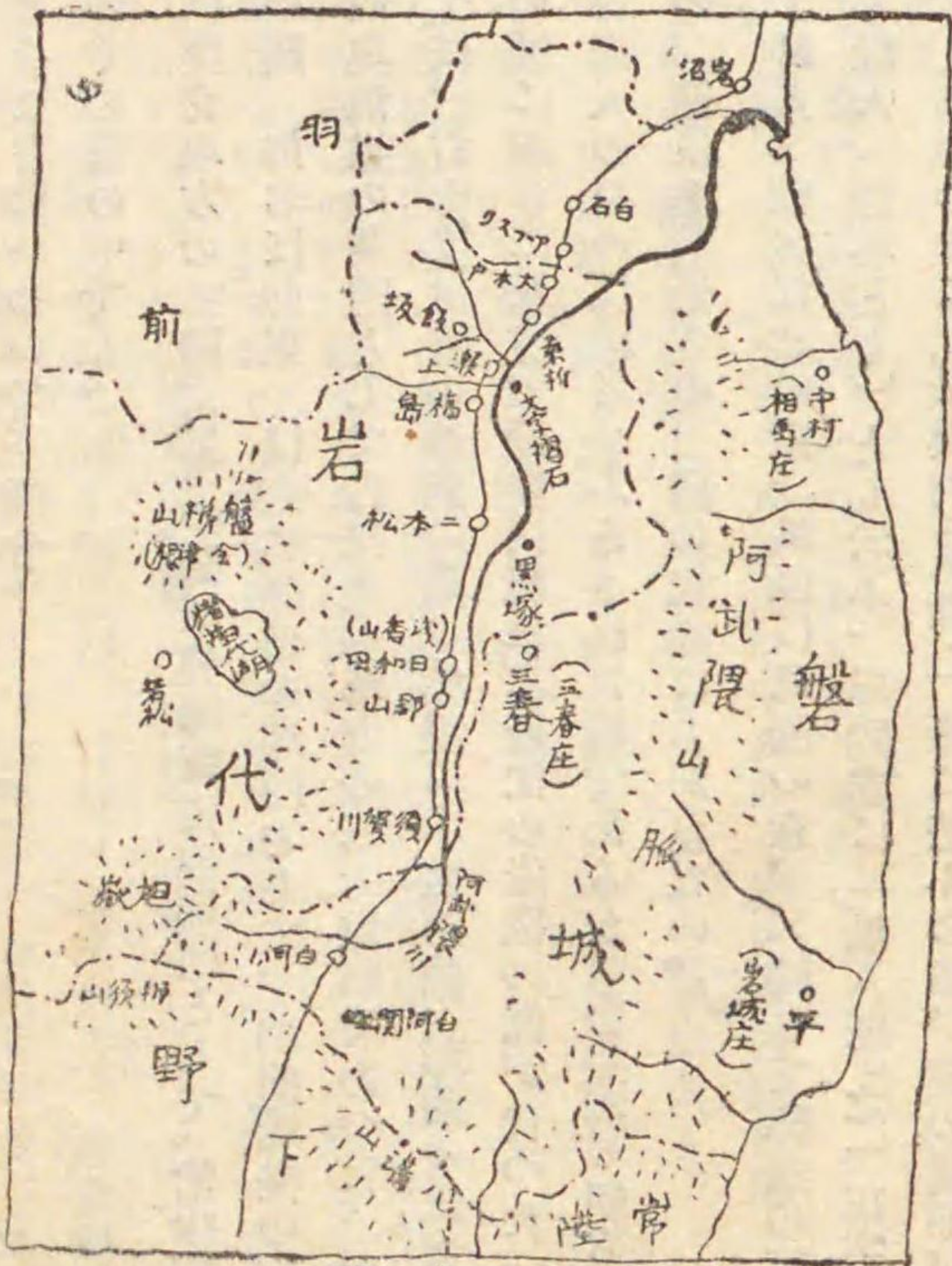
卯の花をかざしに關のはれ着かな 曾良

【語釋】

○心許なき——不安な。こゝは落ちつかぬ意。

である。能因の「秋風ぞ吹く」の歌はかねて聞いてゐるし、源頼政の「紅葉散りしく」の歌は想ひ浮べるにしても、なほやはり今の青葉の梢も趣が深い。卯の花の白く、茨の花も咲き添うて、古人の歌にもあるやうに、雪の日に越える氣持がする。昔或人が此關を越える時、冠を正し衣裝を改めた事などが、藤原清輔の袋草子に書いてあるさうだ。

卯の花を挿頭に關の晴着かな 曾良



磐城代略圖

○白川の關——既出。奥羽に入る關門である。第四頁參照。蘆野から約五里。
○旅心さだまりぬ——旅の心が落ちついた。此旅行の目的は奥州が主であるから白河に至つてやつと落ちついたのである。

【評】

雲巖寺などの叙景とちがつて、頗る古歌故事に捉はれた嫌があつて關の風趣がよく現れてゐない恨があるけれど、白河の關は奥羽に入る關門として古來詩人墨客の吟藻多く、従つて是等への回想が彼れの詩腸を動かしたものと見える。

○いかで——どうぞして。こゝは願ひの意。いかで云々は、拾遺集、平兼盛、たよりあらばいかで都へ告げやらむ今日白河の關は越えぬと、に因つて書く。歌は、今日白河の關は越えたと、機會があつたらどうぞして都へ知らせてやりたいの意。

○たより——都合よき時。ついで。機會。

○中にも——多くの關の中でも。

○三關——之は奥羽地方の三關。白河の關は奥羽街道の關門として、常陸磐城の國境にあつた菊多の關、俗名は勿來は東奥海道の關門として、羽前越後の國境にあつた念珠が關は西奥海道の關門として古來奥羽地方の三大重關であつた。別に京師に近い三關としては、古くは伊勢の鈴鹿の關、美濃の不破の關、越前の愛發の關を云ひ後、帝都が山城に遷るに及び、愛發は廢れ、近江の逢坂の關が代つた。此の近畿地方の三關は古來人の口には言ひふるされた關であるから、芭蕉も知らぬ筈は無い。されば本文の三關は奥羽地方の三關の意味にちがひない。

○風騷の人——詩人、雅客などの意。風騷は風流の意、又轉じて詠賦の事も云ふ。詩人を風人とも騷人（騷客とも）とも云ふ。三國志に「風人咏之」正字通に「今謂詩人爲騷人」高適の詩に「秋興引風騷」騷は愁ふの意、楚の屈原が讒に遇ひ正義のために愁へて「離騷」を作つてから其詩體を騷といひ轉じて詩賦の意にも用ゐる。

○秋風を耳に残し——能因の「秋風ぞ吹く」の歌をかねて聞いてなり。後拾遺集、能因法師、都をば霞とともに立ちしかば秋風ぞ吹く白河の關。「立ちし」は霞のたつ事

と旅立つ事とをかねたのである。

○紅葉を俤にして——頼政が「紅葉散りしく」と詠んだ景色を想ひ浮べるにしても。次の「なほ」に係る。千載集、源頼政、都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關。

○なほ——やはり。

○あはれなり——身にしみる意。こゝは趣のある事をいふ。

○白妙——白いこと。元來白栲で、妙は當字である。栲は古昔絹布類の總稱で、白栲は穀の木などの皮の纖維を精製して織つたもので白くて澤がある。

○雪にもこゆる——卯の花も苨も白から斯くいふ。千載集、霧旅、僧都印性、東路も年も末にやなりぬらむ雪ふりにける白河の關。

○古人冠を正し衣裝を改めしこと——藤原清輔の著、袋草紙、卷三に「竹田大夫國行と云者陸奥に下向之時白川關する日は殊に裝束ひきつくるひむかふと云々、人間て云く何等の故ぞ哉、答て云く、古會部の入道の秋風ぞふく白河の關と讀まれたる所をばいかでかけなりにては過ぎんと云々、殊勝の事歟」(原文片假名)古會部の入道は能因を指す。攝津の古會部に晩年住んだ。けなりは褻形で、平常服を云ふ。

○清輔——藤原清輔。平安朝末期の歌人、また歌學者。治承元年歿、年七十四。

○卯の花をの句——古人は此の關を通る時、晴着に着かへたといふが、若し今頃であつたら、此の卯の花を冠に挿して衣裝を改めたことであらうの意。歴史的懷古の句である。かざしは挿頭と書き、髪又は冠にさしはさむ草木の花又は枝なごを云ふ。

後世には造花をも用ゐた。晴着は晴れ即ち公の場所を着る衣で即ち正装を云ふ。王朝では束帯である。李由撰「韻塞」に「白川の關こえける時、竹田の大夫装束つくるひける事おもひ出して」と前書して此句が載つてゐる。

【備考】

三關——令義解、五、軍防に「凡置關應三守固者、中略、其三關者、謂伊勢鈴鹿、美濃不破、越前愛發等是也」二中歴、六、關路に「三關、勢多、鈴鹿、不破關」拾芥抄、下本、三關に「關、勢多、鈴鹿、不破」名目抄、公事に「三關、會坂、鈴鹿、不破、固關之時、此三關也」古事類苑、地部十八に據る。之に依るも、芭蕉の云ふ三關が奥州の三關なる事は明らかである。白河の關に於ける芭蕉の句——雪まるげに云ふ

白河關

西か東か先づ早苗にも風の音
關守の宿を水雞に問ふものを
五月雨に瀧降り埋む水嵩かな
早苗にもわが色黒き日數かな

はせを
同
同
同
「瀧」は阿武隈川上流にある石河の瀧をいふ。白河の北を阿武隈川の上流が流れてゐる。此の句は芭蕉翁句鑑に「阿武隈川のみなもとにて」と詞書してある。

一四 とかくして越えゆくまゝに

その一

とかくして越え行くまゝにあぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城、相馬、三春の庄、常陸下野の地をさかひて山つらなる。かげ沼といふ所を行くに、けふは空曇りて物影うつらず。須賀川の驛に等躬といふものを尋ねて、四五日とどめらる。

【語釋】

○あぶくま川——阿武隈川。源を白河町の西方に聳ゆる旭嶽に發し、東流して白河町の北を過ぎ、北流して福島縣を貫通し、宮城縣に入つて海に注ぐ。流程約六十里。
○會津根——懸梯山。海拔六千尺。岩代國耶麻郡にある。會津若松の東北に當る。萬葉集、十四上、あひづねの、くにをさとほみ、あはなはば、しぬびにせむと、ひもむすばされ。(歌意は、この會津嶺の國を遠ざかつたら會ひ難いから、しのぶたよりとするため、紐を結んでくれよ。)夫が妻に別るゝ時の歌である。此の歌は陸奥國として擧ぐる三首の中の一首で、他の一首には、あだたらのね(安達太郎山)を詠み入れてゐる。「左に會津根高く」と云へど、白河から須賀川へ行く道では、近い連山のため見えない。之は次の、岩城、相馬の庄が見えないのに、見える如き書き振り

【口譯】

かれこれして白河の關を越えてゆくに随つて、阿武隈川を渡つた。左方には會津根が高く聳え、右方には岩城、相馬、三春の莊があり、此の國と常陸下野との境には山嶺が連なつてゐる。影沼といふ所を行くに、今日は曇天なので、物の影が映らない。須賀川の宿に住む等躬といふ者を訪ねて、四五日引留められた。

がしてあるのと同じ事で、曖昧な書方である。

○岩城、相馬、三春の庄——岩城は今の石城郡地方で、平町が中心であり、相馬は今の相馬郡地方で、中村町が中心であり、三春は今の田村郡地方で、三春町が中心である。岩城は磐城國の東南部に在り、相馬は同國の東北部にあり、三春は同國の中央西部にある。庄は莊園の制が變じたのち、なほ莊（莊園の略）の名を踏襲してゐる地である。庄の次に「あり」などの語を補へ。さて須賀川邊から三つの庄が見えるわけではない。三春は遙かに望み得るとしても、相馬、岩城は磐城國を南北に走る阿武隈山脈に遮られて全く見えない。簡潔の極、却つて曖昧に陥つてゐる。

○常陸下野の地をさかひて山つらなる——磐城國に對して山が常陸や下野の地を境として連なるの意。即ち須賀川邊から南方を顧れば、東方は磐城國と常陸國との間に八溝山嶺が見え、西方は同じく磐城國と下野國との間に三本槍嶽、那須嶽等が聳えるのである。さて、さかひてのさかひは動詞で、昔から用ゐる。例へば萬葉、卷六、大君のさかひ給ふと山もりす云々。

○かげ沼——影沼。今の鏡田村で、附近に當時影沼といふ沼があつたと思はれる。備考参照。

○すか川——須賀川宿。今の須賀川町。奥州街道の大驛。岩代國岩瀬郡の東部にある。鐵道東北線は町の西を走る。白河から約七里。

○等射——姓は相良。名は伊左衛門。俳號は等射。芭蕉の門人。寶永二年歿、年七八。此の宿の驛長であつた。

【備考】

かげ沼——地名辭書に云ふ「鏡沼、笠石と須賀川の間なる新田にして、近年或は鏡田と呼べり、本名は影沼と云へる如し」とて、奥の細道を引き、更に云ふ「又同年代の行囊抄には、影沼新田、此も馬を次ぐ所也。民屋七十間有りて、名所といふ。或書に、影沼は空曇る日は、物影不見、往昔は、遙に望めば水波茫茫として、望無涯、飛鳥影をうつし、馬蹄波を拂へりと云々」又云ふ「天保中、村長常松氏、影沼は和田胤長の妻の死せる地なりとて、其事を書して、四方に傳へ、多く詞藻の人の吟詠を徴したり（此事は白川風土記にも載す）」と廣瀬旭莊の詩を載せてゐる。其詩の序に云ふ、

東奥岩瀬有鏡沼及化粧原、傳、建曆中、和田胤長坐父義盛事、謫于岩瀬、其妻追至鏡沼、聞其既誅、乃投沼死、天保中、土人常松菊畦立碑焉、而徵詩、さて、國花萬葉記に「又月なしの沼ともいふ。うき藻もなく、水絶ゆる事なき沼なれども昔より月影うつらす」と云へるは誤であらう。影沼はやはり物の影のうつる所からついた名であらう。今、鏡石は須賀川の少し手前にある。鏡石の西方は阿武隈川支流の盆地で、昔は沼澤であつたと思はれる。

その二

まづ白川の關いかにこえつるやと問ふ。長途の苦

【口説】

等射まづ第一に「白河

の關はどんな句を吟じて越えたか」と問ふ。

「長途の難儀で身も心も疲れたし、一方には、風景に恍惚となり、昔の有様を懐うて感慨に堪へないので、しつかりと句作も思案せず、さうだといつていちづに越えるのも残念だと思つて、やつと一句、風流の始や奥の

田植歌

と嘯いた」と語つたので、之を發句として、脇、第三と續けて、連句三卷となした。

しみ、身心つかれ、かつは風景に魂うばはれ、懐舊に腸を断ちて、はかしくしう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植歌

無下に越えんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三卷となしぬ。

【語釋】

○いかに越えつるや——さういふ句を吐いて越えたかの意。

○腸を断ちて——悲しみに堪へないで。腸のちぎる、程悲しむこと。然しこゝは懐舊の情に堪へないでといふ位の意。

○はかしくしうも——はつきりと。しつかりと。

○思ひめぐらさず——思ひめぐらすは考をこらす。思案する。こゝは、句作の事などは、はつきりと考へなかつたこと。

○風流のの句——おくは奥で、奥州。風流は風雅に同じ。白河の關を越えて奥州に入り、田植の歌を聞いたが、まことに古雅なものである、これこそ奥州に入つての風雅の聞き始めであらうといふ意。別に深い意味は無く、たゞ田植歌を賞美したに過ぎない。此の句には繁雜な異説があるが、いつも採り難い。許六の「韻塞」中の

【評】

「白川の關いかにこえつるや」とまづ問ふ等躬もさすがに雅人である。關の句は會良に譲つておいて、自分は田植歌の句を吐き、白河の關に就ては句を記してゐないのが面白い。實は作つたのであるが、氣に入つたのが無かつたのである。前章備考参照。長途の苦しみに身心疲れ、而も懐舊に腸を断つ所、平凡な句あるよりも優る。之は等躬に對する單なる挨拶のみではない。

「風狂人が旅の賦」の小序に「我が翁白河の田植歌を聞き初め、奥羽の間を廻り、下略」など、參考になる。風流には凡そ三つの意がある、一は風雅、みやびなどの意、二は嘲し物の意（下學集、下（風流、風情義也、日本俗呼三拍子物、曰風流）三は狂言の中にある祝賀の演技の一種をいふ。若し風流の始を風流の起原と云ふ意に取るならば、此の風流は嘲し物としても適せず、狂言の風流としては尙更をかし、然らば風雅の意に取るに、風雅の源が奥の田植歌といふことになつて、頗る漠然たるものになる。菅菰抄に「奥州の田植うたは生佛と云ふ目くら法師の作也と云ひ傳ふ。此生佛は平家物語にふしを付けて、琵琶に合せて謠ひ初めたるよし、徒然草にしるせり、故に風流のはじめとは申されたる也」など書いてゐるため、紛らはしくなるのである。平家琵琶と田植歌とは關係の無い事である。生佛が平家物語にふしを付けた説は兎に角として、生佛が田植歌を作つたといふのは俗説で、信じ難い事である。田植歌の如き民謡は作者のわからぬのが通例である。たとひかゝる俗説があつたとしても、芭蕉が此の説を踏まへたとは思はれない。又謠ひもの意（風流には謠ひもの意は無いのだが）に取つたとすれば、それは單に古實を述べた句になつて、内容の興味は無くなつてしまふ。子規云ふ「風流行脚の序開きの句なれば人に知られしならん」又云ふ「別に難すべき句にもあらねど、さりとして面白き節も見えず。風流の初とは暴露に過ぎたらんか。」（芭蕉雜談）

○無下に——いちづに。全く。一句も吐かないでの意。
○さすがに——次に「口惜しくて」などの語を補へ。さすがには、こゝは、とはいふ

ものの意。

○脇第三とつゞけて——脇は連句の第二句、第三は第三句である。風流のはじめやの句を發句（第一句）とし、之に脇をつけ、第三句をつけ、かくて三卷の俳諧を連れたといふ意。此連句は備考を見よ。連句の事は第七頁に詳説した。
○三卷——文勢から見れば、一卷とあるべき處である。「風流」の句を立句とした連句は一卷である。然し備考「雪まるげ」にのせた連句を見るに、別會として、連句の断片らしいものが外に二つある。かゝる點から、うっかり三卷と書き、文の推敲を忘れたのであらう。

【備考】

連句三卷となしぬ——「雪まるげ」に云ふ、

奥州岩瀬郡相樂伊左衛門亭にて

風流のはじめや奥の田植歌

覆盆子を折つてわがまうけ草

水堰きて晝寐の石や直すらん

籬ひたかじに鉢かじの聲生かすなり

一葉して月に益なき川柳

日雇屋根茸く村ぞ秋なる

ウ賤の女が上總念佛に茶を汲んで

はせを

等 躬

會 良

翁 躬

良 躬

翁 躬

世を樂しやとすむ敷物
有時は蟬にも夢の入りぬらん
樟の小枝に戀を隔てて
恨みては嫁が鳥の名も憎し
雪降る山や白髪おもかけ
酒盛は軍を送る關に來て
秋を知る身と物詠みし僧
更くる夜の壁穿破る鹿の角
僧の御伽の泣き伏せる月
色々の祈を花に籠りゐて
悲しき骨をつなぐ絲遊
山鳥の尾に鴛鴦や向ふらん
芹堀ばかり清水つめたき
薪曳く雪車一筋の跡ありて
おのゝ武者の冬籠る宿
筆とらぬものゆる戀の世に合はず
宮に召されし浮名はつかし
手枕に細き肱をさし入れて

躬良翁 躬良翁 躬良翁 躬良翁 躬良翁 躬良翁 躬良翁 躬良翁 躬良翁 躬良翁

何やら事の足らぬ七夕

住みかへる宿の柱の月を見て

薄あからむ六條が髪

切櫛枝うるさくも撰り残し

太山鷓の聲のしぐる、

ニウ淋しさや湯守も寒くなるまゝに

殺生石の下走る水

花遠き馬に遊行を導きて

酒の迷ひの醒むる春風

六十の後こそ人の正月なれ

蠶飼する家に小袖重ぬる

翁十二 等躬十二 會良十二

良躬翁 良躬翁 良躬翁 良躬翁

又、雪まろげに云ふ、

別 會

旅衣早苗につゝむ乞食人

淺香の堤あやめ折らすな

夏引の手引の青苧操りかけて

「乞食人」は「一葉集」に「食をはん」とあるのが正しからう。

會良

はせを

等躬

別 會

刈りやうをまた習ひけりかつみ草

市の子供の着たる細布

日面に笠をならぶる涼みして

等躬宅の芭蕉へ黒羽の排雪から送つた句——雪まろげに云ふ、

はせをの翁、みちのくに下らんとしてわが茅屋をおとつれてなほ白川のあなた須

賀川といふ所に留まりはべると聞きて、申し遣しける

雨晴れて栗の花咲く跡見かな

いづれの草に鳴き落つる蟬

夕餉食ふ賤が外面に月出でて

秋來にけりと布たくるなり

等躬

會良

はせを

等躬

桃雪

等躬

はせを

會良

一五 此の宿の傍に大きな栗

【口譯】
此の宿驛の傍に大きい栗の木蔭をたよりにして庵を結んでゐる隠遁の僧がある。椽の實を

此の宿しゆくの傍に大きな栗の木蔭をたのみて、世をいとふ僧あり。椽とち拾ふ太山みやまもかくやと間におぼえられて、物に書付け侍る、其詞、

拾ふ深山もこんなであ
らうかと何となく感ぜ
られて、紙に書きつけ
た、其の文句は、

栗といふ文字は西の
木と書いて、西方に
ある極樂浄土に縁が
あると云つて、行基
菩薩が一生涯杖にも
柱にも此の木を御用
ゐなかつたさうであ
る。

世の人の見つけぬ花
や軒の栗

【評】

「物に書付け侍る」と
云つて書いた「栗とい

栗と云ふ文字は西の木と書いて、西方浄土にたより
ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用ひ給
ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

【語釋】

○世をいとふ僧——隱遁の僧。名は可伸、俳號は栗齋。俗の姓名を築井彌三郎と云ふ。
備考参照。

○椽拾ふ太山——椽拾ふは椽の實を拾ふこと。椽の實は昔から食用に供した。西行の
歌に「山深み岩にせかる、水ためむ、かつく落つる椽拾ふほご」(山家集)などを
思ひ浮べて書いたものであらう。山家集は芭蕉が愛吟したものと見えて、旅行中、
頭陀の中に入れてゐたものである。木曾のやうな山國には椽の木が多いと見えて、
前年信州を旅行した時にも「木曾の椽うき世の人のみやげかな」(更科紀行)の句
がある。うき世といふので、椽は山深い處にある事を意味してゐる。太山はみやま
と訓ませたのであらう。太山は泰山(支那山東省)を云ふ場合もあるが(孟子、盡
心上「孟子曰、孔子登三東山、而小レ魯、登三太山、而小三天下」)、こゝはさうでなく、
須賀川の等躬宅で催した俳諧(第七二頁参照)の中に
切櫛枝うるさくも撰り残し

等躬

太山鶴の聲のしぐる、

曾良

とあつて、みやまつぐみと訓ませてゐるから、右の太山も深山みやまの義に使つたものと
思はれる。みやまつぐみは、み山にすむ鶴で、後拾遺集、物名「大和路をたえず通
ひし折のみやまつぐみ見けむ井手の玉水」山家集「さまざまにあはれをこめて木す
み吹く風に秋知る太山邊の里」

○間に——之はそゞろにと訓ませたのであらう。間にはそゞろと云ふ意はないが、こ
ゝの文を見るに、「椽拾ふ太山もかくやと」に閑靜な意味は十分あらはれてゐるから、
更に「間に」或は間しづかにと讀んでは靜かなことを再び繰返すこととなり贅語となる。
按ふに、「そゞろありき」を漫歩とも閑歩(間、閑、閑とも通じて使ふ)とも云ふか
ら、無理な讀方ではない。沼波氏芭蕉全集中の奥の細道にも、「そゞろ」と振假名が
ついてゐる。

○栗と云ふ文字は西の木と書いて——栗の字は、正しくは木の上に西で、西の字では
ない。之は俗傳に過ぎない。

○行基菩薩——奈良朝の僧。法相宗。天平十七年詔によつて大僧正となる。天平勝寶
元年正月、聖武上皇、光明皇后等、行基を請じて菩薩戒を受け給ひ、即日大僧正を
改めて大菩薩と號す。同年二月示寂、年八十二。

○世の人の句——此人の軒には栗の木があつて、今花が咲いてゐるが、あまり寂し
い花なので、人の目に立たぬ、こゝのあるじもさういふ有様で、人の目につかぬや
うに隠れ住んでゐるの意。主人の上をも含めた句である事は、等躬宅俳諧の發句に

ふ文字云々」の紙は、
きつと栗齋に與へたも
のであらう。行基菩薩
まで引き出して栗の木
を讚美してゐるし、又
連句のはしがきを見れ
ば栗齋の宅で催したら
しいから、栗の木蔭に
住む僧への贈物にちが
ひない。

戀すれば世にうとまれてにくい頬
氣もせきせはし忍ぶ夜の道

入口は四門に法の花の山

乙鳥をとむる蓬生の垣

蘭 齋 良 雲

金蘭集（文化十年、京都浦井刊行の木版本）には詞書に「元祿二年卯月廿四日築井彌三郎宅にて」とある。雪まるげには栗齋が栗築となつてゐる。築井彌三郎は此の栗齋の事にちがひない。三千里に云ふ「芭蕉の軒の栗の句も等躬の宿に在る間の作であるが、其句碑許りは此地の俳人雨考の勸進になるものとやらで、小學校々庭にある。側に年老いた榎の木がある。「軒の栗」と題した菓子も附近で賣つてゐる。」

一六 等躬が宅を出でて

等躬が宅を出でて五里ばかり、檜皮の宿をはなれてあさか山あり。道より近し。此のあたり沼多し。かつみ刈る頃もや、近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ふぞと、人々に尋ね侍れども、さらに知る人なし。沼を尋ね人にとひ、かつみくと尋ねありきて、日は山

【口譯】

等躬の家を出て五里ばかりして日和田の宿がある、此宿を離れると浅香山が見える。本道から近い。此の邊には沼が多い。かつみ刈る頃もやうく、近づくの

のはにかゝりぬ。

【語釋】

○檜皮の宿——今の日和田村。安積郡山野井村大字日和田。須賀川から約六里。古名安積の宿といふ。

で、どんな草を花かつみと云ふのかと、人々に尋ねたけれども、まるで知る人がない。有名な浅香の沼を探したり人に問うたりして、かつみくと尋ねあるいてゐるうちに日は西の山に没しかけた。

【譯】

普通の旅客には、かつみ位は問題にせぬかも知れない。だが、昔の詩人などの口のはにのほつた自然の風物をなつかしむ芭蕉の心には『懷舊に腸を斷ち』そ

○あさか山——安積山。浅香山、朝香山とも書く。日和田村の北方にある丘陵をいふ。日和田の西方、即ち猪苗代湖の東南にある額取山（三二四〇尺）とする説は信じ難い。備考参照。安積山は萬葉集に詠まれ、古今集の序に取られ、古來歌枕として有名である。萬葉集、十六卷、安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾が思はなくに。（第三句までは單に浅きと云はん爲の序詞で、浅くは思つてゐないのにの意。備考参照。）又古今集の序に「難波津の歌はみかごのおほん始なり。あさか山の言の葉は采女のはふれよりよみて、この二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始にものしける。」難波津の歌は「難波津に咲くや木の花冬こもり今を春べと咲くや、この花」を云ふ。此歌は王仁の作と傳へられるが、疑はしい。備考参照。

○かつみ——眞菰の異名。菰ともいふ。沼澤の浅水に自生する草本で、春、筍状の新芽を出し、夏に至り莖の高さ三四尺から高きは七八尺に達する。莖葉共に菰に似てゐる。秋莖頂から一二尺の穂を出して淡緑色の小花を綴る。花の咲いたかつみを花かつみと云ふ。古今集、戀四、よみ人しらす、みちのくの浅香の沼の花かつみ、かつ見る人にこひやわたらむ。（「花かつみ」までは「かつ見る」といはんがための序詞で、歌意には關係がない。ちよつと見た人をこれからいつ迄も戀ひしたふことであ

れらの一草一木にも詩
的情緒が湧いたのであ
る。「かつみく」と尋ね
ありきて、日は山のは
にかゝりぬ」に奥の細
道の旅の全精神が紅玉
の如く凝つてゐる。

らうかの意) などの歌があつて、昔から有名であるから、芭蕉は人に尋ねたのであ
る。浅香の沼は歌枕として昔から有名で、安積郡山之井村大字日和田村にあつた沼
で、今は田地となる。又今鏡、卷十に、實方中將が五月五日に、あやめ茸く事を國
の人に尋ねたところが、此國にはあやめは生えないと答へると、それではかつみを
茸けと云つたので、こもを茸いたといふ話を書いてあるが、此話の眞偽は兎にかく
として有名な話である。そして此話がかつみはこもの事だといふ一證にもなる。こ
もをかつみといふ事は已にはやく散木集にも見える。

○かつみ刈る頃もや、近うなれば——やはやうくと同じ。「奥の細道拾遺」に「四
月十二日、奥州岩瀨郡相樂伊左衛門亭にて」と題して連句を載せてゐるから其頃で、
あらう。細道に「等躬といふものを尋ねて四五日とごめらる」と云つてゐるから、
十二日は此数日の中の或日を指すにちがひない。枕草子に「卯月のつごもりに、長
谷寺にまうづとて淀のわたりといふをものせしかば、中略、菰積みたる舟のありき
しこそいみじうをかしかりしか」とある。陰曆四月末頃刈つたものと思はれる。あ
りきしは往來したといふ意。

○さらに——少しも。全く。

○沼——安積の沼。

【備考】

あさか山——細道に「道より近し」といひ、奥羽觀跡聞老志に「日和田村北、有
一圓丘、是安積山也」といひ、陸奥千鳥(元祿九年)に「行きくくて奥道日和田へ

出る。此の所四丁行きて道端右の方に浅香山、南部若草山の傍あり、名ある山とは
見えたり。巔に若き榎三本あり、往來の貴賤登ると見て徑あり。麓より巔まで四十
三間、麓の廻り二百六十八間。

五月女に土器投げん浅香山

此の山より未申の方、山際に帷子かたびらといふ村に采女塚。山の井も此のあたり、藪の根
に葎おほひて底も見えわかず。

山の井を覗けば應ふ藪蚊かづみかな

浅香の沼は田島となり、かつみ草、花蔕かづみ、いづれとも知れず。たゞあやめなりとい
ひ眞菰なりといひ、説々多し。菖蒲池といふは此處にあり。」さて安積山の歌から考
へても、高くない山であることがわかる。されば額取山ひりやまでない事は益々明らかであ
る。

萬葉集十六卷にあつた安積香山の歌の次に云ふ「右歌傳云、葛城王遣子陸奥國之
時國司祇承緩意異甚於時、王意不悅、怒色顯面、雖設飲饌、不肯宴樂、於
是有前采女風流娘子、左手捧觴右手持水、擊之王膝、而詠此歌、爾乃王意解
脫、樂飲終日。」之によれば葛城王といふ人が陸奥國に遣はされた時、國司の待遇が
粗末であつたので、王は悦ばなかつた。そこで前に采女をした事のある少女が風流
な女で、御酌をしながら右の歌を詠んだら王の機嫌がなほつたといふのである。然
しかの歌は全く戀の歌で、私は浅くは思つてゐないのに、あなたは私を愛してくれ
ないといふ意で、右の、王の怒を解くために歌つたといふ傳へは信じ難い。采女は昔

天子の御膳を給仕する官女で、諸國から容儀才能ある者を選んだ。「難波津」の歌は天子の事を詠んだ始とあるが、此歌は古今集の古註に王仁の作とあるけれども、先哲は之を疑つてゐる。賀茂眞淵は仁徳天皇の朝（難波の宮）の歌の姿ではないといつてゐる。（續萬葉論）篤論である。

安積の沼——右の陸奥千鳥にいふ帷子は片平なるべく思はれるが、片平村にあるとしては遠過ぎる。片平は郡山から三里ある。之は松藩搜古（地名辭書所引）に「今日和田の里の、東勝寺の後の田面を安積沼の舊跡とす」とあるに従ふべきで、安積山の位置から考へてもさうである。兎に角此地方は昔沼澤が多かつたので、後世淺香沼をいづれかの沼に附會したのがあるやうだから、其眞偽を確めるのは容易でない。又此の沼を詠み込んだ歌は机上の作も多いから、漫然たる想像のものも多いので、古歌を引例にして説くのも危険である。

一七 二本松より右にきれて

【口説】
二本松から右に折れて、黒塚の岩屋を一見し、福島に宿つた。翌日はしのぶもぢ摺の石を尋ねるため忍の里に

二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島にやどる。あくればしのぶもぢ摺の石を尋ねて忍の里にゆく。はるか山かげの小里に石半土に埋れてあり。

行つた。遙か山かけの小さな村に石の半ば土に埋れた所がある。村の子供らが來つて教へた「昔は此山の上にありましたが、往來の人が麥を抜き荒らして此石に摺つてみるのを悪んで、此の谷に突き落したら、石の表面が下になりました」と云ふ。さういふ事もあつたかも知れない。

早苗とる手もとや昔忍摺

【評】
黒塚は「黒塚の岩屋」

里の童部の來りて教へける、昔は此山の上に侍りしを、往來の人の麥草をあらして此石をこゝろみ侍るをにくみて、此谷につき落せば、石の面下さまにふしたりと云ふ。さもあるべきことにや。

早苗とる手もとや昔しのぶすり

【語釋】
○二本松——今の岩代國安達郡に在る二本松町。阿武隈川の左方に位し、奥州街道の一驛で、須賀川から十里半ある。今は鐵道東北本線の一驛。
○黒塚の岩屋——黒塚は二本松の東方で、阿武隈川を隔て、東、大平村にある。所謂安達原の黒塚で、岩の洞穴をいひ、昔鬼の住んだと稱せらるゝ所。備考參照。
○福島——今の福島市。岩代國信夫郡の東方にある。二本松から四里二十丁。奥州街道の一驛。今福島縣廳の所在地。
○しのぶもぢ摺の石——しのぶもぢすりはしのぶすりとも云ふ。葱草の莖や葉を深綠其他の色にて布帛に摺り込んで染めたものをいふ。もぢすりといふは、其模様が縋れ亂れた有様であるから云ふ。葱草は羊齒類蕨科の草本。昔は榛、露草なども衣に摺つた。又石も此の石に限つたことはなく、摺るに都合よき石は皆用ゐたのである。亂れた模様である事は次の歌によつてもわかる。古今集、戀四、河原左大臣、

見し」で何も書かず、文字摺石に大部分筆を費してゐるのは、此の石に心を引かれてゐたと見える。然し「さもあるべきことにはや」は少し無頓着である。こんな大きい岩は二三十人か、つても動かし得まい。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに。河原左大臣は源融とほるである。「みちのくのしのぶもぢずり」はみだれと云はんための序詞で、歌意には關係がない。歌意はみだれそめたのは君ゆゑであるの意。忍摺の石は信夫郡岡山村大字山口にある。陸奥千鳥巻五に云ふ「福島より山口村へ一里、此處より阿武隈川のわたしを越え、山のさしかり、谷間に文字摺の石あり。石の寸尺は風土記に委しく見えたり。いつの頃か岨より轉げ落ちて、今は文字の方下になり、石の裏を見る。扇にて尺をとるに、長さ一丈五寸、幅七尺餘、楯の丸太をもて圍ひ、脇よりの目印に杉二本植ふ、傍の小山に道祖神安置す。右の山口村へ戻り、海道へ出る。行きもどり二十丁あり。

文字摺の石の幅知る扇かな」

海道は街道で、奥州街道である。

○忍の里——此文によれば、しのぶ摺の石のある山口村を指してゐる。此處から月の輪のわたしまで三十丁ある。

○麥草——生えてゐる麥。

○早苗とるの句——手もとは、こゝは手なみ、技倆などの意。今田圃たんぼを見れば、早苗を取つてゐる女どもが見えるが、その手なみは、昔は忍摺をした手なみだと思ふと、昔がそゞろに忍ばれるとの意。しのぶは昔をしのぶ意と、忍摺のしのぶとを言ひかけてゐる。言ひかけはつまりらぬ技巧であるが、此の句は之れのために傷けられた感じも起らない。

【備考】

黒塚——この黒塚傳説は、平兼盛の歌及び謠曲「黒塚」等に依つて附會されたものである。拾遺集、雜下、みちのくに名取のこほりくろつかといふ所に重之がいもうとあまたありとき、ていひ遣はしける、兼盛、陸奥の安達の原の黒づかに鬼こもれりといふはまことか。鬼とは女をいふので、こゝは源重之の妹を指すのである。謠曲黒塚は此の歌に着想を得たもので、廻國の山伏祐慶が安達原の黒塚で行き暮れ宿を借りた所が、あるじの女は、裏の山に薪を採つてくる間隙を決して覗くと云つて出た。山伏かの間を見るに、人を殺して食つた死骸や骨が山積してゐるので驚き恐れ、逃げ出すと、女は鬼の姿を現し、怒つて追ひかけくるのを、山伏は法力を以て祈り伏せたと云ふ筋である。さて歌のはし書きには「名取のこほり黒塚といふ所」とあつて、之に據れば黒塚といふ所は陸前國名取郡の地名である。然るに歌には「安達の原の黒塚」とあつて、はしがきに合はない。何となれば安達の原は名取郡には無くて、今の岩代國安達郡にある安達太郎山あかたか（安達嶺）の東方一帯の裾野を安達の原と云つたもののやうであるから。さればかの兼盛は黒塚と安達の原とを机上で漫然結びつけたものと思はれる。今、黒塚と稱する邊を昔の安達の原の跡と云ふけれども、信じ難い。然し大平おほたいら（黒塚のある村）の名などから考へると、此邊にかけて安達の原と昔云つたものかも知れない。かくて或古墳に傳説の黒塚を附會したものであらう。三千里に云ふ「二本松では白河案内して安達原黒塚の跡を見に行く。岩組のそれかと思はれる物があつて、側に觀世寺といふ藁葺の寺がある。寶物とい

ふものもいろく並べてあつた。鬼女の薪をとり往つた裏山は、今吉野櫻の若木が植ふつけられて、安達が原公園と名がかはつてゐる。

寶物の鬼氣も蝕む秋の風

しのぶもぢぢの石——藤井高尙の伊勢物語新釋卷一に云ふ「しのぶすりは同書に陸奥の信夫郡より昔すりて出せる名物なりといへるぞよき。東鑑に信夫毛地摺干端と云ふ事見えたり。顯昭も陸奥國の信夫郡にもぢすりて髪をみだしたるやうにすりたるをしのぶすりといふといへり。古意の説はわろし。古川辰が東遊雜記にかけるやう、みちのおくの福島に里にて、あざなを沼崎長左衛門といふ人にあひて、もぢ摺石の事をとひしに、その人のいひげらく、今それとてあるはうけ難し。思ふに古へこのあたりにては、衣を染むるわざを知らず、石の面の平らなるに、色よき草を並べおき、藤布をおほひて、丸き小石をもて上より摺りて、草花の色を布へうつし、なるべし。今もこゝより十里もをちの出羽の國に近き所などにては、貧しき者どもしかするを見しに、みやびたるものなりと云ひ、信夫郡なるおもてのたひらなる石は、いづれも古へのもぢ摺石ならんといらへきと書けり。あなには昔のわざの残れる事多ければ、げに此の説の如くなるべし。」同書とあるは勢語臆斷のこと。古意とあるは伊勢物語古意のこと。東鑑云々の事は、文治五年九月十七日の條に見える。文字摺に就ての芭蕉の文

「翁反故」に云ふ、

文字摺石

みちのくしのぶ摺の石は福島驛より東一里半にあり。里人のいへるは、往來の人の麥草をとりて摺石をこゝろみ侍るをにくみて、この谷に落し入れ侍るとなむ。石のおもては下さまになりて、いまはさるわざする事も絶えたり。風雅の昔に衰ふるなむいと本意なしや。

早苗つかむ手もとや昔しのぶ摺

「小文庫」に云ふ、

文字摺石

忍の郡しのぶの里とかや、文字すりの名残とて、方二間ばかりなる石あり。摺石は昔女の思ひに石になりて、其面に文字ありとかや。山藍摺りみだる、故に、戀によせて多くよめり。今は谷あひに埋れて、石の面は下さまになりたれば、させる風情も見えず侍れども、さすが昔覚えてなつかしければ

早苗とる手もとや昔忍すり

芭蕉の其の他の句——雪まるげに云ふ、

五月乙女に仕方望まん忍摺

按ふに、此の句が初案かも知れない。

はせを

一八 月の輪のわたしを越えて

月の輪のわたしを越えて、瀬の上と云ふ宿に出づ。

【口譯】

月の輪の渡を越えて瀬

之上の宿に出た。信夫
 莊司佐藤元治の舊跡は
 左の山際に在つて一里
 半餘ある。飯坂の村な
 る鯖野だと聞いて、尋
 ねくして行くに、丸
 山といふ所に探り當て
 た。是れが莊司の舊館
 である。山の麓に城の
 大手の跡などがあるの
 を人から聞いて懷舊の
 涙を落したが、又傍の
 古寺に佐藤一家の墓碣
 が存してゐる。其中で
 も元治の子、繼信忠信
 兄弟の嫁の墓石がまづ
 第一に身にしみる。女

佐藤莊司が舊跡は左の山際一里半ばかりにあり。飯
 塚の里鯖野さびのと聞きて、たづねくゆくに、丸山と云ふに
 尋ねあたる。是れ莊司が舊館なり。麓に大手おほての跡な
 ど人のをしふるにまかせて涙を落し、又かたはらの古
 寺に一家いっけの石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先
 づあはれなり。女なれどもかひくしき名の世に聞
 えつるものかなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠き
 にあらず。寺に入りて茶を乞へば、こゝに義經が太刀
 辨慶が笈をとどめて什物じぶつとす。
 笈も太刀も五月さつきにかざれ紙幟
 五月朔日のことなり。

【語釋】
 ○月の輪のわたし——今の五十邊いからべの渡。備考参照。福島市を去る一里ばかり、

といふ評判が高かつた
 ものだと思つて袂をぬ
 らした。晉の羊祜の墮
 涙の碑といふべきもの
 が此處に在るわけだ。
 かの寺に入つて茶を乞
 へば、此の家に義經の
 太刀や辨慶が笈を保存
 して寶物としてゐる。
 笈も太刀も五月にか
 ざれ紙幟

【評】

「驛旅邊土の行脚、捨
 身無常の觀念、道路に
 死なん是れ天命なり」
 と觀じて旅する一方
 に、庄司が舊館を見て

松川の南岸にある。

○瀬の上——奥州街道の一驛。福島から二里八丁。今の信夫郡瀬上町。

○佐藤莊司——信夫莊司佐藤元治。元治は信夫郡を領してゐた。繼信、忠信の父。

一に基治とも書く。世々信夫の庄司。源頼朝の軍が泰衡を攻むるや、之を石那阪に
 防ぎ、部將十八人と共に戦死した。(大日本史)

○飯塚の里鯖野——佐場野。飯塚の里は飯坂の誤である事は明かである。尙飯塚の項
 に説く。佐場野は今、平塚、井野目、入江野と共に平野村と改む。飯坂町の西南に
 當る。

○丸山——飯坂の西約半里。佐藤莊司が大鳥城の跡といふ。備考参照。

○大手——城の前面。搦手なめに對する語。

○かたはらの古寺——瑠璃光山醫王寺といふ。備考参照。

○一家——佐藤一家。陸奥千鳥には「一門石塔」とある。石碑も石塔の意に用ゐられ
 る。

○二人の嫁がしるし——二人の嫁は繼信忠信兄弟の嫁。しるしは標しるしで、こゝは墓石で
 ある。二人の嫁の話は、橋南谿の東遊記卷一に詳記されてゐる(東遊記は天明四年
 秋から六年夏にかけての東海東山北陸の旅行記)曰く「奥州白石の城下より一里半
 南に才川といふ驛あり。此才川の町末に高福寺といふ寺あり。中略。此寺中に又一
 つの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。中略。やうく縁にあり見るに、内に佛と
 て無く、唯婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。いかなる人の像に

「涙を落し」繼信忠信兄弟の嫁が貞烈至孝を聞いて「袂をぬらし」てゐる所に、芭蕉の、人間として又詩人としての深大な價值がある。彼れが俳壇の泰斗として門人を景慕させた所のものは、その俳諧の優秀であつたのに因るばかりではなく、この至純な愛が然らしめたものではなかつたらうか。

やと尋ねるに、佐藤次信忠二人の妻なりとかや。其昔、義經、鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞き、秀衡にいとま乞して鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、我子の次信忠信を御供に出せり。其後義經京都へ攻め登り、平家を追落し、一の谷八島などにさばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來り給ひし時、はじめつき従ひて出でたりし龜井片岡など皆無事にて歸國せしに、次信は八島にて能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義の爲に命をおとし、兄弟二人とも他國の土となりて、形見のみかへりしを、母なる人悲み歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけて、せめては一人なりとも此人々の如く歸りなばなご泣沈みぬるを、兄弟の妻女其心根を推量し、我が夫の甲冑を著し、長刀を脇にさみ、いさましげに出立ち、唯今兄弟凱陣せしと、其佛を學び老母に見せ、其心をなぐさめしとぞ。其頃の人も二人の婦人の孝心あはれに思ひしにや、其姿を木像に刻みて置きしとなり。嗚呼兄弟の人は古今ためし少き忠義武勇の士なり。其人につれそひし婦人又希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも世に珍しきことなり。余此物語を聞き、此像を拜するに、そゞろに落涙せり、下略。陸奥千鳥卷五（卷五は蕉門桃隣が元祿九年の旅行記）に「これより才川村入口に鐙摺の岩あり、一騎立の細道なり。少し行きて右の方に寺あり、小高き所、堂一字、次信忠信兩妻、軍立の姿にて相並びたり、外に本尊なし。

軍めく二人の嫁や花あやめ」

○かひくしき——けなげなる。

○墮涙の碑——晋の羊祜やうこといふ人の石碑を後世の人々が見て、涙を墮したので、墮涙

の碑と名づけられた。遠きにあらずとは、遠く求める迄もなし今此處に人をして流涕させる碑があるといふ意。尙、羊祜の故事は備考参照。

○笈——山伏又は行脚僧などが旅する時、佛具、衣服、書籍、食器等を入れて背に負ひゆく物。多く長方形で脚がある。

○什物——こ、は寶物の意。もと器物の意。單に器物の意に用ゐる場合もある。

○笈も太刀も」の句——もはや五月の節句の頃だが、紙幟と共に寶物の笈も太刀も飾つたがよい、さうしたら玩具とちがつて、生きた寶物であるから、子供らも之を見て一層勇士にあやからうぞの意。紙幟は紙で作つた幟で、幟は細長い旗の耳に竿を通したものである。五月五日は特に男の子の節句として祝ふのである。紙製の鯉幟を立てるのも男の子の登龍門を祈るのである。但し右の俳句は教訓的意味があるのでない。

【備考】

月の輪のわたし——地名辭書にいふ「芭蕉の日記に月輪渡とあるも即ち此五十部の渡ならん（月輪山あり）」又云ふ「文字摺石は五十部の渡口より凡三十丁に在り、觀音堂其傍にあり、又相並びて月輪御所の跡あり、相傳ふ、貴族豪家の遺墟なり」と五十部は今、五十邊と書く。

丸山——奥羽觀跡聞老志に云ふ「佐藤莊司館、上飯坂村西、在天王寺中野村之間、稱大鳥城、郷人謂之丸山城、有寺號瑠璃山吉祥院醫王寺、修禪宗、莊司父子古墓有之云々」陸奥千鳥卷五「佐藤庄司舊跡、丸山城跡あり。」

かたはらの古寺——陸奥千鳥卷五に云ふ「一里ゆき左の方、徑より佐葉野といふ所二里分け入る。瑠璃光山醫王寺、寶物品々ある中に、義經の笈、辨慶手跡、大般若あり。」

墮涙の碑——晉書、羊祜傳に「祜樂山水、每風景必造峴山、置酒言詠、終日不倦、嘗慨然歎息、顧謂從事中郎鄒湛等曰、自レ有宇宙、便有此山、由來賢達勝士登レ此遠望、如我與卿者多矣、皆湮滅無レ聞、使二人悲傷、如百歲後有レ知、魂魄猶應登レ此也、湛曰、公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望、必與此山俱傳、至レ若二湛輩、乃當如二公言二耳、云々、祜卒、襄陽百姓於峴山祜平生游憩之所、建レ碑立レ廟、歲時饗祭焉、望二其碑二者、莫レ不流涕、杜預因名、爲二墮涙碑二之、峴山の碑とも云ふ。峴山は湖北省襄陽府にある山。

一九 其の夜飯塚に泊る

其夜飯塚に泊る。温泉あれば湯に入りて宿をかるに、土座にむしろを敷きてあやしき貧家なり。灯もなければ圍爐裏の火かげに寢處をまうけて臥す。夜に入りて、雷鳴り雨頻りに降りて、臥せる上よりも、蚤蚊

【口譯】

其夜飯塚に宿つた。温泉があるので湯に入つて宿を借るに、土間にむしろを敷いてあつて、見すほらしい貧家である。燈火も無いので、圍爐裏の火の近く

にせゝられてねふらす。持病さへ發りて消入るばかりになん。みじか夜の空も漸く明くれば又旅立ちぬ。猶よるの餘波心すゝます。馬をかりて桑折の驛に出づる。

【語釋】

○飯塚——飯坂の誤。今の信夫郡飯坂町。福島市を去る北西二里半。阿武隈川の一小支流摺上川の右岸にあり、川を隔て、伊達郡湯野の温泉と相對してゐる。飯坂は温泉を以て有名で、數泉ある。

○土座——土間。土座はごまと思はれる。

○あやしき——見すほらしい。賤しい。

○せゝられて——せゝるはつゝきいぢる意。一本には「せめられて」とある。

○持病——芭蕉は胃が悪かつた。「次郎兵衛物語」に「七月三日深川につく。積氣の御惱みゆゑ無程御快復也」積氣は胃痙攣である。なほ他の條にも見える。七月は天和元年七月。又痔疾を憂へた。「翁ある御方にて會なかに席を立ちて長雪隠をせられけるを、いく度もめし出でけるに、やゝへて手洗ひ口を、ぎて喚うて曰く、人間五十年といへり、我二十五年をば後架にながらへたるなり云々」(一葉集) 後架は雪隠のこと。

に寢處を設けて臥した。夜に入つて雷が鳴り、雨が頻りに降つて、ねてゐる上から雨が漏り、蚤や蚊につつかれて眠る事ができない。持病さへ發つて失神する程である。短夜の空もやうやく明けたので又出發した。やはり昨夜起つた持病がまだ残つてゐて、元氣が出ない。馬に乗つて桑折の宿に出た。

【評】

土間の上に簾を敷いた上にねて、暗いろりの火かけに蚤や蚊につ

つかれ、剩へ失神する程に持病の痛みに苦しめられながら、傍の會良を起すのも氣の毒に思つて、ひとりでもがいてゐる芭蕉が眼前に浮ぶ。かくてもなほ自然の懷をあこがれる彼れは實に魂の幸福者である。

【口譯】
「まだ行先が遠いのに、こんな病氣が發つては心もとない」と云へど、邊鄙な處を旅行するのではあるし、俗界の身を捨て、人生の

○消入る——氣を失ふ。又、息の絶える意もある。
○よるの餘波——昨夜起つた持病のあと。餘波と書くのは、風が止んでもなほ立つてゐる波の意があるからである。
○桑折の驛——奥州街道の一驛。伊達郡の西部にある今の桑折町。福島市から約三里半。鐵道東北線の一驛。出づるは出づと書くべき所。

二〇 遙なる行末をかへて

遙なる行末をかへて斯かるやまひおぼつかなしといへど、驛旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是れ天の命なりと、氣力いさゝか取直し、道縦横に踏んで伊達の大木戸をこす。鐙摺白石の城を過ぎ、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくのほどならん

無常を覺悟してゐる身であつてみれば、途中で死ぬのは天命だと思つて、元氣を少し恢復し、勝手氣まゝに道を歩いて伊達の大木戸を越した。鐙摺、白石の城を過ぎ、笠島の庄に入つたので、藤中將實方の塚はどの邊であらうと人に問うた所「之れから遙か右方に見える籠の村を鐙輪笠島と云ひます。道祖神の社や、西行が『枯野の芒かたみにぞ見る』と詠んだ芒も今に至るまで遺つてゐる」と教へた。

と人にとへば、これよりはるか右に見ゆる山際の里をみのわ、笠島と云ふ。道祖神の社、かたみのすゝき、今にありと教ふ。此の頃のさみだれに道いと悪しく、身疲れはべれば、よそながらながめやりて過ぐる。鐙輪笠島もさみだれの折にふれたりと、

笠島はいづく五月のぬかり道

岩沼にやどる。

【語釋】

- かへて——抱へて。こゝは豫定しての意。
- おぼつかなし——心もとない。
- 驛旅——旅。第二九頁參照。
- 邊土——邊鄙。かたゐなな。邊境。
- 行脚——徒歩旅行。已出。第一二頁參照。
- 捨身無常の觀念——俗界の身を捨て、人生の頼み難い事を悟つてゐる以上。觀念は瞑目靜思して悟ること。捨身は出家の意。他の場合には身命を絶つこと。

然し此頃の五月雨に道が甚だ悪しく、又疲勞してゐるから、遠くから眺めて通過した。篋輪笠鳥の篋も笠も五月雨の時節には當つてゐると思つて、

笠鳥はいづこ五月のぬかり道
其夜は岩沼に宿つた。

【評】
疲勞と持病に苦しみがら、道路に死なん是れ天命だと覺悟して氣力を取りなほす、芭蕉の心持は痛ましいほどだ。

○縦横に踏んで——勝手氣まゝに歩いて。原文、踏とある。送假名みを入れてもよいが、この文勢から察すれば、んを入れるべきである。

○伊達の大木戸——今の伊達大木戸村大字大木戸。岩代國の北部にあつて、磐城國に入る關門で、厚あつ椋山かじやまの險を扼してゐる。大木戸とは大なる入口の義である。伊達の關とも稱せられる。

○鐙摺——越河村と齋川村との間にある地名。備考参照。

○白石の城——白石は今の白石町。宮城縣磐城國刈田郡。白石城は町の西方にある。

當時片倉氏が領した。桑折から四里二十丁。奥州街道の一驛。

○笠鳥の郡——かゝる郡の名は昔からない。誤である。笠鳥の庄などと云ふべきである。笠鳥は名取郡にある。なほ後條参照。

○藤中將實方の塚——近衛中將藤原實方の塚。藤原を略して藤とも云ふ。實方は平安朝時代の歌人。一條天皇頃の人。實方の塚は名取郡愛鳥村大字鹽手しほてにある。陸奥千鳥に云ふ「岩沼を一里ゆきて一村あり。左の方より一里半山の根に入りて笠鳥。ここにあらたなる道祖神おはして、近郷の者、旅人、參詣たえず。社のうしろに原あり、實方中將の墓あり。五輪折れ崩れて、名のみばかりなり。傍に中將のめされたる馬の塚あり。朽ちもせぬその名ばかりをとゞめおきて枯野の薄かたみにぞ見る、西行。

言の葉や茂りをわけて塚二つ
これより増田の町中へ出る。五輪は五輪の塔。西行の歌は山家集及び新古今集哀傷

歌の部にある。備考参照。

あらたはあらたかに同じ。靈驗の著しいこと。左の方一里半とあるに、芭蕉の文には、右に見ゆる山際とあるので、一見怪しきやうなれど、さうでない。塚は、仙臺に向つて云へば左方なれど、右に見ゆる山際とあるのは芭蕉に教へた人の詞であるから、其人から云へば右方である。

實方は曾て京都東山の櫻を賞した時驟雨に遭つた。歌つていふ「櫻狩雨は降りきぬ同じくは霽るとも花の蔭に宿らむ。」翌日大納言藤原齊信之を天子の御前で賞めた。藤原行成傍にあつて、歌は面白いが實方の振舞はをこがましいと云つた。實方之を深く叩み、其後、殿上で行成に逢つた時口論して行成の冠を打落して庭上に擲つた。天子は半よしとら藩から之を御覽になつて實方の不敬を怒り、職を免じ、歌枕を見て參れとて、陸奥守に任じ給うた。實方は任地で死んだ。此話は撰集抄、古事談にある。備考参照。

○みのわ笠鳥——みのわは箕輪で川上村にある地名。笠鳥村の北方一里半に當る。川上村は今、高館村の大字である。笠鳥は愛鳥村大字愛鳥で、岩沼の西北二里に當る。みのわ笠鳥と一所のやうに記したのは確かでない。

○道祖神の社——前述の實方の塚参照。道祖神は第五頁参照。

○かたみのすゝき——實方の塚の條参照。之はかの西行の「枯野のすゝきかたみにぞ見る」と詠んだまは今に存するといふのである。

○笠鳥はの句——實方の舊蹟のある笠鳥はこの邊であらうか、行つて見たいが、疲れ

のため行く事ができないで、五月雨のぬかり道を歩くことよの意。五月のぬかり道とあるから勿論五月雨を思はせる。前書にもあるやうに、此の五月雨の縁として笠島を持つてきた洒落しゃんも含まれてゐる。さて此の句は、舊蹟にあこがれる夢のやうな心持と、ぬかり道に疲れた現實の心とが作者の胸の中に入り亂れてゐる事がうなづかれて面白い。芭蕉の旅の心の代表的横断面である。

○岩沼——名取郡にある今の岩沼町。阿武隈川の左岸にある。奥州街道に沿ふ。古名は武隈たけくま。白石から約八里。

【備考】

藤中將實方の塚——實方に關する前述の話は西行の著といはれる撰集抄及び古事談（作者不詳）に基づく。正史には見えない。撰集抄卷五に云ふ「昔殿上のをのこごも、花見んとて東山ひがしやまにおはしたりけるに、にはかに心なき雨ふりて、人々さわぎ給へりけるに、實方中將木のもとに立ちよりて、

櫻狩雨はふりきぬ同じくはねるとも花のかげにかくれむ

とよみて、もりくる雨にさながらぬれて、將東しほり侍る。此事、興ある事に人々思ひあはれけり。又の日齊信の大納言、主上にかゝる面白き事の侍りしと奏せらるるに、行成その時、藏人頭くらねにておはしけるが、歌はおもしろし、實方はなこなりとのたまひてけり。此詞を實方もれ聞き給ひて、深く恨をふくみたまふとぞ聞き侍る。」將東は裝束の當字である。

古事談、臣節の條に云ふ「一條院御時、實方與行成於殿上二口論之間、實方取二

行成之冠、投棄小庭退散云々。行成無繆氣、靜喚主殿司取寄冠、擺砂着之云、左道にいまする公達哉云々、主上自みづかみ小部御覽じて、行成は召仕ふべき者なりとて、被補藏人頭くらね于時備前介實方みかたをば、歌枕見てまゐれとて、被任陸奥守云々、於任國逝去云々、下略」文の中に、云々とあるは原文のまゝである。

西行が中將の墓に詣てた事は、山家集、雜の部に「みちの國にまかりたりしに、野中に常よりもとおぼしき塚のみえ侍りしを、人にとひ侍りしかば、中將とはたが事ぞと問ひ侍りしかば、實方の御事なりと申す。いとあはれにおぼゆ。さらぬだに物がなしく、霜がれのすゝきはのくと見えわたりて、後に語らんことばなき心地して

くちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞ見る。」新古今集にある文も歌もほど同じである。

鏡摺——封内風土記云、齋川邑、有市店而驛也、中略、名跡志曰、齋川驛南之阪、羊腸屈曲、維石巖々、嚙足毀蹄、人痛嶮艱、馬憂虺隤、土人因稱鏡摺石、下略」地名辭書に云ふ「明治九年東巡録云、越河驛發轆のち、中略、鏡摺の坂を經、齋川驛小憩、再び馬車に御す、下略」

一一一 武隈の松にこそ目覺むる心地はすれ

武隈たけくまの松にこそ目覺むる心地はすれ。根は土際つちぎはよ

【口譯】
武隈の松には驚歎させ

られる。松の根は土際から二本の樹に分れて、昔の姿のとほりだと思はれる。この松を詠んだ能因法師をまづ第一に思ひ出す。昔陸奥の守になつて下つた人が、此の木を伐つて名取川の橋杭に使はれた事であつたからであらうか「松はこのたび跡もなし」と能因は詠んでゐる。世々、或は伐つたり或は植繼いだりしたといふ事だが、今は又千年も立つた姿になつてゐて、立派な松の趣であつた。江戸

り二木にわかれて、昔の姿うしなはずとしらる。まづ能因法師思ひ出づ。往昔むつの守にて下りし人、此の木を伐りて名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此のたび跡もなしと詠みたり。代々あるは伐り、あるは植繼などせしと聞くに、今はた千歳のかたちと、のほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。

武隈の松見せ申せ遅さくら 舉白

と、舉白と云ふものの饌別したりければ、

櫻より松は二木を三月越

【語釋】

○武隈の松——岩沼の西方數丁の處にある。歌枕。陸奥千鳥（元祿九年）に云ふ「金ヶ瀬より岩沼へかゝり、橋の際左へ二丁入りて竹駒明神あり。社より乾の方へ一丁行きて武隈の松あり。松は二木にして、枝打垂れ、名木とは見えたり。西行の詠に松はふたたび跡もなしとあれば、幾度か植繼ぎたるなるべし、武隈の松誰殿の下す

を立つ時、

武隈の松見せ

申せ遅櫻 舉白

と、舉白といふ者が送別の句をくれたのが思ひ出されて、

櫻より松は二木

を三月越

すみ「備考参照。

○まづ能因法師思ひ出づ——後拾遺集、雜四、みちの國に再び下りて、後のたび武隈の松も侍らざりければよめる、能因法師、たけくまの松はこのたび跡もなし千歳をへてやわれは來つらむ。この歌を思ひ出したのである。歌意は、武隈の松を此度見ると跡かたも無い。千年までも生きると云はれるが松がなくなつたとすれば、もはや千年経過したわけである。してみれば自分も千年も立つてから來たのであらうか。

○名取川——源を二口嶺に發し、東流して名取郡に入り、仙臺市の南方を経て海に注ぐ。流程十二里。古來の歌枕。武隈の松を名取川の橋杭に使つたのであらうと云ふのは、奥儀抄に「其後、孝義伐りて橋につくりてのちたえにけり」とあるのに基づいて書いたものであらう。

○と、のほひて——と、のほふと云ふ詞は無い。と、のほりての思ひちがひであらう。○武隈の松の句——今は三月の末で、花も遅櫻であるから、奥州を旅する頃は己に花は無からう、名木である武隈の松でも是非芭蕉に見せ申せの意。遅櫻は季をあらはす。芭蕉の出發は三月廿七日である。この「遅櫻」の句法は「打ちよりにて花入探れ梅椿」（芭蕉）などの「梅椿」と同じである。

○舉白——姓は草壁。俳號は舉白。芭蕉の門人。江戸に住む。

○櫻よりの句——江戸の櫻を見てからこの武隈の二木の松を見るまで三箇月目になるの意。二木と三木（三月）とを並べて詞のあやをなしたのである。「櫻より」は舉白

の遅櫻を受けて云つたのである。此の句は、後拾遺集、雜四、則光朝臣のもとにみちの國に下りて武隈の松をよみ侍りける、橋季通「武隈の松は二本を都人いかがと問はばみきとこたへむ。」とあるに基づいて作つてゐる。みきは三木と見きと言ひかけたのである。詞の洒落に禍されて、よい句とは感ぜられない。

【備考】

武隈の松——奥儀抄卷四（詞花集の撰者、藤原清輔の著）に云ふ、

うゑし時ちきりやしけん武隈の松を再びあひ見つるかな

武隈の松はいづれの世よりありけるものとも知らぬ人は、うゑし時とよまれたればおぼつかなくもや思ふとて書きいでて侍るなり。此松は昔よりあるにはあらず。宮内卿藤原元善といひける人の任に、館の前たてに始めてうゑたる松なり。みちの國の館は武隈と云ふ所にあり。此の人再びかの國になりて、後のたびよめる歌なり。武隈のはなはの松ともよめり。重之の歌に云ふ、

武隈のはなはに立てる松だにも

わがごとひとりありとやは聞く

武隈のはなはとて、山のさし出でたる所のあるなりとぞ、近く見たる人は申し。此の松、野火に焼けにければ源満仲が任に、又植う。其後又失せたるを、橋道貞が任に植う。其後、孝義伐りて橋につくりてのち絶えにけり。うたてかりける人なり。さりともなほよむべし。」

右の、うゑし時の歌は、後撰集、雜、「みちの國の守にてまかり下れりける武隈の松の枯れて侍りけるを見て、小松を栽ふつかせて、任はて、後又同じ國にまかりて、かの前の任にうゑし松を見侍りて、藤原元善朝臣、うゑし時契りやしけん」云々とある。

はなはに就ては、奥羽觀蹟聞老志（享保四年）に云ふ、

鼻輪はなはのまつ松樹。

鼻輪はなはのまつ或 在館西、岩沼驛西五町餘、過小坂入其地、二樹相並枝葉繁茂。」

名取川——昔の歌を二三あぐれば、古今集、戀、讀人しらす、名取川瀬々の埋木あらはればいかにせむとかあひ見そめけむ。

古今集、戀、忠岑、陸奥にありといふなる名取川浮名とりては苦しかりけり。金葉集、戀、源重之、名取川梁瀬の浪にさわぐなり紅葉やいとごよりてせくらん。

二二二 名取川を渡りて仙臺に入る

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめふく日なり。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衛門と

【口譯】

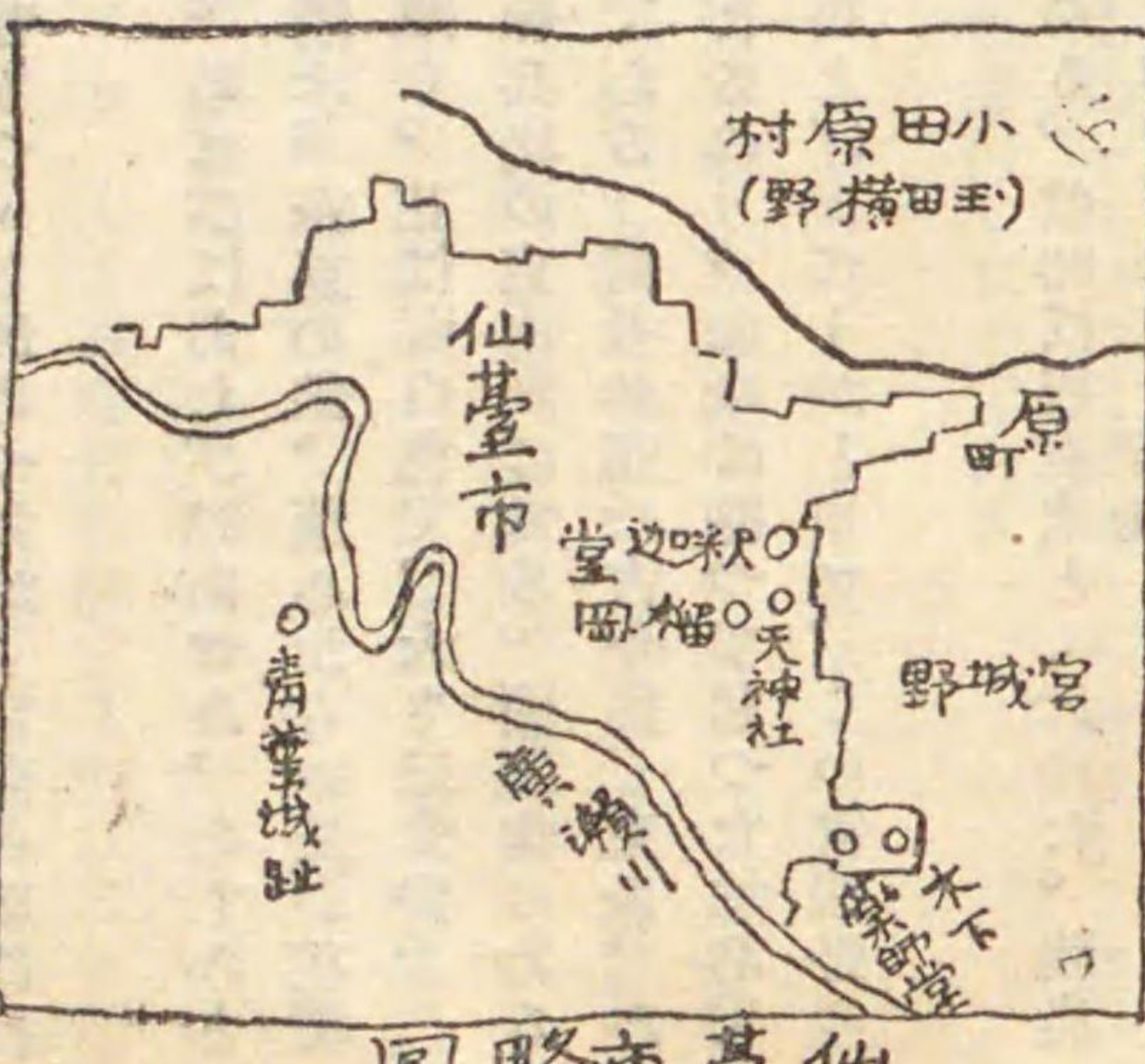
名取川を渡つて仙臺に入る。五月五日で、菖蒲を軒に葺く日だ。旅宿を求めて四五日滞在する。此地に畫かきの加右衛門といふ者がゐる。多少風流の心ある者と聞いて知合になる。此者は曖昧になつてゐる名所を多年しらべてゐるからと云つて、一々案内する。宮城野の萩は茂り合つて、秋の景色が今から想ひやられる。玉田、横野、榴ヶ岡は馬酔木の咲く頃である。日光

いふものあり。いさゝか心ある者と聞きて知人になる。この者年頃さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて、一々案内す。宮城野の萩しげりあひて、秋のけしき思ひやらるゝ。玉田横野、つゝじが岡はあせび咲く頃なり。日影ももらぬ松の林に入りて、爰を木の下といふとぞ。昔もかく露深ければこそみさぶらひみかさとはよみたれ。薬師堂、天神のみやしるなどがみて其日はくれぬ。猶松島、鹽がまの處々、畫に書きて贈る。且つ紺の染緒付けたる草鞋二足錢す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其實をあらはす。
あやめ草足に結ばんわらぢの緒

【語釋】
○仙臺——今の仙臺市。

も洩らぬ程茂つた松の林に入つて見ると、ここを木の下と云ふさうだ。昔もかく露が深いからこそ、古今集東歌にも「みさぶらひ御かさと申せ」とは詠んだのである。薬師堂、天神の社など参拜して其日は暮れた。猶畫工は松島、鹽釜の諸名所を畫に書いてくれた。且つ紺の染緒をつけた草鞋二足を別れのしるしにくれた。さてこそ風流三昧の人、爰に於て其の實際なる事を證據立てた。

- あやめふく日——五月五日。端午の節句。あやめは菖蒲のこと。軒に之を葺くは邪氣を拂ふためと云ふ。關山の本草啓蒙に云ふ「昔より菖蒲をあやめに當てたれど、漢名菖蒲といふものは今の俗にせきしやうといふものにて、あやめは漢名白菖に當れり。」
- 畫工加右衛門——「青蔭集」に「泊同人」とある。此家に一泊してゐる。加は嘉の誤。
- 心ある者——こゝは風流の心ある者の意。
- 知人——しるひとと訓む。
- 年頃——多年。
- さだかならぬ——分明でない。
- 名どころ——名所。
- 宮城野——仙臺市の東郊。今、一半は練兵場となり、一半は田圃となる。昔、萩の名所であつた。歌枕。千載集、秋上、堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる、源俊賴朝臣、さま／＼に心ぞとまる宮城野の花のいろいろ虫のこゑ／＼。その他夥しい。
- 玉田横野——玉田は小田原村にあつた地名。此村は今、仙臺市の東北郊、原町の大字として残つてゐる。横野は玉田の東にあつた野。備考参照。陸奥千鳥（元祿九年）にも「宮城野、玉田横野、いづれも城下より一里に近し」と云つてゐる。歌枕。源



あやめ草足に結ばん
わらぢの緒

【評】

饒別に紺の染緒のついた草鞋二足を贈つた畫工は虚禮を去つて眞實に就いた人といふべく、風流の至極である。之を理解して「さればこそ風流のしれもの」と歎賞する芭蕉は又眞に風流の仙である。さて仙臺は連句もありさうな所であるが、此地は其頃大淀三千風の併風凄じく、門弟も二三百人あつたやうだか

俊頼の家集たる散木歌集、春三月の條に「同百首中に春駒を、とりつなげたまよこのの放れ駒躑躅の岡にあせみさくなり。」あせみは馬酔木とも書き、馬之を食へば毒ありて酔へるが如くなるといふ。

○つゝ、じが岡——躑躅岡。山榴岡とも書く。仙臺市の東郊にある。今、躑躅岡公園といふ。今は躑躅はなくて櫻樹が多い。歌枕。昔赤つゝ、じがあつたが、芭蕉の頃は己に絶えてゐた。備考参照。

○あせび——俊頼の歌を思つて書いたのである。あせびはあしび、あせみ、あしみとも云ふ。稷木。馬酔木。石南科稷木屬の常緑灌木。春夏の候、葉心から細長い花梗を垂れ、總狀をなして、多くの垂下せる花を開く。花は黄白色で、大き三分許。

○木の下——宮城野の南方の叢林の邊を云ふ。練兵場の東南隅に當る。藥師堂のある邊。歌枕。芭蕉の頃も木の下露は深かつたのである。備考参照。古今集、東歌、みさふらひみ笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり。此歌に據つて起つた地名である。歌意は、お供の人よ、御主人へ御笠を差上げませうかと申せ、この宮城野の木立から滴る雫は雨にもまさつてゐるよ。

○藥師堂——「木の下」にある。今も現存してゐる。當時は善遊堂とも云つた。陸奥千鳥（元祿九年）に云ふ「山榴岡、釋迦堂、天神宮、木の下堂。藥師、宮城野、玉田横野、いづれも城下より一里に近し。」備考参照。

○天神のみやしろ——躑躅岡釋迦堂の南にある小丘にある。元祿二年を溯ること二十二年、寛文七年に藩主綱村が新造したものである。備考参照。

ら、其の機を得なかつたのであらう。（三千風の日本行脚文集参照。）

○風流のしれもの——しれものは癡者の、愚者の意。眞の風流人を裏から賞めたのである。

○あやめ草の句——端午の節句の事だから、家々の軒には菖蒲を葺いてゐるが、自分は旅の身であるから菖蒲を草鞋の緒にして足に結ばうよの意。菖蒲を軒に葺くは邪氣を拂ふためである。此句も、かの「夏山に足駄を拜む門出かな」と同じく、道中の息災を願ふ意がある。染緒の紺色から菖蒲を持出したのである。

【備考】

玉田横野——仙臺の學者佐久間洞巖著奥羽觀蹟聞老志（享保四年）に云ふ「玉田横野在二小俵村、東照神廟東北山間有二湖水、稱二玉田湖、自是以東山下稱二横野、而爲二兩地、下略」菅神廟の條に又云ふ「玉崎或作二玉手崎、又稱二玉田崎、古玉田」小俵村は今の小田原村である。封内風土記（明和四年）に云ふ、「玉田横野、萬壽寺以東至二躑躅岡、曰二之横野、玉田今不詳、何處、疑玉田泉其地乎、玉田清水、名跡志曰、萬壽寺中有二幽泉、曰二之玉田清水、今爲二塔頭三昧院地是也」躑躅岡は蜻蛉日記の長歌の中に「みちのくのつゝ、じの岡のくまつら、くる程をだに待たでやは云々」とあるから、古くから知られてゐる事がわかる。又玉田横野は顯昭法橋の散木集注（群書類從第二九〇卷）に「たまたよ、野、つゝ、じの岡、所の名也、陸奥國にあり」とあるので、古くから陸奥國にあるものと思はれてゐたらしい。然るに觀聞志に引く色葉集に「玉田横野とは所の名也、津の國の玉田といふ所に横野といふ野有りて、其野あせみ多かり、中略、或人曰、此歌は俊頼集にはつゝ、じの岡と有り、河内國に

ある岡なり、玉田横野も其國か」と云つてあるが、今河内國を檢索するに斯かる地名が無く、又その跡らしい處もない。歌枕の玉田は河内國で、之を陸奥國のつ、じの岡に附會したのであらうとの説あれど、信じ難い。

躑躅岡——奥州觀蹟開老志に云ふ「在南目村、有高岡、謂山榴岡、中略、風土記曰躑躅岡在府之西、(府乃多賀古府也)出紅躑躅、官以之摺衣、號都々玆摺、中略、矧又躑躅花亦絶而亡。」之に依れば躑躅の花は元祿、享保の頃已に絶えてゐたのである。又明治に至り歩兵第四聯隊が出來たため、昔の躑躅岡は狭小にされたといふ。

木の下——奥羽觀蹟開老志に云ふ「木下喬林、同村有平林、林中建白山權現、午頭天王神祠、善遊閣、古木老樹森森相圍、翠松青杉鬱鬱相交、中略、暮春盛夏、綠陰蒙密、林下墜露、依舊今亦如雨。」右の同村とあるは南目村のことで、即ち宮城野の地を云ふ。善遊閣は善遊堂ともいひ、即ち藥師堂である。

藥師堂——奥羽觀蹟開老志に云ふ「善遊堂在白山社西、未詳何人經始、内殿置藥師脇持菩薩及十二神將、相傳俱是運慶之作、但本尊乃閻浮檀金、故蔽帳秘而不發、中略、百十一代後光明帝慶安三年庚寅偶會東照宮經營之事、仍移其東林、至寛文七年丁未七月、少將綱宗君遷之榴岡而新造。」同所とあるのは榴岡。東照宮は慶安三年忠宗が城北に建てたもの。さて天神社は寛文七年の建設であるから元祿二

年を溯ること二十二年である。

年を溯ること二十二年である。

三三三 かの畫圖にまかせてたどりゆけば

かの畫圖にまかせてたどりゆけば、奥の細道の山際に十符の菅あり。今も年々十符の菅菰を調べて國守に獻すといへり。

壺碑 市川村多賀城に有り

つぼの石ぶみは高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔を穿ちて文字かすかなり。四維國界の數里を記す。此城神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年參議東海東山節度使鎮守府將軍惠美朝臣朝獨修造也。十二月朔日と有り。聖武皇帝の御時に當れり。昔よりよみおける歌枕多く語り傳ふといへど

【口譯】

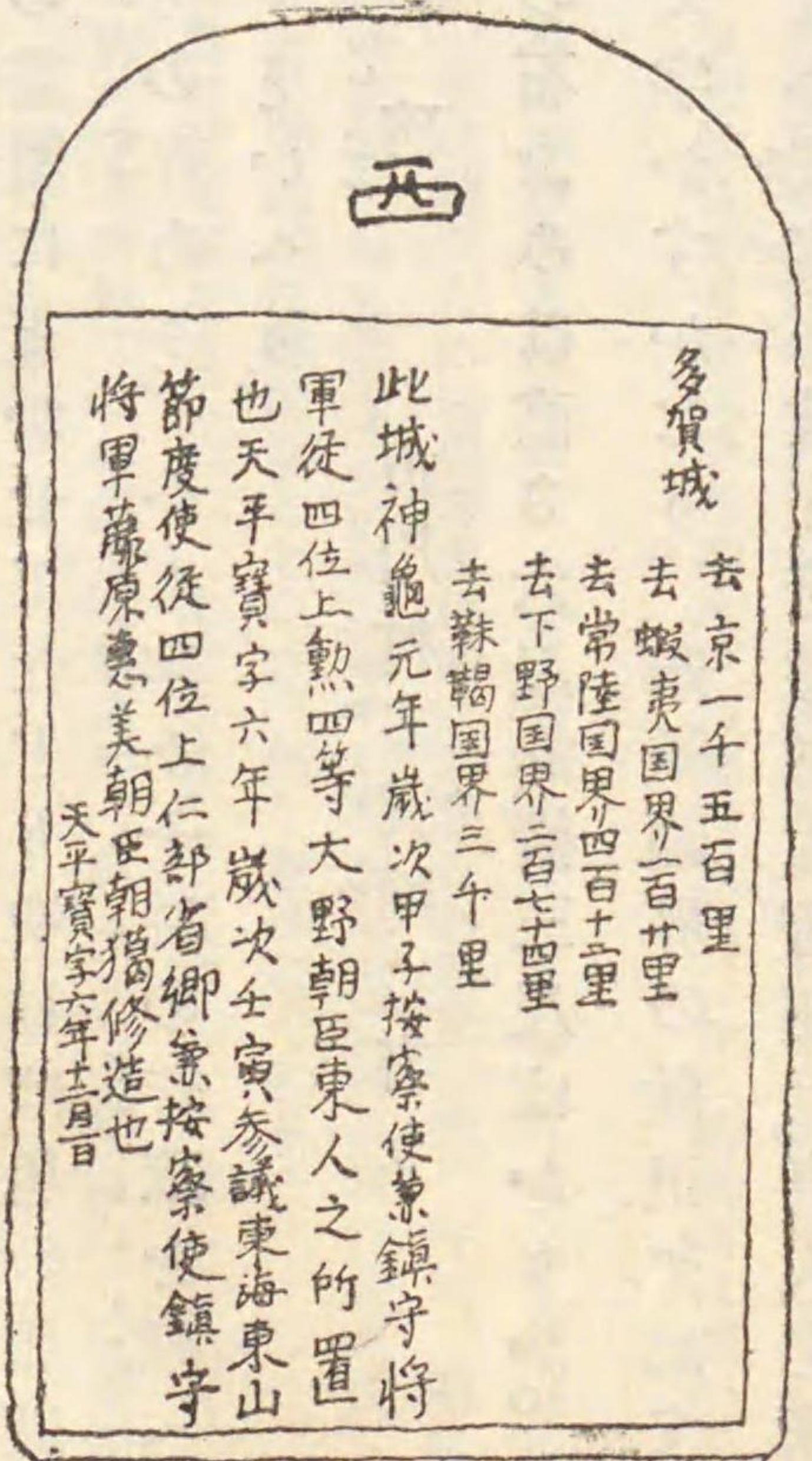
かの畫工の書いてくれた圖面をたよりに、たどつて行くと、奥の細道にかゝるのだが、一方の山の際に十符の菅がある。今でも毎年十符の菅むしろを調製して、藩主に獻納するさうである。

壺の碑 市川村多賀城にある。

壺の碑は高さは六尺餘、横は三尺ばかりもあらうか。苔の下に文

字がかすかに見える。四方の國境への里數を記してゐる。此城神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也天平寶字六年參議東海東山節度使鎮守府將軍惠美朝臣朝瀧修造也十二月朔日と有る。してみると、此の碑文に見える多賀城の建設は聖武天皇の御代に當つてゐる。昔から歌の名所は今日まで多く語り傳へてゐるけれども、或は山が崩れ川が無くなつて道がかはり、或は石は埋れて土中にかく

も、山崩れ川落ちて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時うつり代變じて其の跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳のか



多賀城碑

たみ、今眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪も落つるばかりなり。

【語釋】

れ、或は木は老朽ちて

若木にかはれば、年月うつり時代も變じて、その跡の不明な事ばかりであるのに、此の壺の碑に至つては疑なき千古の記念で、今眼前に古人の心を見ることが出來た。之れも旅の一得であり又生きながらへてゐる悦びだと思へば、旅の疲れをも忘れて嬉し涙が出る位である。

【評】

此の碑の眞偽については芭蕉時代にたれも疑

○書圖——土地、建物などを書いた圖。

○奥の細道——奥羽街道に對して、仙臺から鹽釜方面へ行く道を云ふ。大淀三千風（仙臺に住む）の「行脚文集」貞享四年の條に、「景題二十八」と題して仙臺地方の名所を擧げてゐる中に、玉田、横野、十府、末の松山などと共に奥の細道を入れてゐる。之に依つても貞享、元祿の頃も特定の道を稱してゐたことがわかる。備考參照。

○十符の菅——十符は地名で、歌枕。岩切村にある。陸奥千鳥（元祿九年）に云ふ「仙臺より今市村へかへり、冠川土橋を渡り、東光寺の脇を三丁行きて岩切新田といふ。村百姓の裏に十符の菅あり。又同所道端の田の脇にもあり。兩所ながら垣結びまはし、菅はかの百姓が守るとなん。刈る頃に刈られぬ菅や一構。」古歌をあぐれば、顯昭（王朝末鎌倉初の人）の袖中抄卷十四に載する歌「みちのくのとの菅こもななふには君をしながらみふにわれれん」此の歌は救撰集には見當らない。又「みちのくのとの」と續けた歌も救撰集には見當らない。とふとは十編の意。とふのすがこもは編目の十筋ある菅薦を云ふ。菅薦は菅で編んだ席を云ふ。薦は眞菰（かつみ）で編んだ席なれど、もとの名に従つて、菅の席をも、すがこもと云ふのである。なしては寢してで、寢かし申すといふ意。萬葉集、十九、鳴きとよめ、安い不令宿、君を惱ませ。又或場合には寢給ふの意もある。歌意は、廣い七編の席には君を寢させ、狭い三編の席にはわれ寢よう。人を思ふ歌である。さて「細道」や「陸奥千鳥」に云ふ十符の菅は古歌に云ふ十符か否かは頗る怪しい。名所には此の

ふ者はなかつた。且つ又その眞偽を考へる事は芭蕉の旅の目的ではない。彼れは唯あるがまゝの名所、傳へるままの舊跡に對して懐古の詩腸を絞り、感激の涙を拭ふことを以て満足したのだ。苦むせる碑面に天平などの文字を見出しては誰れしも驚き喜ぶのが人情でなくてはならぬ。

類が多い。なほ備考に詳説する。

○壺碑——多賀城の碑とも稱し、陸奥國宮城郡多賀城村大字市川にある。芭蕉の文には「市川村多賀城にあり」とあるから當時は村と字とが反對であつたと見える。仙臺から鹽釜に至る道筋で、道から約三丁入込んだ所にある。高さ六尺、横三尺、厚さ一尺五寸で、西向きに建つ。碑文によれば天平寶字六年に建てられてゐる。碑額に大字で西とあるから、多賀城の四方に在つたものうち、西面に建てられたもののみが今日残つたのであらうと云ふ。然し此碑は偽作のよし近世の學者に依つて唱へられた。備考参照。多賀城は神龜元年大野東（おほのあづま）人が築いて蝦夷に備へたもので、彼は功を以て陸奥鎮守府將軍兼按察使となつた。城跡は市川村東方の一丘陵であるさてかの碑を壺の碑といふのは誤で、實際の壺の碑は坂上田村麻呂が磐手郡七戸壺村に建てたもので、此地ではない。

○四維——四方。維は隅すみの義。委しくは、乾（西北）坤（西南）艮（東北）巽（東南）の四隅。管子「四維不張、國乃滅亡」

○數里——里數の誤記であらう。數里を里數の意に取るのは無理である。碑文参照。

○此城——多賀城を指す。之から碑の文であるが、原文と多少異なる。挿入の碑銘参照。

○神龜元年——皇紀一三八四年。聖武天皇の朝。

○按察使——あんさつしを訛つてあぜちとよむ。地方官の治績を巡察する官。養老三

將軍をして兼れしめた。平安朝に入つては大納言の兼官となり名のみとなつた。

○鎮守府將軍——鎮守府は陸奥國に於ける鎮營で、奥州の警備に當るもので、其長官を將軍と云ふ。所在地は始め多賀城であつたが、延暦二十一年鎮守將軍坂上田村麻呂が膽澤城（いづは）（陸中國膽澤郡佐倉川村）を造るに及び同城を以て鎮守府となした。

○大野朝臣東人——神龜年中藤原宇合（うまひ）に従ひ蝦夷を征し朝廷に建議して多賀城を築いた。又天平十一年太宰太貳藤原廣嗣の叛を平げた。天平十四年薨す。朝臣は姓の名。

○天平寶字六年——皇紀一四二二年。淳仁天皇の朝。

○參議——朝議に參與するの意。大臣、納言に次ぐ職。

○節度使——奈良朝時代に於て兵士官船等を檢察した臨時の職。

○惠美朝臣朝藹——惠美押勝（藤原仲磨）の子。天平寶字の初、陸奥守となり、次いで按察使となり、鎮守府將軍を兼ね、敕により陸奥に桃生城（ももしょう）を造り、出羽に雄勝城を造つた。特に從四位下に叙す。後、仁部卿となり、なほ按察使を兼ね、又東海道節度使となり、從四位上に至り、兵部卿となり、六年、參議に拜す。（續日本紀）

○歌枕——歌の名所。

○石は埋れて——忍摺の石なごを指す。

○木は老いて若木にかはれば——武隈の松なごを指す。

○闕す——けみすは檢すの轉じたもので、檢め見るのこと。

○一徳——一つの利益。

○驛旅——旅。己出。二十九頁参照。

○調へて——調製して。造つて。

○國守——仙臺藩主伊達侯を指す。國守は元來國司の長で徳川時代には無い職名なれど、國持の大名を國主大名と云ひ、略して、國主と云ひ、國守とも書いた。又、仙臺侯は政宗以來、陸奥守と稱する例になつてゐる所なごから、芭蕉は國守と書いたのであらう。

【備考】

奥の細道——「都のつと」(宗久紀行とも云ひ、觀應の頃即ち南北朝の頃、僧宗久の旅行記。群書類從卷三三二に收む。)を見るに、宮城野の次に云ふ、

さてみちの國たがの國府にもなりぬ。それよりおくのほそ道といふかたを南ざまに末の松山へたつれゆきて、松原ごしにはるくと見わたせば、げに涙越すやうなり。あまの釣舟ごもも、さながら木末をわたるかと思ゆ。

夕日さす末の松山霧晴れて秋風かよふ浪の上かな

その日、くるゝほごに、しほがまの浦につきぬ。

之に據れば、奥の細道とは多賀の國府から鹽釜へ行く道を云つてゐる。「それより奥の細道といふ方を南ざまに」とは「多賀の國府から奥の細道といふ方の道をとほり、南方に折れて末の松山を訪れた」意である。多賀の國府から鹽釜は東北に當るから南ざまにとあるのは、末の松山は道から南方にあると見なければならぬ。

「廻國雜記」(文明十八年、道與准後の旅行記。群書類從卷三三七に收む。)に云ふ、

かくて宮城野に至りぬ。一村雨し侍りければ、暫く木蔭に立ち寄りて、過ぐるをまち侍りける間に、

木の下に雨やどりせむ宮城野やみ笠と申す人しなれば

奥の細道、松本、もろをか、あかねま、西行がへりなごいふ所をうち過ぎて、松島に至りぬ。

之に據れば、奥の細道は岩切村の附近に當る。「もろをか」は即ち村岡で、今の利府である。奥の細道は岩切から松島へ向ふ道に於て、岩切に近いあたりを指してゐる。さて岩切の史を按ずるに、多賀の國府は平安末に至つては國司は赴任せず、留守にて國政を執つた。即ち鎌倉の初、伊達家景が留守所に任じ、別に岩切村の高森館に居り、子孫世襲して留守氏を稱した。其後多賀國府は建武中一時恢復されたが足利時代に至り廢滅してゐる。即ち岩切は國司の留守役の居た所である。

奥羽觀蹟聞老志(享保四年)に云ふ、

東奥細道、自レ古封内稱東奥通行者、或有ニ口碑傳者、或有ニ書中記者、於ニ名取、則在ニ笠島邊、於ニ宮城、則在ニ木下西、其道路有ニ與レ今相會者、有ニ與レ昔異者、此地亦其地不ニ分明ニ焉、或説曰、岩切橋北東光寺前道路是也、其下碧潭曰ニ霧谷潭也、考ニ宗久紀、則與今所ニ通行者ニ相同。

名取郡に於ては笠島の邊に在ると云つてゐる。又、木下は宮城野の南方である。木下の條参照。笠島は岩沼町の西北二里にあつて實方中將の墓で有名な處で、有名な道祖神社があり、岩沼から出羽の最上(山形の古名)へ出る道に當つてゐる。され

は口碑などに此邊の道を奥の細道と云ひ傳へたと思はれる。さて岩沼は古昔多賀城の築かれないうちに陸奥の國府であつたのである。そしてこゝから出羽方面へ行く道があつた。

さて併諧一葉集、遺語の部に

奥の細道降りつゞきて、泥にとりつく杖を力に、會其は疲れて行くべくもあらず、我は笠島を見んといふ、同行も亦腹あしきことあり。

とあるのは、芭蕉が本文に

此頃の五月雨に道いとあしく、身疲れ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに
と云つてゐる如く、笠島へは行かなかつたのであるから、右の奥の細道は本街道を指してゐると思はれるが、右の遺語は芭蕉の談話をあやなしたとも見られるので、詞づかひは確證とはなし難く、又現に鹽釜の邊では「奥の細道の山際に十符の菅あり」と云つて、廻國雜記のと同じく、明らかに特定の道を指しゐるから、奥羽街道などを漫然と奥の細道とは云はぬ筈である。

以上の事實に依つて按ずるに、奥の細道と稱する道は大抵國府の附近にあるのである。且つ其の道は主たる街道に對して傍系の道を指したやうである。

細道とは、決して本街道に對していふ詞ではない。即ち「都のつと」に多賀の國府から鹽釜へ行く道を奥の細道と云つたのは多賀の國府から平泉方面への街道に對して云つたものらしく、元祿時代は、轉じて藩主の所在地仙臺から鹽釜への道に名残を止めたものと思はれ、廻國雜記に、岩切から松島への道を云つたのは、岩切に國

府の留守所であつた時代に斯く呼ばれたものであるべく、又更に時代を溯れば、多賀國府と瞻澤鎮守府間の官道は岩切附近を通過したと思はれるから、此官道に對して岩切邊から松島へ行く道を斯く呼んだとも見るべく、廻國雜記に特に岩切附近を指してゐるのは昔の名残であらう。若し觀開志の記事を信するならば、笠島邊の道は岩沼即ち上古國府の所在地を貫く南北の街道に對して出羽へ出る道に對して呼ばれた名残であらう。さて又奥の細道の奥といふ語は其の土地の人が云ふ詞ではない。之は中央から指して云ふので、帝都から赴任した官人などが道の奥といひ、そして南北を貫く官道に對して、東奥又は西奥へたゞる小徑を奥の細道と稱したのであらう。二十一代集などにも、奥州街道を奥の細道と云つた例はない。「色葉集」に「思ひ忍ぶの奥の細道」の歌を擧げてゐるのは、續後撰和歌集、雜上、前大納言忠良「あとなえぬたれにとはましみちのくの思ひ忍ぶのおくのかよひ路」の誤である。

翻つて芭蕉の「奥の細道」の題號を考ふるに、勿論「奥の細道の山際に十符の菅あり」と書いてゐるのにも依らうが、奥州街道を或は右に折れて名所を探り、或は左にたゞつて舊蹟を訪れた所から、名づけたのであらう。

十符の菅——奥羽觀蹟聞老志（享保四年）にいふ「十符池、符或作レ府、在レ岩切邑中、多賀國府館趾南、農家後、有レ小池、池中有レ垂柳、下菅草頗多、或曰、如今稱レ利符者、乃古之十符地也、利與レ十訓相通、以レ上州利根川、而訓レ之登瀛川者、其證也、後人誤レ其訓、而讀爲レ便利之利、不知利レ其益レ之利焉、利符十符爲レ兩區、按、此說聊有レ據、而未レ得レ其考案、今舉レ古書論レ之、據レ郡名之說、則非レ郡名者

固也、然利府近村有菅生邑、想夫往古、以此地生好菅、而得地名乎。」
地名辭書に云ふ「古歌に十符浦とよみ、野田の菅ともよみたれば、野田の入江の地と考へらるるなり」又云ふ「野田の菅は十符の菅に同じ。今、岩切に十符池を説くは誤れり

稀にだにとふの浦風音づれば野田の松かれかたしきやせむ(弘安百首) 長明
みちのくの野田の菅にもかたしきかりねさびしきとふの浦風(夫木) 長明

思ふに、古歌には机上で漫然と名所を想像して詠んだのが多いから、古歌を證として説くのは早計であるが、然し、岩切の小さい池は勿論信するに足らない。元來とふは十編の意で地名でなく、古昔奥州から十編の菅むしろを産したので、歌にも詠み入れたものと思ふ。而して其の地は今の岩切から野田にかけて産したものであらう。さればこそ野田の菅とも詠み、又觀聞志に云ふ如く、菅生の村が利府の近傍にあり、又利府は元來利府なるを後世訓み誤つたといふ説も参考になる。利府は岩切の北方にある。袖中抄卷十四に、とふのすがこもに就いて、「此のひろきこもの奥州にあるなめり」と云つて地名ともしないのは穩當な推量である。

さて前に擧げた袖中抄の歌は、「君をなして」が「君をねさせて」になつてゐる。之は袖中抄に「これは人を思ふ心にて、七ふには君をねさせ、三ふにはわれねんといへるなり」とあるので、之によつて誤り傳へたのであらう。主計寮式、上「菅薦二枚、長一丈二尺廣四尺」以てその廣狹を知るべきである。

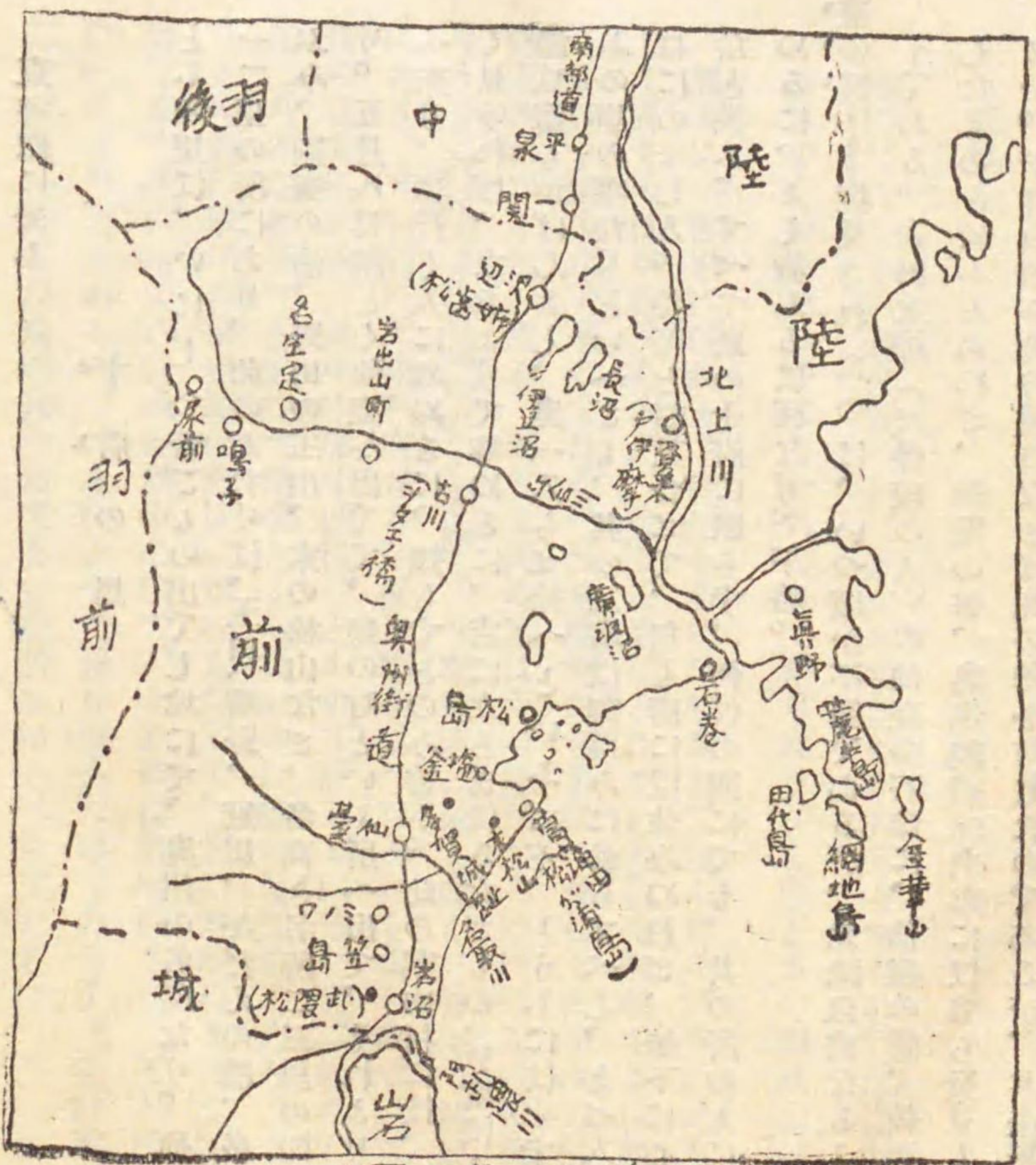
東遊記に云ふ

十府の里

とふの里は、いにしへ菅ごもの出でし地にて、奥州の名所なり。仙臺の北東の方一二里の所にあり。此のあたりは、玉田、横野、冠川、をだえの橋、多賀城、壺の石ぶみ、鹽釜の浦、野田の玉川、末の松山など、名高き名所二三里の間に集りつぎへり。五月八日朝とく仙臺を出でて、原の町といふ所へ出て、それより案内といふ所へ來り、道行く人に尋ねるに、知らずとのみ答ふ。此の案内村には、酒食の店も多く見ゆれば、立ちよりに尋ねるに、店に立ちまはる女ごもの、豆腐はこなたにあり、湯豆腐もかげんよし、奥へ入らせ給へといふにぞ、とうふには非ず、尋ねるはとふの里の事なりといへども、其の豆腐は御望みに參らすべし、まづ入らせ給へと口にのゝしる。養軒と顔見合せて、扱も所には住みぬれど、無下に心なき賤の女かなと笑ふ。すべて此の十府に限らず、何れの國にても、其の所の人に名所古跡を尋ねるに、よく教ふるは稀なり。下略。

壺の碑——發見されたのは、いつ頃か不明であるが、元祿以前なることは確かのやうである。吉田友好(天保頃の人)の仙臺金石誌に、仙臺の儒、佐久間洞嚴の發見したものと云ふとあれど、洞嚴の著、奥羽觀蹟聞老志には自ら發見したと書いてゐない。新井白石や狩谷掖齋などは此の碑を信じたのであるが、其後疑を抱く者があつて栗田信充は仙臺藩主伊達綱村の造設だと云ひ、佐藤鶴城も偽物なる事を斷じ、田中義成博士は史學雜誌第十五號に於て、洞嚴の偽造で綱村も之に關係してゐるら

しいと述べ、之に對して大槻文彦博士は洞殿の人物の上などから其の偽作ではないことを駁してゐる。(復軒雜纂) 此の碑の事の始めて見えたのは陸奥殘篇風土記なれ



陸前國略圖

ご、之は元祿以後の偽撰と云はれ、又文祿清談といふ書に永祿年間の發見とあれど、此の條は後世の挿入であるといふ。白石は萬治寛文の頃と云つてゐる。とにかく碑文の事實と歴史と多少の異同があるので、信じ難いものである。

碑文の中のその他の語——靺鞨國は滿州女真民族の總稱。此の國はわが和銅五年に己に勃海國と名を改めてゐるから、碑文の記事は合はれない。仁部省卿は民部省を一時改稱したもの。天平寶字二年八月惠美押勝(朝彥の父)が官號を改稱した時の名であるが、同八年九月押勝が誅に伏するに及び、また舊稱に復した。

二四 それより野田の玉川沖の石を尋ぬ

それより野田の玉川沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて末松山と云ふ。松の間々みな墓原にて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終は斯くの如きと、悲しさもまさりて、鹽がまの浦に入相の鐘を聞く。さみだれの空いさゝか晴れて、夕月夜かすかに、まがきが島も程近し。あまの小舟こぎつれて、さかなわかつ聲々

【口譯】
それから野田の玉川や沖の石を見物した。末の松山は寺が建てられて、末松山寶國寺と云つてゐる。松林の間は墓地で、比翼連理などと云つて夫婦の契をかはしても、終には斯く

の如く墓と化すると思ふと、悲しさもまさつて、それから鹽釜の浦に着くと、ちやうど夕方、諸行無常の鐘の聲を聞いた。五月雨の空は少し晴れて、夕月がかすかに照らし、籬が島も近くに見える。海岸には漁船が連なり獲物の魚を分配する聲を聞くと、「陸の奥のいづくはあれど塩釜の浦こぐ舟の綱手かなしも」といふ古歌の意味も知られて、甚だ身にしみる。其の夜盲目の僧が琵琶を鳴らして奥

に、つなでかなしもとよみけん心も知られて、いとゞあはれなり。其の夜盲目法師の琵琶をならして奥淨瑠璃といふものを語る。平家にもあらず、舞にもあらず。ひなびたる調子うちあげて、枕近うかしがましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。

【語釋】

○野田の玉川——鹽竈の南五丁、多賀城村の田圃にある細流。王朝時代は此の玉川の附近は海の入江であつたといふ。日本六玉川の一で、歌枕である。最も有名なる歌は、新古今集、冬、みちの國へまかりける時よみ侍りける、能因法師、夕されば汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり。備考参照。
○沖の石——陸奥千鳥（元祿九年）に云ふ「、より八幡村へ一里餘細道を分け入る。八幡村百姓の裏に奥の井あり。三間四方の岩、まはりは池なり。所の者は沖の石といふ。これより末の松山。向ふに海原見ゆ。」とあるは壺碑のある所を云ふ。沖の石は千載集、戀二、寄石戀といへる心を、二條院讀岐、わが戀は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らぬ乾くまもなし。」に依つて附會されたもので、歌の沖の石は特に

淨瑠璃と云ふものを語るのを聞いた。その語り口は古風ではあるが、それかと云つて、平家琵琶ともちがひ、舞々ともちがふ。田舎びた調子を張りあげて枕近く語るので、やかましいけれど、さすがに田舎に傳はる昔からの語り口を存してゐるので、面白く感じた。

定まつた石を云ふのではない。
○末の松山——多賀城村字八幡、寶國寺の後方にある丘陵。今海岸を去ること一里餘。丘上には數十株の松樹があつて、海波を望む。古來歌枕である。最も有名な歌は、古今集、東歌、君をおきてあだし心を吾がもたば末の松山浪もこえなん。（歌意は、君を捨て、浮氣な心を若しもわたしがもつたら、末の松山を浪が越すであらう、そんな事は絶対にない。）之を本歌に取つたのは後撰集、戀、心かはりける女に人にはりて、清原元輔、契りきなかたみに袖をしぼりつ、末の松山浪こさじとは。（歌意は互に別れの袖の涙を絞りながら、心かはりはすまいと契つたのに、そなたは變つてしまつた。）今一つ名歌を擧ぐれば新古今、春、藤原家隆、霞立つ末の松山ほの／＼と浪にはなる、横雲の空。末に就ては、坤元儀に「末の松山、中の松山、本の松山とて三重にあり」と見え、岩切を本の松山、八幡を末の松山となし、中の松山は今其舊地不詳といふ。

○末松山——末松山寶國寺といふ。

【評】
名所舊跡などを漁つて行くのに、考證めいた筆は少しも費さないで、軽く叙べてゆく所

○はれをかはし枝をつらぬる契——比翼連理の契。男女の堅い約束をいふ。比翼は翼を比べる意で、比翼の鳥の略。此の鳥は支那にて想像上の鳥で、雌雄各一目一翼で、常に相並んで飛ぶ。連理は木理を連れる意で、連理の枝をいふ。之は一の木の枝と他の木の枝と相連つて木理の相通するものをいふ。爾雅「南方有比翼鳥焉、不比不飛。注に似鳥翼青赤色、一目一翼相得乃飛」藝文「桃槐二枝、連理而生、二幹一心、以蕃根本」白樂天の長恨歌に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝。」

に却つて妙味がある。奥淨瑠璃なども簡潔な筆の中にその特徴を掘んでゐる。「終は斯くの如き」と書いて「鹽釜の浦に入相の鐘を聞く」と受けたのなども輕妙である。

- 斯くの如き——「斯くの如し」とあるべきところ。墓原を指していふ。
- 鹽がま——今の鹽釜町。松島灣の南端に臨み、海邊一帯千賀の浦の稱がある。
- 入相の鐘を聞く——入相は夕方。爰は夕方鹽釜の浦に着いた事を云ふのであるが、「終は斯くの如き」の語に對して、諸行無常の鐘を讀者に想はせたのである。
- 夕月夜——ゆふづきよとも、ゆふづくよとも云ふ。爰は夕方の月即ち夕月を云ふ。古今集「夕月夜さすや問べの云々」源氏物語、篝火「五六日の夕月夜はとく入りて」又夕方に近い頃をも云ふ事がある。
- まがきが島——籬が嶋。鹽釜の海上十餘丁の處にある島。歌枕の一で、古今集、東歌、わがせこを都にやりて鹽がまのまがきの島のまつぞこひしき。其他がある。
- あま——漁夫。
- つなでかなしも——古今集、東歌、みちのくはいづくはあれど鹽がまの浦こぐ舟の綱手がなし。の歌を指す。綱手は綱手繩に同じく、舟を曳く綱。かなしもは身にしみておもしろいよの意。もは感歎の助詞。歌意は、陸奥はごこも面白いが、就中この鹽釜の浦を舟を曳いてゆく綱手の光景はたいへんおもしろい。
- 心——文の意味。
- いとど——「いといと」の重なり約つたもの。いよ／＼。
- あはれなり——身にしみて感が深い。あはれに對し、哀の字をいつも當てるのは穩かでない。
- 奥淨瑠璃——淨瑠璃の一種。奥州で語られる淨瑠璃。仙臺の座頭が語つたから、仙

- 臺淨瑠璃とも云ふ。昔は三味線は無く、扇で拍子を取つた。然るにこゝに「琵琶をならして」とあるから琵琶を以ても語つたと見える。又東遊記を見るに徳川の末には三線にも合はせたりしい。備考参照。
- 平家——平家琵琶の略。平家物語を琵琶に合せて語るもの。奥瑠璃は扇拍子であつたのを、慶長の頃、澤角檢校が、平家に琵琶を合はせるのに倣つて、三線を以て伴奏する事を始めたのである。
- 舞——幸若舞のこと。まひ／＼とも云ふ。扇拍子で、謡曲の音聲に似、それよりも素朴なもの。足利時代に起つたもので、江戸時代に入つても宴席などに用ゐられたが、元祿の頃は謡曲に壓倒されて衰微した。「平家にもあらず、舞にもあらず」と云ふのは、同じく平家や幸若に似て古風ではあるが、其等ともちがふと云ふのである。
- 邊土——都から遠い處。邊鄙。邊土の遺風とは、邊鄙な地に昔から傳へられて來た語り具合の意。
- ものから——こゝは、ものであるの意。ものからは元來、ものではあるがの意。
- 殊勝に——特にすぐれて。めでたく。

【備考】

野田の玉川——奥羽觀蹟聞老志(享保四年)に云ふ「野田玉川在鹽釜村以南、往昔有河流、潮汐亦來往、石瀨所浮光躍、深潭地清影沈、皆爲月得嘉名、如今爲廢地、而唯遺野田之溝渠耳。」

六玉川は、山城の井手の玉川、攝津の玉川、紀伊の玉川、近江の野路の玉川、武藏の調布の玉川（多摩川のこと）、陸前の野田の玉川を云ふ。それ／＼有名な古歌がある。

二五 早朝鹽がまの明神に詣つ

【口譯】
早朝鹽釜の明神に參詣した。藩祖伊達政宗公が再興されて、宮柱いかめしく立て、彩色した垂木はきら／＼と輝き、石階は何十段と重なり、朝日が朱塗の玉垣に光つてゐる。こんな邊鄙な處に至るまで神の靈驗のいやちこでましますのはわが國のならばしだと思ふと、

早朝鹽釜の明神に詣つ。國守再興せられて宮柱、ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九俣に重り、朝日あけの玉垣をかゞやかす。かゝる道の果、塵土のさかひまで、神靈あらたにましますこそわが國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俵、今日の前に浮びてそゞろにめづらし。かれは勇義忠孝の士なり。佳名今に至つて慕はずといふことなし。誠
に人能く道をつとめ義を守るべし、名もまたこれにし

甚だ尊く感ぜられる。神前に古い燈籠がある。鐵の扉の表に「文治三年和泉三郎寄進」とある。五百年も昔の有様が今日の前に浮んで何となく珍しい。和泉三郎忠衡は父秀衡の遺言を守り、主義經の難に殉じた人であるから、正義に勇み、主には忠、親には孝の人である。その名聲は今に至つてもなほ何人も敬慕しない者はない。「誠
に人能く道をつとめ義を守るべし、名もまたこれに従ふ」と云つて

たがふといへり。日既に午に近し。舟をかりて松島に渡る。其の間二里餘、雄島の磯に着く。

- 鹽釜の明神——今の鹽竈神社。鹽釜町一森山にある。祭神三座、別宮は鹽土老翁神、左宮は武甕槌神、右宮は經津主神を祀る。古來鹽釜大明神といふ。後世當國の一宮と稱し、社殿の壯麗、風光の佳絶、東奥第一と云はれる。
- 國守再興せられて——國守は仙臺藩主伊達政宗。慶長十二年修造した。其創設は古
いけれども其の年代に就いては確證がない。備考参照。
- 宮柱ふとしく——社の柱をいかめしく立て、ふとしくは動詞であるから、正しくは、ふとしきと書くべきである。
- 彩椽——色ざりたる椽。
- きらびやかに——きら／＼と輝いて美しいこと。
- 九俣に重り——極めて高く重なつてゐる有様。俣は七尺。九俣は六十三尺に當れど、爰は單に高いことを云ふ。俣は異説がある。釋文「俣七尺也」小爾雅「四尺曰俣」漢書、應劭註「五尺六寸曰俣」
- あけ——朱。
- 玉垣——神社のまはりの垣。玉は美稱の接頭語。
- 道の果——陸の極端。都から極めて遠い處。陸の奥といふ名も此の意である。
- 塵土のさかひ——こゝは、世界の果て、國の果ての意。邊土塵土は己出。

ある。もはや正午に近い。舟を雇つて松島に渡つた。海上二里餘で雄島の磯に着いた。

【評】

神社の描寫が簡潔で鮮やかである。又忠孝の士を讚美する所、彼れは單なる自然詩人ではない。「人間としての芭蕉」の偉大な人格が閃いてゐる。解題の二參照。

○あらた——あらたかに同じ。神佛の靈驗の著しいこと。

○寶燈——正しくは、奉燈と書くべきで、奉燈は神佛に奉る燈火。寶燈は佛前の燈火をいふ。寶は美稱である。備考參照。

○かれの戸びら——鐵の扉。南蠻鐵だと云ふ。備考參照。

○文治三年——皇紀一八四五年。後鳥羽天皇の御代。其の前々年は平家亡びて源頼朝が政權を握つた年である。

○和泉三郎——「和泉三郎忠衡敬白」の文字がある。備考參照。和泉三郎は藤原忠衡。秀衡の三男である。忠衡は父秀衡の遺命を守り源義經に忠實に仕へた。然るに兄泰衡が頼朝に迫られ、義經を殺した後、忠衡は義經に通じてゐたといふので、泰衡は忠衡を殺したのである。然るに、多くの史に、義經を攻める時、忠衡は之に同意しなかつたので殺した如く書いてゐるのは誤である。吾妻鏡に據れば、義經が殺されたのは文治五年閏四月卅日で、忠衡が殺されたのは同年六月廿六日である。備考參照。

○五百年來の佛——正しくは、五百年前の佛と云ふべき所。文治三年は元祿二年から五百年前である。

○寄進——奉納に同じ。神佛に献ること。

○そゞろに——何となく。

○佳名——よい名。芳名。名聲。

○誠に人能く道をつとめ——武經七書「三略」の「下略」に「致節義之士、修其道、然後

士可致、而名可保」に基づくか。菅菰抄に「七書の六韜に勵道可操、義名亦從之といへり」と云へれど、かゝる語は六韜には無い。又、六韜以外の他の六書を檢するに斯かる語句は無い。

○雄島の磯——雄島は小島又は御島とも書く。瑞岩寺の西南に在る島。陸岸から、橋を架す。此の橋を渡月橋と云ふ。

【備考】

國守再興せられて——奥羽觀蹟聞老誌（享保四年）に云ふ「鹽竈神社去多賀城地十八町餘、在鹽竈村、未詳何代祀之、慶長十二年丁未前太守黃門政宗卿令内馬場日向監物紀州良匠鶴右衛門修造之、是歲六月廿日落成焉、但以貴船社而祀本社東、元祿六年癸酉、後大守中將綱村朝臣遷糺宮于城古内邑、爲別社、自是新興經營之事」

寶燈——橋南谿の東遊記（天明四——六）鹽釜の條に云ふ、「此社の門を入りて、左の方に鐵の燈籠あり。網の蓋ありて、其上に九輪の如きものあり。塔に似たり。臺も鐵にて作れり。此臺と火袋の所、鐵にて、眞の古物と見ゆ。蓋より以上は新物なり。扱、火袋の前面の上に鑄附けたる和泉三郎忠衡敬白の文字あり。秀衡鎮守府將軍たりし時、其子の三郎寄附せしと見えたり。其時の佛見えて、むかし忍ばしくおもはる。此燈籠の前に、杉板に書付けたる假名文章、此燈籠の事をしるせるを懸けたり。召具せし養軒讀みて、扱もよき文章なり、東北國にて此頃見及ばざる事なりと

いひて、大いに感ず。いかなる事をか書けると讀みて見るに、芭蕉翁の奥の細道といへる書に出でたる、此燈籠の事書ける文章なり。養軒は和文の事も知らず。俳諧の道はさらなり。芭蕉といへる名をだに覚えぬ程の者なるに、よきものは誰が目にもよきと見ゆ。」火袋は燈籠の火を點する所を云ふ。

和泉三郎——吾妻鏡文治五年閏四月の條に云ふ「廿日、己未、今日、於陸奥國、泰衡襲源與州、是且任勅定、且依二品仰也、豫州在民部少輔基成朝臣衣河館、泰衡從兵數百騎、馳至其所合戰、與州家人等雖相防、悉以敗潰、與州入持佛堂、先害妻、廿二歳、子、女子四歳、次自殺云々

前伊豫守從五位下源朝臣義經、改善行又義顯二年三十一、

又、同年六月の條に云ふ「廿六日、甲寅、奥州有兵革、泰衡誅弟泉三郎忠衡、年廿三、是同意與州之間、依有宣下旨也云々」奥州は即ち伊豫守義經のこと、二品は頼朝のことである。

二六 抑ことふりにたれど松島は扶桑第一の好風にして

抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、

凡そ洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて江の三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡くして、歛つものは天を指さし、伏すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ右につらなる。負へるあり、抱けるあり。兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、技葉沙風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるが如し。其の氣色宵然として美人の顔をよそふ。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞をつくさん。

【語釋】

○ことふりにたれど——陳腐な詞なれど。

【口譯】

さて言ひ古るした詞だが、松島は日本第一の好風景で、支那の洞庭湖や西湖にも劣らない。東南から灣入して、灣内約三里あり、浙江のやうな美しい潮を湛へてゐる。島々のすべては、或は歛つものは天を指し、伏すものは波の上に匍ふ有様だ。或は二段に重つたり、或は三段に疊み重なつて、左方では離れてゐるものあり、右方では連つてゐるものもある。子を負つた形のもあ

り、抱いてゐる姿もある。恰も兒や孫を愛育してゐる有様だ。そのやうすは奥ゆかしく、山の神である大山おほやま祇神つちみのかみのなされた業わざでもあらうか。造物者の美妙な技巧に對しては、誰れか之を繪にし、歌にする事ができようぞ。

【評】

松島を見て始めて委しい描寫を試みてゐる。「三里に灸すうるより松島の月まづ心にか、

○松島——こゝは松島灣の全景をいふ。灣は仙臺灣の一支灣で、無數の群島が散在し、眺望の美、日本三景中の第一と稱せられる。其の島嶼は海水の浸蝕に依つて生じたものであるから、其の形状は千態萬狀で、奇觀を呈してゐる。全景を一眸の中に收めうべき所は、富山、扇溪、多門山、大鷹森の四大觀で、近時新富山を加へて五大觀といふ。松島の町は灣の中央沿岸にある。

○扶桑——日本。扶桑はもと支那に於て日本を指した稱である。南史、夷過、「扶桑國在中國之東、其土多扶桑木。」扶桑木は日の出る國にあるといふ神木。東方朔の十洲三島記「扶桑在碧海之中、地多林木、葉皆如桑、又有樅子、樹長者數千丈、經三千圍、樹兩々同根偶生、更相依倚、是名扶桑。」

○好風——好風景。

○洞庭——洞庭湖。支那湖南省の北部にある。風光明媚を以て名高い。周回約百二十里。

○西湖——支那浙江省杭州府の西にある。之も眺望を以て有名である。周回約一里。

○江——灣を指す。

○浙江——錢塘江とも稱し、杭州府の南を過ぎ錢塘灣に注ぐ。こゝは此の灣口の潮を指す。潮の干満の差甚だしく、奇觀を呈すると云ふ。

○數を盡くして——全部。

○こまやかに——色濃く。

○ためたる——矯めたる。枉げたるに同じ。

○氣色——やうす。姿。

○宵然——深遠の貌。莊子、逍遙遊「宵然喪天下焉」

○ちはやぶる——神の枕詞。

○神のむかし——神代。

○大山つみ——原文に大山おほやますみとある。つみが正しい。濁つてよむため、かなづかひを誤つたのである。大山津見神おほやまつみのみ（大山積神、大山祇神）は山を司る神。伊弉諾いざなぎ、伊弉册いざなひ二神の子で、木花開耶姫このはなひらくやひめの父である。

○造化——こゝは造化の神の事で、天地萬物を創造せる神。造物者。

○天工——造化のはたらき。自然のはたらき。天功とも書く。

【備考】

松島賦について——芭蕉の「松島賦」を風俗文選に載すれど、夏目成美が「風俗文選に載たる松島の賦、こゝる見におくのはそみちの文章と参考するに、ばせをの書る處を前後に錯綜して、しひて賦の體につゞりあらためたりと見ゆ。許六さしもの英才にて、しかもばせをの書るまゝながら、前後に引ながへてつゞりぬる故、語脈のつゞかざる所あり。學者よくこゝるを付て考ふべし。」（隨齋諧話）と云つてゐる如く、許六が細道の文を前後補綴して偽作したもので、本文と比較すれば直ちにわかる。

りて」と旅の始に云つてゐる如く、途中の難儀を忍んできたのも、この松島へのあこがれが半ばさせるのであつた。芭蕉は此の松島に遊んで句をも吟じたやうだが、此の細道には一句も載せてゐない。備考に載せた俳句を見るに、よい句は無いやうに思ふ。芭蕉自身も氣に入つた句が出来なかつたので省いたのであらう。松島と並び稱せらるゝ象瀉に於ては「象瀉や雨に西施が合歡の花」の名句を吐い

二七 雄島が磯は地つゞきて

てゐる。然し松島は句は無くても、文に於て象潟の描寫に勝る所があり、象潟は句は有つても、文に於て松島の描寫より劣る所がある。「土芳云ふ、翁曰く、絶景にむかふ時は心氣を奪はれて叶はざるものなり。物を見て取所を心に留めて、消えざるうちに書寫して靜かに句をすべし、奪はれぬ心得もあることなり。其思ふ所しきりにして猶叶はざる時は書寫すなり。あぐむべからずとなり。翁松島に

雄島が磯は地つゞきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木かげに世をいとふ人もまれく見え侍りて、落穂松笠などうちけぶりたる草の庵に閑しづかに住みなしいかなる人とは知られずながら先づなつかしく立ちよるほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿をもとむれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅ねするこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良
予は口を閉ぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり。厚安適松がうら島の和歌をおくらす。袋を解きてこよひの友とす。且つ杉風濁子が發句有り。

て句なし、大切のことなり」(一葉集)

【口譯】——二七——

雄島が磯は地つゞきてのまゝ、海に出でる島である。雲居禪師の別室の跡や坐禪石などがある。又、松の木蔭に墨染の人もあちこちに見えて、落葉や松笠などを焚く草庵に靜かに住まひ、どういふ人かわからないが、まづ第一になつかしくなつて立ち寄つてゐると、月は海に映つて、晝の光景とは又ちがふ。海岸に

【語釋】

- 雄島が磯——已出。一二九頁參照。
- 雲居禪師——瑞巖寺中興の僧である。名は希賢。京都妙心寺の僧。萬治二年寂。年七十八。封内風土記によれば、寛永十三年藩主伊達忠宗、父政宗の遺命により雲居禪師を招聘し、禪師は同年八月入山し、改めて瑞巖圓福寺と號し、禪師を以て中興開山とした。
- 別室の跡——把不住軒のこと。封内風土記卷四(明和四年)に云ふ「過長橋而入幽徑、苔蘚露深、岩崖路滑、上有坐禪堂、傍有二亭、號把不住軒、希賢(雲居名)往昔棲遲之處、下略」
- 坐禪石——之は舊記に見當らない。恐らく坐禪堂附近の石を、道途の人の教へるまに記したのであらう。
- はた——又。
- 世をいとふ人——僧侶。
- 落穂——五穀の穂の、刈つたのち落ち散つてあるものを云へど、爰は松などの落葉を云つたのであらう。
- 松笠——松の實。松ふぐり。
- あらたむ——あらたまると云ふべきを、あらたむ(他動詞)といふのは無理のやうなれど、文を弛ませぬ効果がある。「荒海や佐渡に横たふ天の川」の横たふも、正しくは、横たはると云ふべきなれど、かくては緊張しないのである。

歸つて宿に泊つてみる
と、窓を開け放つた階
上で、自然の風光の中
に旅寝するのは、不思議
なくらゐる微妙な心持
がする。

松島や鶴に身をかれ
時鳥 曾良

自分は句吟もしない
で、眠らうとしてもね
られない。深川の草庵
を出る時、山口素堂は
松島の詩を作つて饒し
た。又原安適は松がう
ら島の歌を詠んで贈つ
てくれた。頭陀袋から
是等を取り出して讀みな
がら今夜の慰みとし

○江上——水のほとり。こゝは海のほとりを云ふ。己出。三頁参照

○二階を作りて——二階づくりでの意。

○風雲——爰は自然の風景の意。風雲は風と雲の意。他の場合には色々意に用ゐる。翁の幻住庵の記「たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して」

○松島やの句——松島にはあの白い鶴が似合はしい、ほととぎすよ。鶴に身を借りて鳴いてゆけ、聲は時鳥。姿は鶴で此の絶景を飛んで行つたらさぞ面白からうの意。

「松に鶴」といふ陳腐な臭味のあるのが疵である。さて此句は、「猿蓑集」卷二に「松島一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣」とよめりければ」といふ詞があつて、次に右の曾良の句が載つてゐる。「猿蓑さがし」卷三に「奥羽行脚の時、松島一見に祐盛法師が千鳥もかるや鶴の毛衣といふ歌を思ひ出しければといふ詞書也。句意は、身にぞしる眞野の入江に冬の來て千鳥もかるや鶴の毛衣、とよめる歌を一轉して千年の縁松に千年の壽鶴を掛合せて時鳥の句作手柄といふべし」とあるので、右の歌が無名抄にある如く註したのであるが、無名抄には斯かる歌は無ないのである。たゞ祐盛法師の歌として「千鳥もきけり鶴の毛衣」といふ下句が載つてゐるのみである。無名抄上、「千鳥鶴の毛衣をきる事」の條に云ふ「俊惠法師が家をば歌林苑と名づけて月ごとに會し侍りしに、祐盛法師その會所にて、寒夜千鳥といふ題に、千鳥もきけり鶴の毛衣といふ歌をよみたりければ、人々めづらしなごいふほごに、素覺といひし人、たび／＼之を詠じて、おもしろく侍り、たゞし寸法やはす侍らんといひたりけるに、ごよみになりて、笑ひの、しりければ、ことさめてやみにけり。いみ

た。又杉山杉風や中川
濁子が饒にくれた發句
が入つてゐる。

【評】

「いかなる人とは知ら
れずながら先づなつか
しく立ちよる」所に芭
蕉が閑寂を羨む心が察
せられ、「窓を開き二階
を作りて、風雲の中に
旅ねするこそ怪しきま
で妙なる心地はせらる
れ」に、夢寐にも忘れ
得なかつた松島の風光
に陶醉してゐる心持が
窺はれる。

じき秀句なれど、かやうになりぬれば、かひなきものなりとなん祐盛かたり侍りし」とあつて、無名抄には歌の下句のみがあつて、上句は不明である。

○舊庵——江戸深川の芭蕉庵。

○素堂——姓は山口。名は信章。字は子晋。通稱は官兵衛。甲斐國甲府の人。江戸に住む。林春齋の門に入り經學を受け、詩を善くし、連歌を季吟に學び、俳諧に於ては芭蕉、宗因等と交遊した。享保元年歿、年七十五。素堂の詩に「夏初松島自清幽。雲外杜鵑聲未同。眺望洗心都似水。可憐蒼翠對青眸。」之れであらう。

○原安適——醫者。江戸深川に住む。芭蕉が蒲口に與へた手紙の中に「とかくするうちに山口素堂原安適など詩歌のすきもの入り來りて」（笈日記）歌は傳らない。

○松がうら島——今の宮城郡七濱村大字葛蒲田濱の海濱を云ふ。風景の美を以て古來稱せられた。多くの古歌がある。原安適は松島を松がうら島のことにして歌を詠んで送つたのかも知れない。古歌に徴するに、松島と松がうら島とは異なる。三千風の「行脚文集」卷七、貞享四年の條に、景題二十八の中に松が浦島を入れてゐるから、元祿の頃も松島とは別である事がわかる。備考参照。

○杉風——杉山杉風。己出。第六頁参照。

○濁子——姓は中川。通稱は甚五兵衛。俳號は濁子。美濃國大垣の人。蕉門。

【備考】

松がうら島——奥羽觀蹟開老志（享保四年）に云ふ「去三千賀地二十餘里在青松濱、佳

境絶景不減。松島、往古島上有紫藤、而得佳名、今更無知之者、中略、濱南斷岸千尺、長灣數仞、白浪濯石磯、碧波染沙汀、山頭有觀江臺、登此見、北隅南方西關東溟、盡入于吟眸、中略、水濱以東阻沙場、邊漁家、曉岩相峙、長松相連、岩下有島、上戴蒼巖、是所謂松浦島也、東北有小島、號二鷗鷺、分前後、而爲二兩島、其曰二舞踏、其東曰二英雄島、中略、青松濱西曰二菖蒲田、南西曰二水門濱、有善遊堂、市川邊其南汀、下略

新續古今集、春下、文永二年白河殿にて人々題を探りて七百首歌つかうまつりけるついでに浦藤をよませ給ひける、後嵯峨院御製、心あるあまやうをけむ春、ことに藤咲かゝる松か浦しま。

夫木集、藤花のさかりなる松のもとにて、源有仲、ふち浪のかゝれる松か浦にきて見るめにあかぬあまとなりぬる。

後撰集、雜一、素性法師、音にきく松か浦しまけふぞ見るむへ心あるあまはずみけり。

陸奥千鳥（元祿九年）に云ふ「これより末の松山。向ふに海原見ゆ。千引の石此の邊といへども、所の者曾て知らず。一里行いて松の浦島。これより鹽釜への道筋云々」之に據るも、松が浦島は今の菖蒲田濱である。

二八 十一日瑞岩寺に詣づ

十一日、瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世の昔眞壁の平

【口譯】

十一日瑞岩寺に參詣し

四郎出家して入唐歸朝の後開山す。其の後雲居禪師の徳化によりて、七堂葺改まりて、金碧莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。かの見佛聖の寺はいづくにやと慕はる。

【語釋】

○瑞岩寺——瑞巖寺。今は臨濟宗の寺で、洛東妙心寺に屬し、青龍山瑞巖圓福寺と號する。沿岸の松島村にある。寺傳によれば、淳和天皇天長五年圓仁創立し、當時松島寺と稱す。最明寺時頼天臺宗を改めて禪宗となし、法身（俗名眞壁平四郎）を住ませ松島山圓福寺と號す。慶長十年伊達政宗之を再興し、同十四年落成、侮晏住持となり、寛永十三年雲居禪師中興開山となる。

○眞壁の平四郎——僧名は法身。入宋して法を經山の無準に受け、歸朝後最明寺時頼の命を受けて此寺の住持となつた。（觀聞志に據る）僧師練の元享釋書には法身を法心となし、又多少傳を異にする。法身は、ほつしんと發音する。奥羽觀蹟聞老志に云ふ「聞之寺僧、法身法心本一人而當作身、蓋師練傳聞之誤也」法身の偈に曰く、遠上經山、分風月、歸開圓福大道場、法身透得無一物、元是眞壁平四郎。備考參照。

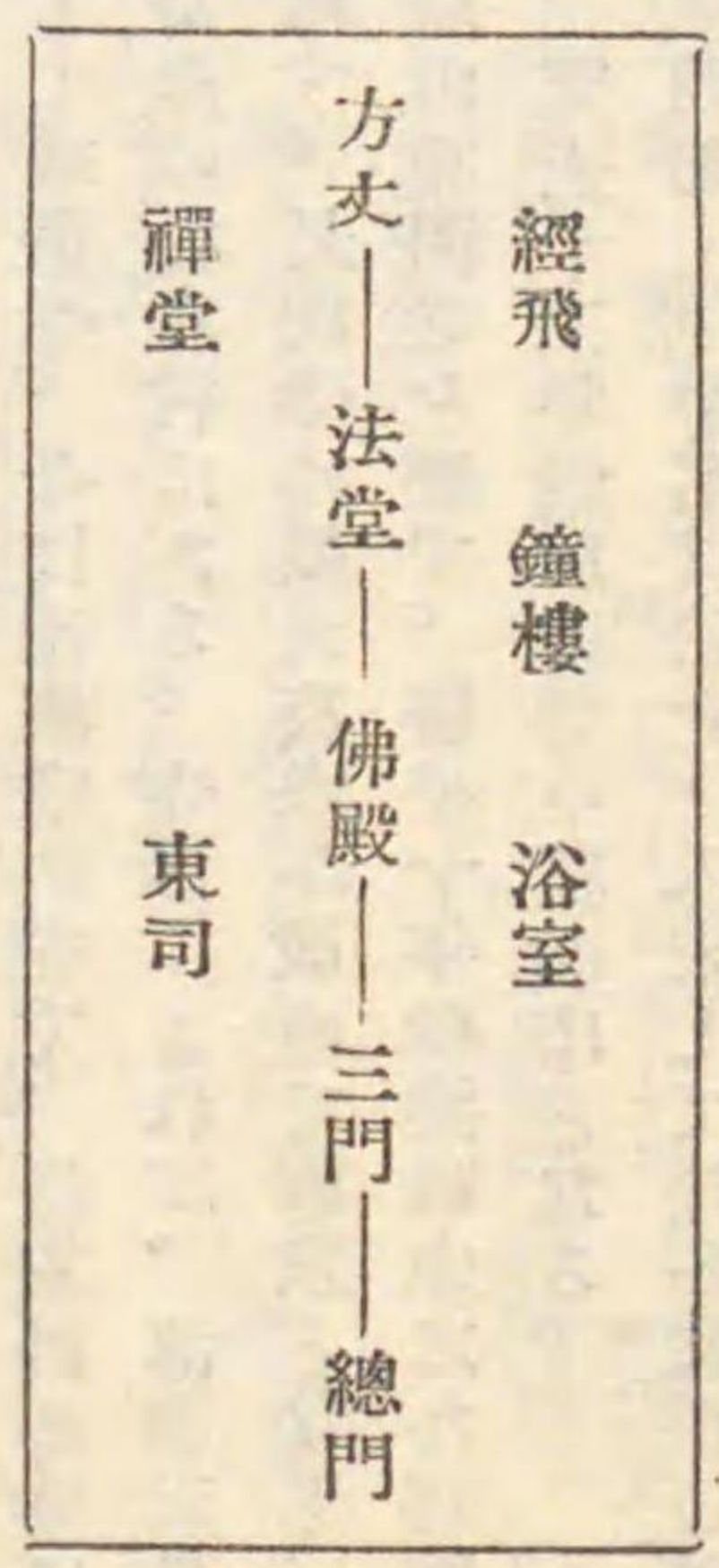
○入唐——唐は爰は單に支那の意に用ゐてゐるやうなれど、委しくは、入宋とすべき

た。昔眞壁平四郎といふ人が僧となり支那に留學し、歸朝の後、始めて禪宗の寺に改めた。此の人が當寺三十二世の住持である。其の後雲居禪師の高徳普及の結果、堂宇全部の改築が成り、金碧の色彩や裝飾がきら／＼と輝き、極樂淨土出現ともいふべき大刹となつた。かの見佛上人の住んだ寺はどのあたりであらうかと、慕はしく思はれる。

【評】

瑞巖寺も、長々と縁起などを書かずに、簡單に切りあけてゐるのが却つてよい。

である。
○開山す——寺を創立した。爰は改めて禪宗にして寺域を擴張した事を云ふ。
○徳化——徳に依つて教化すること。
○七堂——七堂伽藍。寺の堂宇の具備したるもの。宗派に依つて多少異なる。必ずしも七つの堂に限らない。今禪宗に就いていへば、鎌倉足利時代に至り、一定の典型が出来た。左圖の如し。



妙心寺、京都の五山等は其適例である。最も古い典型は百濟様七堂伽藍といひ、法隆寺は其好例。又唐風に做つたのを唐様七堂伽藍といひ、東大寺は其好例である。伽藍は梵語、字は當字で、寺のこと。
○薨——瓦葺の屋根。薨改まるとは改築の意である。
○金碧——金や青色。
○莊嚴——いかめしく立派な意から轉じて、寺院佛像等の立派な裝飾を云ふ。榮華物語、玉飾、「堂のしやうこん、例のいとめでたし」无量壽經「奇妙珍異、莊嚴校飾」

○佛土成就——佛土は佛の住む處。佛土が出来上つたこと。佛土は宗に依つて其種類を異にすれども、佛の住む國土なる點は同じである。法華經方便品「十方佛土中唯有一乘法」
○見佛聖——見佛上人。雄島に住んだ僧。精勵苦練すること十二年間、其の間法華を誦すること六萬部に及んだといふ。鳥羽院の御代の人。八十二歳で寂した。(元享釋書に據る)ひじりは高僧を云ふ。又普通の僧をも云ふ。備考参照。

【備考】
眞壁平四郎——元享釋書卷第六、淨禪三之一に云ふ「釋法心過壯歲出家、不知文墨、聞三納子之稱宋地禪行、駕商舶入臨安、徑登經山、見佛鑑禪師、鑑於圓相中、書一丁字示之、心止席下、單提研究、性堅硬耐禪坐、骨髀腫爛而不撓者九年、初時三丁相、於萬物中現三丁字、心不屑漸經三歲餘、席始得平穩、歸朝居三奥州松島、臨終先七日謂徒曰、某日當取滅、然心無恙、侍僧不信、到斯齊罷坐禪床、侍僧乞遺偈、心元不克書、即喝曰、來時明々、去時明々、是々何物、止而、不レ言後句、侍僧曰、猶缺一句、望足之、心應聲喝一喝、泊然而化。」
見佛聖——元享釋書卷第九感進四之一に云ふ「釋見佛居三奥州松島、其地東溟之濱、小嶼十百數、曲洲環浦、奇峯異石、天下之絕境也、其尤者曰三松島、佛結茅而居、精勵苦練一十二年、其間誦法華滿三六萬部、其後不計數、專一持誦、世曰淨三六根、役使鬼物、屢顯靈應、天仁帝(鳥羽帝年號)聞道譽、賜佛像寶器、而旌異之、依茲土人改三松島曰御島、蓋境得人而顯、又人因境而傳也、年八十二終。」之に依れば、千松島を鳥羽院の時御島と改めたとあるが、誤である。後拾遺集、戀